

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第254集

上甲子遺跡発掘調査報告書

鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

上甲子遺跡発掘調査報告書

鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成5年度の岩手県教育委員会のまとめでは8,700箇所を超える遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました鷹生ダム建設事業を例にあげるともなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護、保存と地域開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本書は鷹生ダム建設事業に関連して、平成6年度・7年度におよぶ発掘調査を実施した大船渡市上甲子遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は五葉山山麓の崖状地上に立地し、縄文時代と弥生時代の集落跡であることが明らかになりました。特に沿岸南部地域においては稀な弥生時代初頭の竪穴住居跡のほか、立石を伴う縄文時代後期中葉の竪穴住居跡などが発見され、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望します。

最後になりましたが、これまで発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手県土木部鷹生ダム建設事務所、大船渡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成9年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は岩手県大船渡市日頃市町字上甲子1の1～6ほかに所在する上甲子遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、鷹生ダム建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手県土木部鷹生ダム建設事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はNF18-0327、調査略号はKK-94・KK-95である。
4. 調査面積は平成6年度が1,930㎡、7年度が1,710㎡である。野外調査期間は平成6年8月10日から11月11日、平成7年4月13日から6月15日である。
5. 野外の発掘調査は平成6年度は大道篤史・斉藤邦雄、平成7年度は大道篤史・鎌田勉が担当した。室内整理は「I 調査に至る経過」を高橋興右衛門が、他を大道篤史が担当した。
6. 本遺跡で検出された遺構の種類および遺構数は次のとおりである。

縄文時代後期中葉の竪穴住居跡5棟（うち2棟の住居跡に立石を伴う）
縄文時代晩期末～弥生時代初頭の竪穴住居跡6棟 竪穴状遺構6基 土壇43基
焼土遺構5基 配石・立石・集石遺構4基
7. 分析・鑑定は次の方々へ依頼した。

石材鑑定	佐藤二郎氏（長内水源工業株式会社）
灰像分析	バリノサーヴェイ
火山灰各種分析	古環境研究所
顔料分析	小山陽造氏（八戸工業高等専門学校）
8. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。
9. 発掘調査および室内整理に関しては次の機関と個人のご協力とご教示をいただいた（敬称略）。

大船渡市教育委員会 熊谷常正（盛岡大学） 小田野哲恵 佐藤嘉広（岩手県教委）
佐々木勝（岩手県立博物館） 金野良一（大船渡市立博物館）
10. 本遺跡から出土した資料および調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

[本文]

I 調査に至る経過	3	3 土坑	34
II 遺跡の立地と環境	5	4 竪穴状遺構	47
1 遺跡の位置	5	5 焼土遺構	51
2 地形	5	6 配石・集石・立石遺構	53
3 基本層序	5	7 柱穴群	57
4 周辺の遺跡	6	8 遺構外の出土遺物	68
III 調査・整理の方法	9	V まとめと考察	108
1 野外調査の方法	9	付録	120
2 室内整理の方法	9	1 灰像分析報告	120
IV 検出された遺構と遺物	13	2 火山灰分析報告	122
1 縄文時代の竪穴住居跡	13	3 顔料分析報告	123
2 弥生時代の竪穴住居跡	22	報告書抄録	181

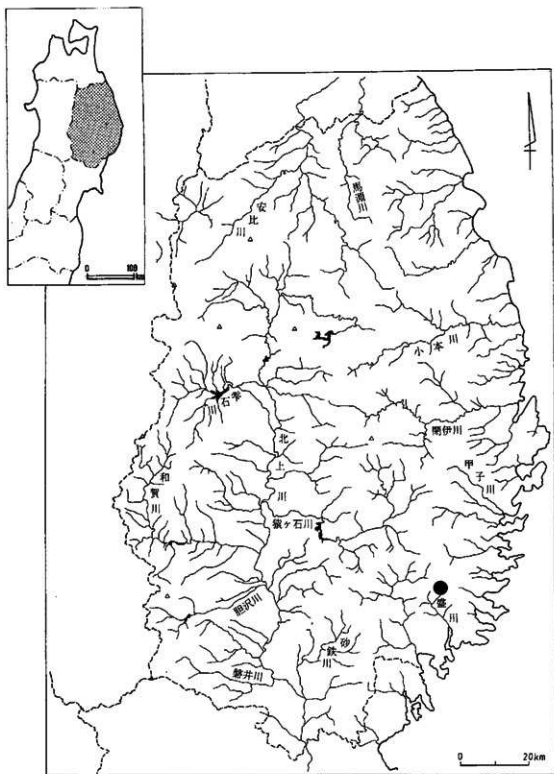
[図版]

第1図 岩手県全図	1	第24図 RE01竪穴状遺構	47
第2図 周辺の地形	2	第25図 RE02～RE04竪穴状遺構	49
第3図 地形分類図	4	第26図 RE05竪穴状遺構	50
第4図 基本層序	6	第27図 RE06竪穴状遺構	51
第5図 周辺の遺跡位置図	8	第28図 RF01～05焼土遺構	52
第6図 遺構全体図	11・12	第29図 RH01集石遺構	53
第7図 RA01竪穴住居跡	14	第30図 RH02配石遺構	54
第8図 RA01・RA02立石実測図	15	第31図 RH03立石遺構	55
第9図 RA02竪穴住居跡	17	第32図 RH04集石遺構	56
第10図 RA03竪穴住居跡	19	第33図 遺構内出土遺物 (RA01・RA02)	59
第11図 RA04竪穴住居跡	20	第34図 遺構内出土遺物 (RA02～RA05)	60
第12図 RA05竪穴住居跡	21	第35図 遺構内出土遺物 (RA05・RA06)	61
第13図 RA06竪穴住居跡	23	第36図 遺構内出土遺物 (RA07・RA08)	62
第14図 RA07竪穴住居跡	25	第37図 遺構内出土遺物 (RA08)	63
第15図 RA08竪穴住居跡	27	第38図 遺構内出土遺物 (RA09・RA10)	64
第16図 RA09竪穴住居跡	29	第39図 遺構内出土遺物 (RA10・RA11)	65
第17図 RA10竪穴住居跡	31	第40図 遺構内出土遺物 (RA11・その他の遺構)	66
第18図 RA11竪穴住居跡	33	第41図 遺構内出土遺物 (その他の遺構)	67
第19図 RD01土坑～RD12土坑	42	第42図 遺構外出土土器(1)	78
第20図 RD13土坑～RD21土坑	43	第43図 遺構外出土土器(2)	79
第21図 RD22土坑～RD32土坑	44	第44図 遺構外出土土器(3)	80
第22図 RD33土坑～RD37・39土坑	45	第45図 遺構外出土土器(4)	81
第23図 RD38・40土坑～RD43土坑	46	第46図 遺構外出土土器(5)	82

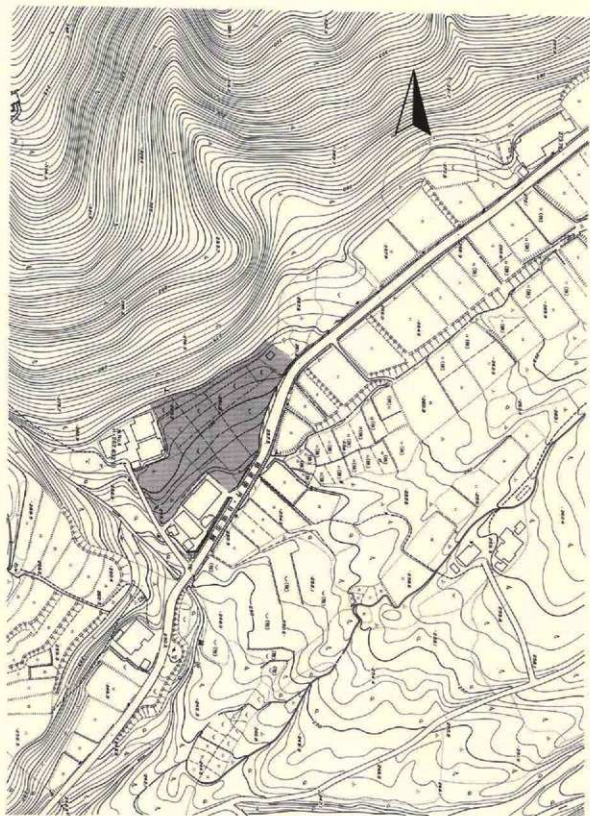
第47図	遺構外出土土器(6)	83	第55図	遺構外出土土器(4)	91
第48図	遺構外出土土器(7)	84	第56図	遺構外出土土器(5)	92
第49図	遺構外出土土器(8)	85	第57図	遺構外出土土器(6・土製品)	93
第50図	遺構外出土土器(9)	86	第58図	遺構外出土土器(1)	94
第51図	遺構外出土土器(0)	87	第59図	遺構外出土土器(2)	95
第52図	遺構外出土土器(1)	88	第60図	遺構外出土土器(3)	96
第53図	遺構外出土土器(2)	89	第61図	遺構外出土土器(4)	97
第54図	遺構外出土土器(3)	90	第62図	立石を伴う住居跡	113・114
			第63図	変形工字文分類図	117・118

[写真図版]

図版 1	遺跡全景	126	図版29	RE01・RE02竪穴状遺構	154
図版 2	遺跡遺景・調査前風景	127	図版30	RE02～RE04竪穴状遺構	155
図版 3	基本層序	128	図版31	RE05竪穴状遺構	156
図版 4	RA01竪穴住居跡	129	図版32	RE06竪穴状遺構	157
図版 5	RA01・RA02竪穴住居跡	130	図版33	RF01～RF04焼土遺構	158
図版 6	RA02竪穴住居跡	131	図版34	RF05焼土遺構、RH01集石遺構	159
図版 7	RA01・RA02竪穴住居跡立石	132	図版35	RH02～RH03配石遺構	160
図版 8	RA03竪穴住居跡	133	図版36	RH04集石遺構	161
図版 9	RA04・RA05竪穴住居跡	134	図版37	遺構内出土遺物 (RA01・RA02)	162
図版10	RA05・RA06竪穴住居跡	135	図版38	遺構内出土遺物 (RA02～RA06)	163
図版11	RA06竪穴住居跡	136	図版39	遺構内出土遺物 (RA06～RA08)	164
図版12	RA07竪穴住居跡	137	図版40	遺構内出土遺物 (RA08～RA10)	165
図版13	RA08竪穴住居跡	138	図版41	遺構内出土遺物 (RA10・RA11)	166
図版14	RA08・RA09竪穴住居跡	139	図版42	遺構内出土遺物 (RA11・その他の遺構)	167
図版15	RA09竪穴住居跡	140	図版43	遺構外出土土器(1)	168
図版16	RA10竪穴住居跡	141	図版44	遺構外出土土器(2)	169
図版17	RA10・RA11竪穴住居跡	142	図版45	遺構外出土土器(3)	170
図版18	RA11竪穴住居跡	143	図版46	遺構外出土土器(4)	171
図版19	RD01～RD04土坑	144	図版47	遺構外出土土器(5)	172
図版20	RD05～RD08土坑	145	図版48	遺構外出土土器(6)	173
図版21	RD09～RD12土坑	146	図版49	遺構外出土土器(7)	174
図版22	RD13～RD16土坑	147	図版50	遺構外出土土器(8)	175
図版23	RD17～RD21土坑	148	図版51	遺構外出土土器(9)	176
図版24	RD22～RD26土坑	149	図版52	遺構外出土土器(0)	177
図版25	RD27～RD30土坑	150	図版53	遺構外出土土器(0)・土製品・石器(1)	178
図版26	RD31～RD34土坑	151	図版54	遺構外出土土器(2)	179
図版27	RD35～RD38土坑	152	図版55	遺構外出土土器(3)	180
図版28	RD39～RD43土坑	153			



第1図 岩手県全図



第2図 周辺の地形

I 調査に至る経過

上甲子遺跡は「盛川総合開発事業 鷹生ダム建設工事」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、大船渡市の日頃市地区の五葉山を水源とする盛川の上流域を総合的に開発することを目的とする開発事業であるが、その一貫として鷹生ダムの建設によって水没による付け替え道路の建設なども実施されることとなった。

当事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、当該事業が採択確定したのを受けて平成元年度から岩手県土木部河川課と岩手県教育委員会との間で協議を重ねられ、その結果、取り敢えず平成元年度内に事業実施区域内の全面にわたる分布調査を実施することとなり、それを受けた岩手県教育委員会では年度内に分布調査を実施した。

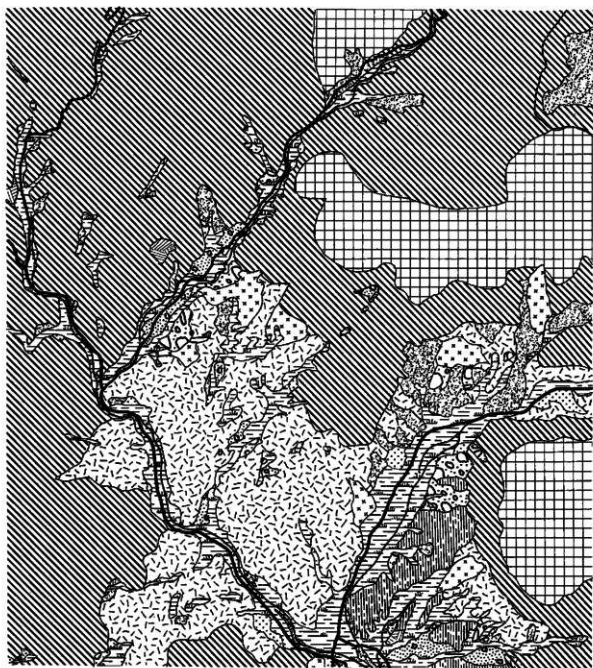
分布調査の結果、貯水池内に3箇所、付け替え道路予定地内に6箇所の併せて9箇所が、埋蔵文化財の包蔵地である可能性のある地点の存在が明らかとなり、その結果は岩手県教育委員会から岩手県土木部河川課に報告されたが、今後の取り扱いについては両者でさらに協議が進められ、その結果事業を施工する場合には事前に試掘調査を実施し、その結果によって本調査の是非についての結論を求めることとした。











水没地に位置する当遺跡の取り扱いについては、平成5年度に岩手県土木部鷹生ダム建設事務所から岩手県教育委員会に対して試掘調査の実施について依頼したが、依頼を受けた岩手県教育委員会では平成5年6月に試掘調査を実施し、その結果は平成5年6月に埋蔵文化財包蔵地であり本調査が必要である旨、を付記して岩手県土木部鷹生ダム建設事務所に報告された。

報告を受けた岩手県土木部鷹生ダム建設事務所では、岩手県教育委員会からの埋蔵文化財発掘調査に係る問い合わせに対して、調査を実施してほしい旨、の回答をした。回答を受けた岩手県教育委員会は岩手県土木部鷹生ダム建設事務所に対して平成6年度に発掘調査を実施し、実際の調査は文化振興事業団が担当する旨を通知し、併せて(財)岩手県文化振興事業団にも同様の通知をした。通知を受けた両者は、発掘調査の具体について協議・打合せをした後、平成6年8月1日付けで岩手県土木部鷹生建設事務所長と(財)岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成6年8月10日～同年11月11日まで現地調査を実施したが、当初調査対象面積の2,200㎡全域について調査を終了できずに残る270㎡と今年度範囲に入っていない部分と合わせて次年度改めて調査することとした。

平成7年度の調査については、平成7年4月1日付けで岩手県土木部鷹生ダム建設事務所長と(財)岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成7年4月13日～同年6月15日まで現地調査を実施し、調査範囲全域の調査を終了した。

報告書の作成に係る室内整理は、各調査年次の冬季間に実施し、報告書の発刊は平成8年度とした。



- | | | | | | |
|---|------------|---|-------|---|--------|
|  | 大起伏山地 |  | 中起伏山地 |  | 小起伏山地 |
|  | 山麓地及び他の横斜面 |  | 丘陵地 |  | 砂礫段丘Ⅰ |
|  | 砂礫段丘Ⅱ |  | 扇状地 |  | 扇状性扇状地 |
|  | 谷底平野及び氾濫平野 |  | 浜及び河原 |  | 人口改変地 |

0 2500m

第3図 地形分類図

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

上甲子遺跡は岩手県大船渡市日頃市町字上甲子に所在する。本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「盛」(NJ-54-14-6)の図幅に含まれ、北緯約39°5′、東経約141°43′付近にある。

本遺跡の所在する大船渡市は岩手県の西側に細長く広がる北上山地の南東端に位置する。またリアス式海岸として有名な三陸陸中海岸の南部にあたる。入り江が発達しており、良港も多く、水産業も盛んである。また県内において気候は温暖であり、冬でも積雪となることは稀である。

大船渡湾には市街地を北西から流れてくる盛川が注いでいる。支流として立根川、大野川、鷹生川などをもち、ともに短く、急流の特徴を持つ河川である。

交通手段として、市内を南北に縦断する一般国道45号線が通っている。また盛岡-大船渡を結ぶ一般国道107号線が延びており、この2幹線が重要な交通的役割を果たしている。鉄道として岩手開発鉄道が沿岸、内陸側の都市と結んでいる。本遺跡は岩手開発鉄道日頃市駅の北東約5kmの距離に位置し、県道唐丹日頃市線沿い北側に位置する。

大船渡市は昭和27年に盛町を始めとした旧7か町村が合併して成立した都市であり、隣接都市として市の東側に三陸町、北側に釜石市・住田町、西側に陸前高田市がある。

2. 地形

大船渡市は北上山地南東部に当たり、市街地が広がる大船渡湾の外側を取り囲むように、北は五葉山(1,341m)、東は今出山(756m)、西は水上山(874m)が連なっており、山地の占める割合が高い。山地は中・古生層から形成され、県内でも有名な化石の産出地となっている。

市内を流れる主流河川として盛川があげられるが、その支流として立根川・盛川があげられ、これらは地質構造に従って形成された通称河川である。河口部付近を中心に細長く低地が広がっている。河川の注ぎ口となっている大船渡湾は盛川の延長による溺れ谷であり、典型的なリアス式海岸である。小さな入り江が断続的に広がり、変化に富んだ海岸線を呈している。本流沿いでは、日頃市付近まで狭い谷底平野が続き、鷹生川に入って沖積段丘を含む幾分広い低地になる。

遺跡は市の北東部に広がる五葉山山系のすそ野付近に広がる小規模な緩斜面上に立地する。緩斜面は山と山との間に小規模に発達した崖線性扇状地である。県道をはさんで南方は鷹生川の氾濫による谷底平野、及び氾濫平野を呈している。遺跡斜面の中央部から下部にわたって鷹生川の旧河床にあたり、大型の礫が堆積している。本調査区の標高は257m~265mであり、南方250mにある鷹生川との比高は約20mである。遺跡の西側は沢によって区画され、南側にはかつて宅地が二軒あったが、現在は取り壊されており、調査前は荒地の状態であった。

3. 基本層序

遺跡が緩斜面上に立地することから基本層序も一様ではない。斜面上部側は土砂の流出による再堆積が顕著に見られ、攪乱を受けている箇所も多く見られた。概ね8層に細分される。

第I層 暗褐色土(層厚10~20cm) 表土かつて畑地であった部分が多く、耕作土が主体となっている。

- 小礫を多く含み、特に北西側が厚い。
- 第Ⅱ層 黒褐色土(層厚20~50cm) 縄文時代晩期終末から弥生時代前半の時期の遺物を主に含む。斜面上部の北側には特に厚く堆積しており、部分的に暗褐色土に近い層が帯状に入る。
- 第Ⅲ層 暗褐色土(層厚10~30cm) 縄文時代後期中葉の時期の遺物を主に含む。斜面中央部に比較的厚い堆積が見られた。Ⅲ層上層には遺跡の斜面上部北西側から斜面下部南東側にかけて黄褐色土の堆積が見られたが、この層は斜面上部の地山層の流出による再堆積であると思われる。
- 第Ⅳ層 ぬい黄褐色土(層厚10~30cm) 斜面下部に広がる層であり、斜面上部において見ることはできない。小礫が多く混じる層である。
- 第Ⅴ層 褐色土(層厚約30cm) 層中に火山灰をマトリックスに含む。この火山灰は縄文時代前期前半に堆積したと考えられている中礫火山灰と考えられる。層中に縄文時代前期の遺物を含む。遺跡中央部では第Ⅴ層が調査前より露出していた。
- 第Ⅵ層 暗赤褐色土(層厚5~10cm) 調査区中央平坦部の北側のみ広がりが見られ、他の区域には見られない。小礫・砂が多く含まれる。
- 第Ⅶ層 灰黄褐色土(層厚約15cm) 拳大~半頭大の角礫を多く含む。縄文時代早期の遺物をわずかに含む。
- 第Ⅷ層 ぬい黄褐色土 粘土質の非常に堅い層。
- 第Ⅷ層 黄褐色土 礫・砂を多く含む。地山層

(参考文献)

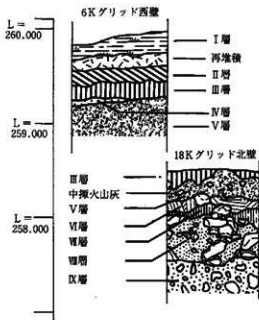
- 北上山系開発地域土地分類基本調査「壺」、岩手県企画開発室
 「大船渡市史」第1巻・考古編、大船渡市
 「猪川館跡」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター第203集

4. 周辺の遺跡

岩手県遺跡登録台帳によれば、大船渡市の遺跡は現在までに96遺跡確認されている。市内の遺跡の多くは大船渡湾から盛川や立根川に沿って形成された緩斜面が開析された段丘状に分布している。縄文時代を主とする遺跡が大半であり、特に貝塚については大船渡湾を取り囲むように分布し、大洞貝塚や長谷堂貝塚・下船渡貝塚など著名な遺跡が多い。上甲子遺跡周辺には縄文時代前期の遺跡として有名な関谷洞窟遺跡や麿生ダム関連で発掘調査された上麿生遺跡がある。

ここでは岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡台帳をもとに主に大船渡市内の遺跡についてふれてみたいと思う。

市内の遺跡の種類は散布地42、貝塚5、城館8、集落跡3、洞穴1、墳墓1、祭祀跡1となっている。

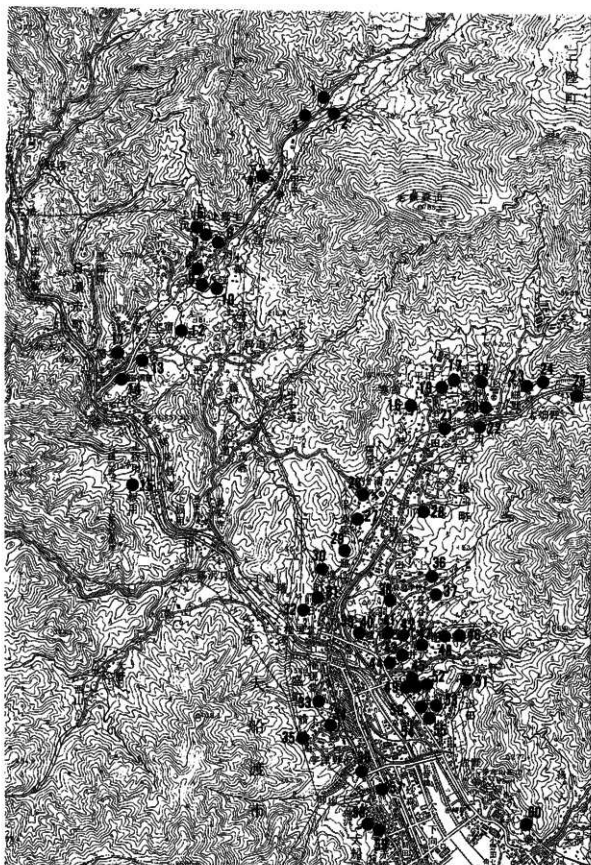


第4図 基本層序

「岩手県遺跡分布図」

岩手県教育委員会

NO.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	上甲子Ⅱ	散布地	縄文土器	日頃市町字上甲子
2	上甲子Ⅰ	散布地	縄文土器	日頃市町字上甲子
3	上甲子Ⅲ	散布地		日頃市町字上甲子
4	下甲子	散布地	縄文土器	日頃市町字下甲子
5	上代	散布地	縄文(中・晩期)土器	日頃市町字上代
6	麿生	集落跡	土師器、縄文土器	日頃市町字麿生
7	上麿生	集落跡	縄文(晩期)土器	日頃市町字上麿生
8	下麿生	集落跡	縄文(晩期)土器	日頃市町字下麿生
9	大野林Ⅱ	散布地	縄文土器	日頃市町字小森
10	大野林Ⅰ	散布地	縄文(晩期)土器	日頃市町字麿生
11	関谷	散布地	縄文(後・晩期)土器	日頃市町字関谷
12	上槽	散布地	縄文(後期)土器	日頃市町字上槽
13	松館	城館跡	郭	日頃市町字関谷
14	関谷洞窟住居跡	洞穴	縄文(早・前・中・後・晩期)土器、弥生土器	日頃市町字関谷
15	坂用	散布地	縄文土器	日頃市町字中板用
16	上手	散布地	縄文(後・晩期)土器、石鏃、石斧	立根町字野尻
17	萱中Ⅱ	散布地	縄文土器	立根町字萱中
18	萱中Ⅰ	散布地	土器	立根町字萱中
19	野尻Ⅰ	散布地	土器	立根町字野尻
20	萱中Ⅰ	散布地	土器	立根町字萱中
21	萱中Ⅳ	散布地	縄文(中期)土器	立根町字萱中
22	沼田	散布地	縄文(後・晩期)土器	立根町字沼田
23	細野Ⅲ	散布地	土器	立根町字細野
24	細野Ⅱ	散布地	土器	立根町字細野
25	大畑野	散布地	土器	立根町字大畑野
26	久保	散布地	土器	立根町字久保
27	桑原	散布地	土器	立根町字桑原
28	川原城	城館跡	郭、空堀	立根町字川原
29	堀内館	城館跡	郭、空堀	猪川町字岩脇
30	堰口	散布地	土器	立根町字堰口
31	前田	散布地	土器	猪川町字前田
32	猪川城	城館跡	郭	猪川町字前田
33	天禅山	散布地	土器	盛町字柿ノ木沢
34	沢川	散布地		盛町字沢川
35	根ノ城(根岸城)	城館跡	郭	盛町字津野沢
36	上富岡	散布地	縄文土器、土師器、石鏃	猪川町字富岡
37	畑中	散布地	縄文(後期)土器、石器	猪川町字富岡
38	長河	散布地	縄文(中期)土器、弥生土器	猪川町字富岡
39	殿位	墳墓		猪川町字磯礎石
40	迎館	城館跡	郭	猪川町字磯礎石
41	下富岡	散布地	縄文土器、石鏃	猪川町字富岡
42	名高根	散布地	縄文(中・後期)土器、土師器、鉄鏃	猪川町字長河
43	八幡	散布地	縄文(中期)土器	猪川町字中井沢
44	下中井	散布地	縄文(前期)土器、石鏃	猪川町字中井沢
45	中井貝塚	貝塚	縄文(後・晩期)土器、土師器、須恵器	赤崎町字中井
46	善藏敷	散布地	縄文(中期)土器、須恵器	猪川町字善藏敷
47	長谷堂貝塚群	貝塚	縄文(中期～晩期)土器、弥生土器、骨角器	猪川町字長谷堂・中井沢
48	小山長根	散布地	縄文(前期初頭)土器、土師器	猪川町字善藏敷
49	長谷寺	寺院跡	縄文土器、土師器、須恵器	赤崎町字中井
50	向山	散布地	縄文土器、土師器	赤崎町字中井
51	沢田	散布地	縄文土器、土師器	赤崎町字沢田
52	中井	散布地・キャンプ	縄文(中・後期)土器	赤崎町字中井
53	館	城館跡	郭、空堀	赤崎町字沢田
54	赤洞	散布地	土師器、須恵器	赤崎町字中井
55	沢田貝塚	貝塚	縄文(前期)土器、土師器	赤崎町字沢田
56	田茂山城	城館跡	郭	盛町字下館下
57	池ノ森	散布地	土師器、磨手刀	大船渡町字池ノ森
58	富沢貝塚Ⅰ	貝塚	縄文(晩期)土器、石器、骨角器	大船渡町字池ノ森
59	富沢貝塚Ⅱ	貝塚	縄文(晩期)土器	大船渡町字富沢
60	尾久根山	散布地	縄文(中・後期)土器、石皿	赤崎町字跡浜



第5图 周边遗址位置图

Ⅲ 調査・整理の方法

1. 野外調査の方法

(1) グリッドの設定と遺構名

基準点測量を委託し、公共座標軸を利用してグリッドを設定した。上甲子遺跡の調査区は不整な細長い形状を呈しており、基準線となる中心線は可能な限り調査区の中心部に位置するように任意の基準点2点を設定した。基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、および杭高は以下の通りである。

基準点1 X = +75.700.000m, Y = -93.250.000m, H = 261.302m

基準点2 X = +75.748.000m, Y = -93.250.000m, H = 257.762m

グリッドの設定にあたっては、基準点1と基準点2を結ぶ直線とこれに直交する直線を座標の基軸線とし、それぞれ4m毎に区画した。グリッドは西から東へA～R、南から北へ1～24とし、両者の組み合わせによってグリッド名を2A区、3C区などのように呼称した。遺構名は以下のように呼称し、遺構の種類毎に通し番号をつけた。

・ 竪穴住居跡 RA ・ 焼土遺構 RF ・ 土坑 RD
・ 配石・立石・集石遺構 RH ・ 竪穴状遺構 RE

(2) 粗掘・遺構検出と精査

検出面までの深さ及び層序の確認のため、3本のトレンチを中央斜面上部、中央斜面下部、中央部平坦面に入れた結果、斜面上部は層厚も厚く、遺物も多く出土するのに対し、斜面下部側は層が非常に多く、遺物を含む層の厚さも薄いことが確認された。よって斜面上部側の方から遺構精査を優先的に行っていた。

調査区の中央部の平坦面は調査前の段階からすでに大きな攪乱を受けている部分もあり、その攪乱部分と表土に散乱している雑物を重機によって剃りだすのは、全面にわたって手作業で掘り下げを行った。遺構検出はⅡ層・Ⅲ層・Ⅴ層で行い、最終的には縄文時代早期の遺物を含むⅥ層まで掘り下げを行い、遺構・遺物の検出・精査を行った。

検出された遺構は、基本として住居跡・竪穴状遺構は4分法、土坑その他の遺構は2分法で精査した。柱穴状ピットの多くは平面図作成のみとし、断面図は実測せず、注記はフィールドカードへの記帳のみですませた。

遺物の取り扱いとして、遺構外出土の遺物については、グリッド毎に出土した層位を記入して取り上げた。また遺構内出土の遺物は、出土位置を記入し、埋土中の層位の確認できたものは層位毎に取り上げ、床面出土の遺物は、写真撮影・図面作成を行い、その後に取り上げた。

(3) 実測方法・写真撮影

実測はグリッド軸に合わせて1mメッシュを基本とする簡易造り方測量で行ったが、一部平板測量も併用した。実測図は20分の1縮尺で平面図と断面図を作成した。ただし出土遺物、炉、立石・集石遺構などについては10分の1縮尺で実測図を作成した。野外調査における写真撮影は35mm版2台(モノクロ、カラーリバーサル)と6×7cm版1台(モノクロ)を使用して行った。

2. 室内整理の方法

(1) 作業手順

遺物の水洗は大半を発掘現場ですませ、一部を室内で行った。室内整理では遺構内、遺構外の順に接合、復元、石膏入れと作業を進めた。これらの作業終了時点で遺物の仕分け・登録を行い、報告書掲載分の写真撮影を行った。その後、実測、土器拓本、遺物トレースの順に作業を進め、最後に図版と写真図版を作成した。

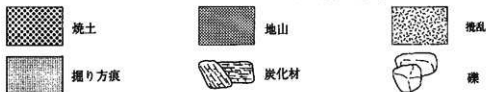
これらの作業と併行して、計画、鑑定、原稿作成を行い報告書に掲載した。

(2) 遺構

各遺構図版は基本的に以下の縮尺とし、図版にはそれぞれスケールや縮尺率を付した。

- ・ 竪穴住居跡・竪穴状遺構の平面図・断面図 1/50
- ・ 住居跡の炉の断面図 1/20
- ・ 焼土遺構の平面図・断面図 1/40
- ・ 土坑の平面図・断面図 1/40
- ・ 集石・立石遺構の平面図・断面図 1/20

またこれらの図中に使用した記号やスクリーントーンは次の通りである。



P…土器 G…溝 P₁・P₂・P₃…柱穴または柱穴状ピット

なお調査現場で上記のようにつけた遺構の名称も報告書執筆段階では大きく変動が見られる。理由として住居跡は時代ごとに整理したためであり、その他の遺構に関してはボツの遺構を排除したためである。遺構名称の変更は以下の通りである。

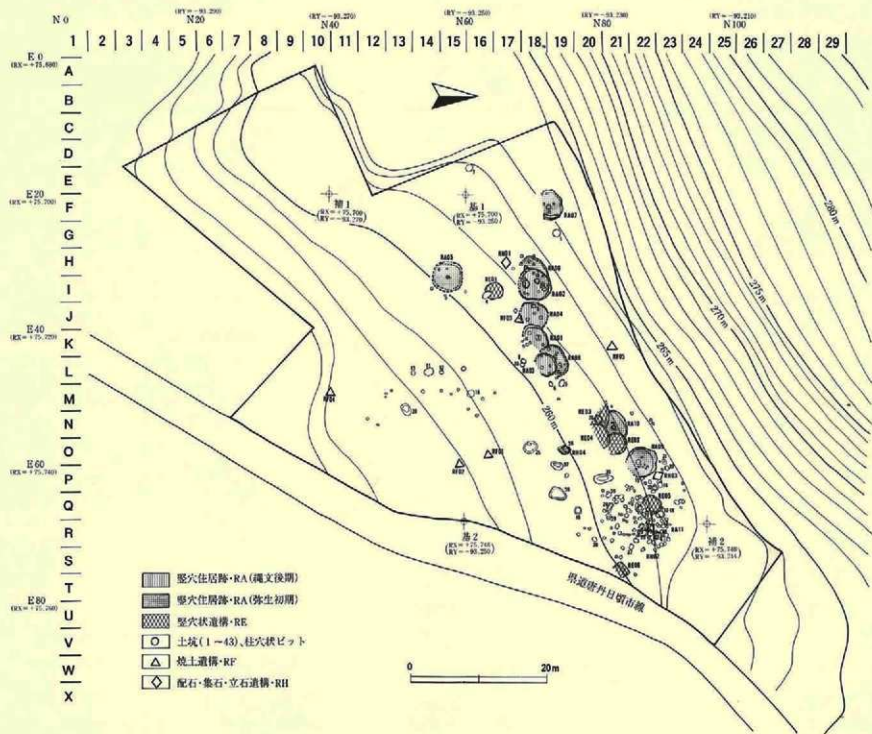
RA01竪穴住居跡→RA06竪穴住居跡、RA02竪穴住居跡→RA07竪穴住居跡、RA03竪穴住居跡→RA08竪穴住居跡、RA04竪穴住居跡→RA01竪穴住居跡、RA06竪穴住居跡→RA02竪穴住居跡、RA07竪穴住居跡→RA03竪穴住居跡、RA08竪穴住居跡→RA04竪穴住居跡

RD04土坑→RD03土坑、RD05土坑→RD04土坑、RD06土坑→RD05土坑、RD07土坑→RD06土坑、RD08土坑→RD07土坑、RD09土坑→RD08土坑、RD10土坑→RD09土坑、RD11土坑→RD10土坑、RD12土坑→RD11土坑、RD13土坑→RD12土坑、RD15土坑→RD13土坑、RD16土坑→RD14土坑、RD17土坑→RD15土坑、RD19土坑→RD16土坑、RD20土坑→RD17土坑、RD21土坑→RD18土坑、RD35土坑→RD19土坑、RD40土坑→RD20土坑、RD47土坑→RD21土坑、RD58土坑→RD22土坑、RD59土坑→RD23土坑、RD68土坑→RD24土坑、RD69土坑→RD25土坑、RD71土坑→RD26土坑、RD77土坑→RD27土坑、RD99土坑→RD28土坑、RD100土坑→RD29土坑、RD101土坑→RD30土坑、RD112土坑→RD31土坑、RD115土坑→RD32土坑、RD117土坑→RD33土坑、RD128土坑→RD34土坑、RD133土坑→RD35土坑、RD137土坑→RD36土坑、RD138土坑→RD37土坑、RD141土坑→RD38土坑、RD156土坑→RD39土坑、RD173土坑→RD40土坑、RD178土坑→RD41土坑、RD179土坑→RD42土坑、RD180土坑→RD43土坑
RF02焼土→RF01焼土、RF03焼土→RF02焼土、RF04焼土→RF03焼土、RF06焼土→RF04焼土、RF07焼土→RF05焼土
RH06立石遺構→RH03立石遺構、RD163土坑→RH04集石遺構

(3) 遺物

報告書に記載した内、土器は完形品のすべてと接合復元で実測できたものの大部分、口縁部と体部資料は文様モチーフの明瞭なものを優先し、底部資料は網代痕のあるものなどを主に取り上げた。同一遺構の破片資料は床面出土のものではできるだけ掲載した。遺構外出土では類似資料の中から選択分類している。個体数積算に関しては原則として口縁部破片で行った。土製品については出土したすべてを記載し、石器についても欠損した製品を含めすべてを記載した。掲載遺物の縮尺は以下の通りである。

- ・ 土器の実測図・拓本 1/3
- ・ 礫石器 1/3
- ・ 剥片石器・石斧 1/2
- ・ 土製品 1/3



第6図 遺構全体図

Ⅳ 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代の竪穴住居跡

RA01住居跡

遺構

〈位置〉 18Kグリッド

〈検出状況・重複関係〉 第Ⅱ層面においてプランを確認した。遺構の南半分は後世の擾乱を受けており、全容は把握できない。RA08住居跡と東壁が重複し、切られる関係にある。

〈規模・平面形〉 およそ直径 4.5mの円形と推定される。

〈床面積〉 約16㎡

〈埋土〉 斜面上方から流れてきた黄褐色の小細礫を含む暗褐色土主体の埋土である。この層には焼土・炭化物が多く混じる。また土砂の崩落による黒褐色土の再堆積が数度にわたって見られる。

〈壁の状態・壁高〉 西壁は緩やかな立ち上がりとなるものの、北壁・東壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁57cm、北壁76cm、東壁35cmを測る。

〈床面・掘り方〉 中掘相当の火山灰を含む第Ⅴ層面まで掘り込み、その上に黒褐色土（小細礫含む）を5cm程度貼っている。

〈柱穴〉 配置のはっきりした柱穴は見られなかった。南側に6つの柱穴が集中しているが、住居の出入り口状施設である可能性が高い。

〈炉の位置〉 床面の中心部に地床炉が構築されている。

〈炉の形態〉 地床炉の焼土の南端に立石が施されている。立石に火を受けた痕跡のないことや断面からも焼土を掘り込んだ痕が見られることから、立石炉にはならないと思われる。

〈付属施設〉 立石について

①設置箇所 床面中央からやや南寄りの出入口に近い場所に設置される。

②検出状況 Ⅱ層上部の段階から立石の先端が見えており、床面の地床炉を掘り込んだ状態で埋められてあった。

③構成石 細長い稜線のとれた亜角礫であり、安山岩である。遺跡内には角礫が多く、立石に使用されているような角の取れた石はないため、加工を受けていると思われる。

④大きさ 床面から頂部までの高さ50cm、床面から基部まで30cmを測る。全長80cm、最大幅20cm、最小幅10cm。

⑤埋め込み方 地床炉の南側に石の先端が入る程度の穴を20cmほど穿ち、細い方を下に、太いほうを上にして埋め込まれている。わずかに斜面下部側に傾いた状態で検出された。

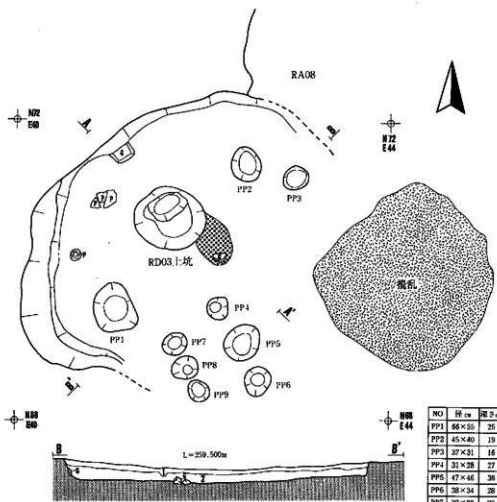
⑥下部構造 20cmほど下層には拳大～半頭大の角礫が広く堆積する。Ⅴ層中に入る自然の角礫をそのまま根固め石として使用している可能性がある。また立石の南側には人頭大よりふた回りも大きい花崗岩性の亜円礫が立石と接する形で検出されている。

⑦地床炉との関係 炉の焼土を穿って立石を施しており、被熱の痕は認められない。よって炉と同時存在したとは考えにくい。炉（住居）の廃絶時点と極めて時間的に近いタイムスケールが想定される。

遺物について

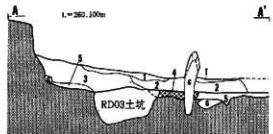
〈出土状況〉 床面または埋土内より土器・石器が出土している。

〈土器〉 1と2はともに床面から出土した。1は体部にRLとLRの交互施文による横位羽状縄文を持ち、内

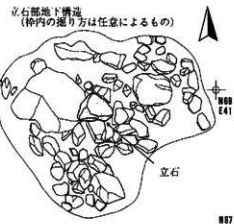


NO	径 cm	深 cm
PP1	66×55	25
PP2	45×40	19
PP3	37×31	16
PP4	31×28	27
PP5	47×46	38
PP6	38×34	28
PP7	32×28	33
PP8	32×32	35
PP9	29×28	29

1. 10YR3/2 黒褐色シルト。しまりあり強い。焼土・炭化物 1-2%、小細礫 2%を含む。
2. 10YR5/3 黄褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。焼土が3%散在する。

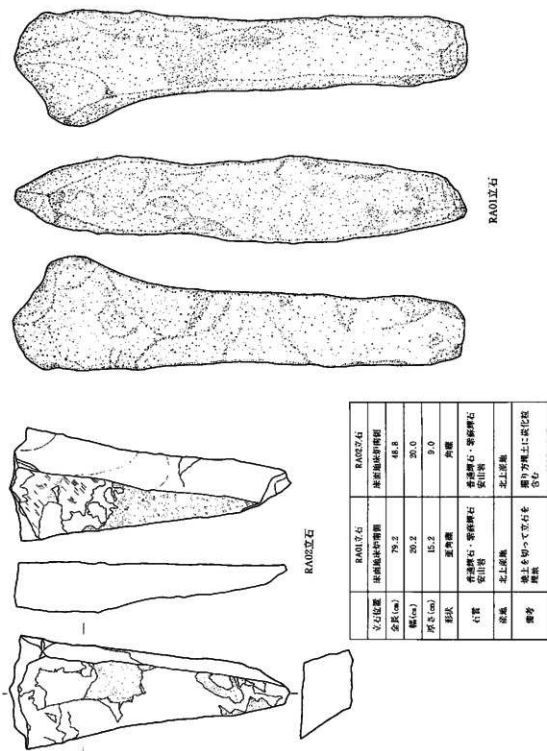


1. 10YR3/2 黒褐色シルト。しまりあり強い。焼土・炭化物 1-2%、小細礫 2%を含む。
2. 10YR3/3 黒褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。焼土が5%散在する。
3. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。肉はたローム。しまり大。粘性大。小細礫多量を含む。黄灰層一。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト。粘性ややあり。小細礫。1%を含む。
5. 7.5YR4/4 黄色ローム。粘性あり。微土質。



立石部地下構造
(枠内の通り方は任意によるもの)

第7図 RA01住居跡



第 8 図 RA01、RA02住居跡立石実測図

面体部下半に炭化物が多く付着している。胎土に金雲母が多く混入している。2は床面に伏せた状態で出土した。無文だが、ていねいにミガキがかけられ、光沢を持つ。底部はやや上げ底気味である。3・4は口縁部、5～9は体部破片である。9はLRとRLによる羽状を呈している。頸部に浅い2本の沈線が入る。

〈石器〉 10の石鏃は埋土最下部より出土している。欠損はしているものの凸基を持ち、アスファルトが若干付着している。二等辺三角形形状を呈し、石材として安山岩を使用している。

時期 出土遺物などから縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

RA02住居跡

〈位置〉 18Iグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RA06住居跡の床面検出の段階で、暗褐色土中に黒褐色土が切り合う形でプランを確認できた。RA06住居跡と遺構の大部分が重複する。

〈規模・平面形〉 直径5mの円形の住居跡である。

〈埋土〉 埋土下部を中心に斜面の土砂の崩落による褐色～黄褐色の層の堆積も見られる。その上層にはⅢ層に相当する暗褐色土が堆積している。埋土の中ほどに炭化物・焼土のブロックが斜面上部側に多く見られたが、再堆積によるものと思われる。

〈壁の状態〉 全体的に壁は垂直に立ち上がり、北側の壁は掘り込み方も深い。それに対して南側の壁は次第に高さも低くなり、出入口付近と思われる南側の壁は消失する。壁はしっかりとしまっており、堅い。

〈壁高〉 斜面下部側は削平を受けており、確認できなかったが、斜面上部側は最高で1mを超える。

〈床面・掘り方〉 V層面を床面とし、地床炉周辺を中心に堅くしまっている。斜面下部の南側の床面は他の場所と比べると軟らかい。

〈柱穴〉 立石を中心にして4本の柱を構成していたものと考えられる。これらの柱穴は深さが50cm程度であるが、北東側の柱穴だけが斜面上部に向けて斜めに掘り込まれ、深さ1m60cmを測る。

〈炉の位置・形態〉 中央部に地床炉が構築されている。焼土の厚さは11cmを測り、発達状況は良い。

〈付属施設〉 立石について

①設置箇所 床面中央部のやや南寄りの出入口に近い部分に位置し、地床炉の南側に設置されている。

②検出状況 Ⅲ層（暗褐色）上部から立石の先端が見えており、南側に傾いた状態で検出された。床面において黒褐色土の掘り込み痕が確認できた。

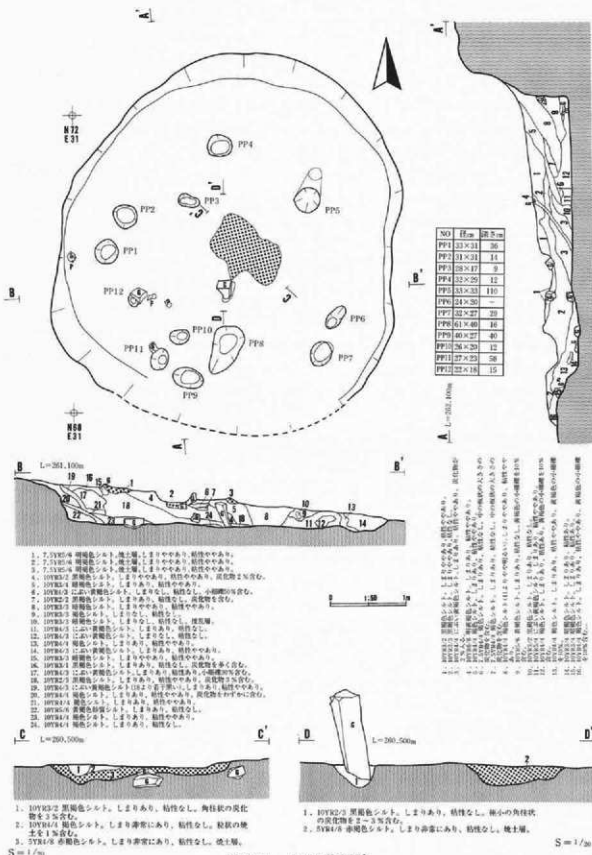
③構成石 長大形な角礫（安山岩）を使用している。現地性の角礫を使用したものと推測される。

④大きさ 全長50cm。床面から上に出ている長さは40cm、地中に埋められている長さは10cmである。最大幅16cm、最小幅4cmを測る。

⑤埋め込み方 地床炉の20cmほど南側に立石を施しており、焼土部分には絡まない。細い方を下に、太い方を上にして埋め込んでおり、立石の先端が入る程度の穴を穿ちている。

⑥下部構造 角礫による根固めは全く行っていない。掘り込み痕の埋土には炭化物が多く混じる。地床炉周辺の土をそのまま埋め込んだと推測される。

⑦地床炉との関係 住居の床面に立石の掘り込み痕が確認できることと、掘り込み痕の埋土に地床炉に関連した炭化物混じりの土を根固めとして利用したと推測されることから、地床炉の使用とほぼ同時期と考えられるものの、立石に火を受けた痕跡は見られない。



第9図 RA02住居跡

遺物について

〈出土状況〉 床面、床面近くの壁際、埋土から土器が出土している。

〈土器〉 11・12は床面から出土している。11は粗製の深鉢であり、口縁は肥大せずに真っ直ぐに伸び、体部にはRL縄文が施文される。12の注口型土器は17H・15I・16I・15J出土の破片とも接合している。体部下半・注口部を欠損しており、割れ口は疑似口縁状を呈する。4単位の文様の展開を示し、外面にはミガキがかけられている。内面には指による整形の痕が顕著である。14は西壁際から出土した台付き浅鉢である。4つの懸垂孔を持っていたものだが、耳の配置は正形状の配置ではなく若干ずれたものとなっている。内外面ともていねいにミガキがかけられる。17・18は同一個体と思われる。体部にはRLによる縦位の羽状縄文が施されている。21の口唇部はやや内側に肥大し、体部にはRL縦位羽状縄文が施文される。

時期 出土遺物などから縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

RA03住居跡

遺構について

〈位置〉 18L-19Lグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RA08住居跡の床面検出段階で黒っぽい色の埋土でプランを確認することができた。RA03住居跡の埋土の上にRA08住居跡が構築されたものであり、埋土上部は削平されている。また南側も攪乱を受け、全体のプランは確認できなかった。RA01住居跡とも重複するが新旧関係を確認することはできなかった。

〈規模・平面形〉 直径3.5mほどの円形の住居跡と推測される。

〈床面積〉 9.5-10㎡

〈埋土〉 壁際には粘性のやや強い暗褐色シルトが流れ込んで堆積しており、中央部分は黒褐色シルトの埋土で覆われる。最下層は小細礫を含んだ黒褐色シルトが広がる。

〈壁の状態〉 北側から北西側にかけてほぼ垂直に立ち上がり、北壁34cm・西壁16cmを測る。東壁は崩れており、なだらかな状態となっていた。南壁は攪乱により、失われている。

〈床面・掘り方〉 炉周辺を中心に堅くしまった状態である。貼り床の構造は認められない。

〈柱穴〉 住居内から検出された3つの柱穴のうち、炉を中心にして壁ぎわに対称に位置する柱穴2つは柱として機能したと思われる。北壁の外側に1つ柱穴が検出されたが、この住居跡に伴うものかどうかは分からない。

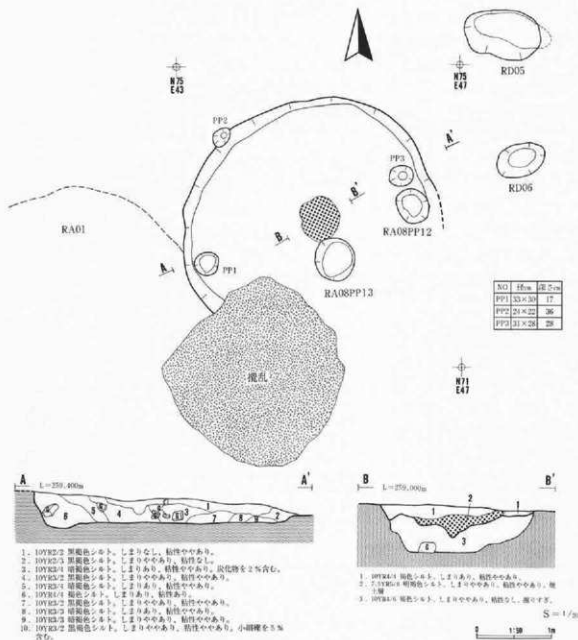
〈炉の位置・形態〉 中央部に地床炉が位置する。焼土の発達状況は良くない。

遺物について

〈出土状況〉 埋土からの遺物はほとんど見られなかった。床面において時期を確定できる土器が若干出土している。

〈土器〉 23・24は花弁状に開く波状口縁であり、口縁部には刻みが巡る。無文部にはミガキが施され、内面は黒色処理がなされている。25・26にはRL縄文による縦位の羽状縄文が施され、磨り消し技法が用いられる。ともに器表面には金雲母が付着し、同一個体である可能性が高い。

時期 出土遺物などから縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。



第10図 RA03住居跡

RA04住居跡

遺構について

〈位置〉 18Jグリッド

〈重複関係〉 RA01住居跡と東側の一部を重複し、切られる関係にあることから、RA01より時代的に古いといえる。

〈規模・平面形〉 遺構の東半分をRA01に切られているため、詳細は不明であるが、残存する壁の状況などから円形の住居跡であると考えられる。

〈埋土〉 18J北側ベルトから推定すると、黒褐色シルトと暗褐色シルトの斜面上方からの流れ込みによる堆積が主体となっている。

〈壁の状態〉 残存する北西壁は37cm、西壁は22cmを測り、ややならかに立ち上がっている。

〈床面・掘り方〉 床面に貼り床をしている痕跡は認められなかった。

〈柱穴〉 検出された柱穴のうち、西壁際と南壁際の2本は柱穴として軸をなしそうである。

〈伊の形態〉 地床芦。焼土の発達状況は良くない。

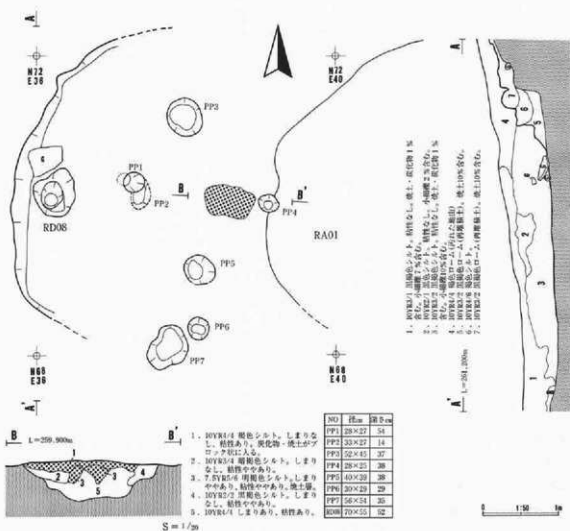
遺物について

〈出土状況〉 遺物の量は少なく2点だけである。床面より壺の体部片、西壁際の床面から叢石が1点出土している。

〈土器〉 27は2段の刻み列を境に、円文状の磨消帯が展開する。

〈石器〉 28の叢石の上部先端には敲打による刻痕が見られる。下部先端も若干使用痕を確認できるが、主に1箇所のみを使用している。

時期 出土遺物などから縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。



第11図 RA04住居跡

RA05住居跡

遺構について

〈位置〉 15H-15I グリッド

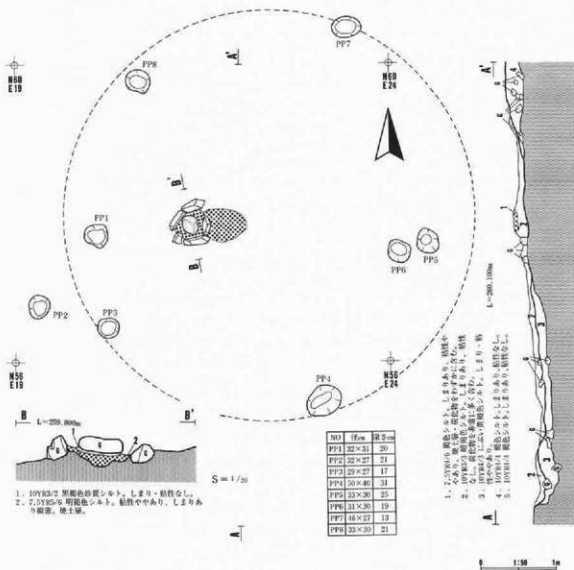
〈検出状況〉 第IV層面において焼土が検出され、その後石囲炉が検出されたことから住居跡に伴うものであろうと判断した。

〈規模・平面形〉 壁を検出するにいたらなかったので規模・平面形については不明である。

〈畑土〉 石囲炉周辺の第Ⅲ層相当の暗褐色シルトには細かい炭化物の粒がまんべんなく広がっており、住居の埋土になると思われる。

〈土の状態〉 検出することができず不明。ふい黄褐色シルトの高まりがわずかに巡るところも見られたが、詳細については不明である。

〈床面・掘り方〉 床面は軟らかく、周囲には現地性の角礫が多く散在する。



第12図 RA05住居跡

〈柱穴〉 石囲炉周辺から7つのピットを検出した。そのうち西側の3つのピットの埋土には炭化物が多く混入し、住居跡に伴うものである可能性が高い。全体的に深さも浅く、主要な柱穴を決める材料に乏しい。

〈炉の形態〉 15～40cmの長さの扁平な角礫を数個円形状に配置し、石囲炉を形づくっている。角礫は「ハ」の字状に外側に開いた形となっている。炉内部には人頭大の円礫を1個置いており、被熱を受けている。円礫は周囲には全く見られないことから他の場所から運び込んだものと推測される。

遺物について

〈出土状況〉 土砂の崩落による再堆積が多く、礫・小細礫が多く見られた。そのため、攪拌を受け、縄文時代後期中葉の時期が大半を占めてはいるが、若干弥生時代初頭の土器も混在する。磨滅を受けた土器片が多く見られる。

〈土器〉 29の深鉢は床面付近から出土した。体部にはRLとLRの交互施文による羽状縄文が付され、クラク文的な磨消帯を持つ。口縁は肥大せずに真っ直ぐ立ち上がる。30の口縁部は折り返し口縁となっている。無文帯の下にLR斜縄文が施文される。32は蛇行沈線を持ち、地文にはLR斜縄文が施される。33は花卉状に開く深鉢の頸部付近と思われ、刻みによって区画がなされている。

時期 出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

2. 縄文時代晩期末～弥生時代初頭の堅穴住居跡

RA06住居跡

遺構

〈位置〉 18Hグリッド

〈検出状況・重複関係〉 表土を除去した段階の第Ⅱ層面で黒色土の広がり確認された。RA02住居跡と重複関係にある。

〈規模・平面形〉 南側・東側の壁の削平によって、はっきりとした形状は分からないが、直径3.5m程度の楕円形の住居跡と推定される。

〈床面積〉 およそ24㎡。

〈埋土〉 黒色シルト・黒褐色シルト主体であり、床面に近くなるほど炭化物の細かい粒が多く含まれる。埋土中に部分的に焼土の堆積が見られたが、流れ込みによるものと考えられる。

〈壁の状態・壁高〉 北西側のみ残存する。全体に外傾して立ち上がり、斜面のへりを利用して壁を構築している。北壁42.5cm、北西壁52.2cm、西壁37.8cmを測る。

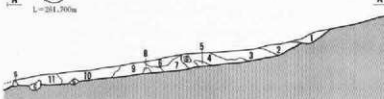
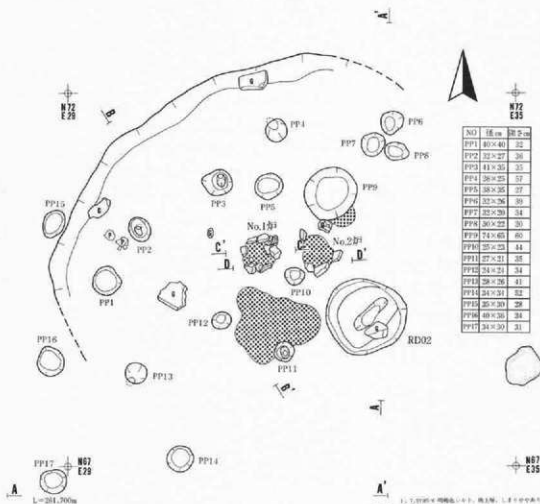
〈床面・掘り方〉 南側に向かって緩やかに傾斜する。貼り床の構造は認められない。床面には炭化物の細かい粒が多く見られた。

〈柱穴〉 全部で17の柱穴を検出した。西壁外にPP15、PP16、PP17と連なる。住居跡内部の柱穴の配置ははっきりしない。

〈炉の位置〉 NO.1炉はほぼ中心部に位置する。またNO.2炉はやや東側にずれる。

〈炉の形態〉 NO.1炉、NO.2炉とも拳大から人頭大の大きさの扁平な角礫を使用した円形の石囲炉である。ともに6～7個程度の角礫を使用し、外側に開くような形で土中に埋め込んでいる。またNO.2炉はNO.1炉と比較して28cmレベルが下がり、少し古い時期の住居に伴う炉の可能性も考えられるが詳細は不明である。

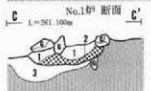
〈付属施設〉 炉の南東側に開口部径110×100cm、底部径58×24cm、深さ80cmのRD02土坑が検出されている。埋土中から遺物は出土しなかったが、長大形の円礫が埋土中位において見られた。貯蔵穴である可能性も考



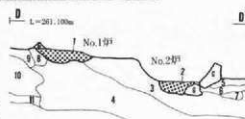
1. 2.5VKGの埴輪地シロト。焼土層。しまり中であり、粘性中あり。
2. 2.5VKGの埴輪地シロト。焼土層。しまり中であり、粘性中あり。
3. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。底に砂質土あり。
4. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。底に砂質土あり。
5. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
6. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
7. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
8. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
9. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
10. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
11. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。



1. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
2. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
3. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
4. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
5. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
6. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
7. 2.5VKGの埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。焼土粘石層あり。
8. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。



1. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。底に砂質土あり。
2. 2.5VKGの埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
3. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。



1. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。底に砂質土あり。
2. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。
3. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
4. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
5. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
6. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
7. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
8. 2.5VKGの埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。焼土粘石層あり。
9. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性あり。底に砂質土あり。
10. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。
11. 埴輪地シロト。しまり中であり、粘性中あり。

S = 1/20



第13図 RA06住居跡

えられる。

遺物

〈出土状況〉 床面・埋土から土器・石器が出土している。

〈土器〉 36は埋土下部から出土した浅鉢で、約3.5cm間隔ごとに波状口縁を持ち、16個の波を持つものと類推される。体部上半から3つの緩やかな段を持ち、口縁部は外側に大きく開く。内外面ともミガキがかけられている。37・38は床面から出土した粗製の甕である。37も粗製の甕であるが、下半部は欠損している。頸部にはナデが加えられ、細い刻線が1本通る。地文はLRの横位縄文である。38は体部上半を欠損しており、地文にはLR斜縄文を施している。内面の体部下半に炭化物が付着し、外面の体部上半にも煤による黒色化がみられる。40は壺の体部上半の破片である。LR縄文が施され、頸部にはミガキが加えられている。

〈石器〉 床面相当から3点出土している。43は三角形を呈した尖頭器であり、打面を基部にもつ。44は横長の石匙で、刃部は両面を整形している。握み部は刃部と水平方向についている。石器の白い斑点状の部分に2カ所穿孔が施されている。1カ所は両側から穿孔が施され、貫通しており、もう1カ所は中途で作業を止めており、痕跡だけが見られる。45は石盪の西側床面より検出した磨石である。背面・腹面の扁平な部分にはなめらかな面となっており、使用による「減摩」の痕跡が見受けられる。また背面、腹面の扁平面に赤彩の痕が確認できた。

時期 出土遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RA07住居跡

遺構

〈位置〉 19Fグリッド

〈検出状況・重複関係〉 第Ⅱ層中に炭化粒と焼土粒の散在する黒色土の広がりは見られたが、はっきりとしたものではなかった。そのため見極めが遅れ、満足な状態でベルトを残すことができなかった。

〈規模・平面形〉 南側の壁は土砂の崩落によって消失しており、全体の規模をつかむことはできないが、直径4.5mのほぼ円形の住居跡であると推測される。

〈床面積〉 およそ16㎡

〈埋土〉 黒色シルトが主体であり、埋土中には大～極大の礫を多く含む。床面には炭化物が多く散らばり、焼失家屋の可能性も考えられる。またRA07の南側の18F付近には焼土・炭化物の混じった濁りのある黒色土～暗褐色土が見られたが、これは埋土の流出したものと考えられる。

〈壁の状態・壁高〉 南半分の壁はすでに崩落しているが、残りの壁は巡っている。北壁33cm、西壁18cm、東壁6cmであり、全体的に削平を受けている。

〈床面・掘り方〉 非常に堅い地山まで掘り込んで、さらに床を平坦にし、その上に10cm程度の黒褐色土を持ち込んで貼り床としている。

〈柱穴〉 深さ20～40cmぐらいの小穴が6個検出されたが、配置ははっきりしなかった。

〈炉の位置〉 住居の中央部に炉を構えている。

〈炉の位置・形態〉 中央部に位置し、拳大～40cm前後の扁平な角礫を6～7個程度使用した円形の石盪炉である。炉石は外側に開くように埋め込まれており、炉の内面には厚さ10数cmほどの焼土が堆積している。

〈付属施設〉 西壁沿いに幅40cm前後、深さ15cm前後の周溝が2.3mほど部分的に巡っている。

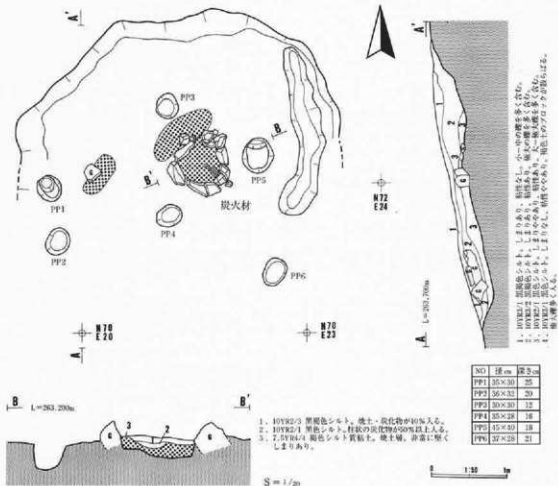
〈その他〉 炉の内面、床面付近から非常に多くの炭化物と焼土が検出された。炭化した木片の塊も出土し

ていることから焼失家屋と推測される。

遺物

〈出土状況〉 床面及び埋土から土器・石器が出土した。遺構の半分が削平を受け、埋土もやや斜面下部に流れているため、18E・18FのⅡ層中出土の土器は遺構に伴う可能性が高い。

〈土器〉 46は床面から出土した小型の甕であり、口唇部は指頭押圧による小波状口縁を呈している。体部は無文であるが、ケズリによる調整の痕が認められる。頸部には先端の平らな棒状の工具で1条の線が引かれる。47は埋土内から検出されたが、17E・18E・18F出土破片とも接合している。甕の口縁部と思われる肩部に最大径を持つ器形を有すると思われる。口縁部に1段の工字文が施され、4単位で展開する。沈線部分と瘤下にはミガキがかけられる。沈線幅は4～5mmとやや広めであり、U字形の断面を呈する。48の壺型土器は埋土内から検出されたが、17E・18E・18F出土破片とも接合している。口縁部には先端の丸い棒状工具による沈線が2本巡る。頸部～体部にかけてやや肩が下がり気味に開き、体部にLR縄文が施される。49は18Eグリッド出土の小型の甕であり、住居跡に伴う遺物である可能性が極めて高い。出土時、壺内部に赤色顔料が頸部付近までつまった状態で出土した（顔料分析については「付編」参照）。文様構成として、体部上半に4単位・3段に展開する変形工字文を持つ。沈線幅は2mmほどで細く、貼り付けられた2対の瘤も小さく、ナデが加えられている。彫らみもほとんど目立たない。体部下半には縦に3本の沈線が引かれ、4単位に展開する。底部



第14図 RA07住居跡

付近には1条の沈線が通る。底部は丸底的な特徴を示す。52は小形の台付き浅鉢の台部であると推測される。

〈石器〉 53の磨石は上端・下端及び側面を使用している。54の磨石は側面全面を使用しており、腹面・背面の扁平な面は使用しておらず、自然面のままである。側面の使用面には使用痕の細い筋が見られる。

時期 出土遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RA08住居跡

遺構

〈位置〉 19K～19Lグリッド

〈検出状況・重複関係〉 第Ⅲ層面において黒色土のプランが確認された。RA01・RA03の住居跡と切り合い関係にある。

〈規模・平面形〉 南方部が削平を受けており、全体を把握することはできなかったが、南北4.5m×東西5.0mの楕円形を呈するものと推測される。

〈床面積〉 およそ17㎡

〈埋土〉 小細礫の若干混じった黒褐色シルトが主体であり、焼土・炭化物が細かく分布している。

〈壁の状況・壁高〉 垂直に近い形で立ち上がり、北壁30cm、北西壁42cm、西壁23cmを測る。

〈床面〉 黒褐色の土を5cmほど貼り、床面としている。

〈柱穴〉 2列の柱の配置が巡り、建て替えによる住居の2時期の存在の可能性も考えられる。PP11、PP12は検出面が削平を受けているが、主柱穴の一部となりそうである。

〈炉の位置〉 2基検出されている。NO.1炉はやや東寄りに、NO.2炉はNO.1炉よりややレベルを下げて、西隣に構築している。住居跡の規模全体から見ると、NO.2炉はほぼ中心に位置する。以上のことからNO.2炉が古い炉で、その作り替えとしてNO.1炉が設けられたものと推測される。

〈炉の形態〉 NO.2炉は検出時C字状を呈していたが、これは削平により、炉石が流出した可能性も高い。いずれの炉とも円形の石開炉で扁平な角礫をそれぞれ10数個使用して炉を構成している。構成石は外に開くように埋め込まれている。炉の下部には50cm大の直角礫がある。レベルの若干下がるNO.1炉上には黒褐色の土を貼っており、古い炉を覆い隠して新しい炉を構築して使用したものと考えられる。

〈その他〉 床面近くから焼土粒・炭化粒が広範囲にわたり検出されたことから焼失家屋の可能性もある。

遺物

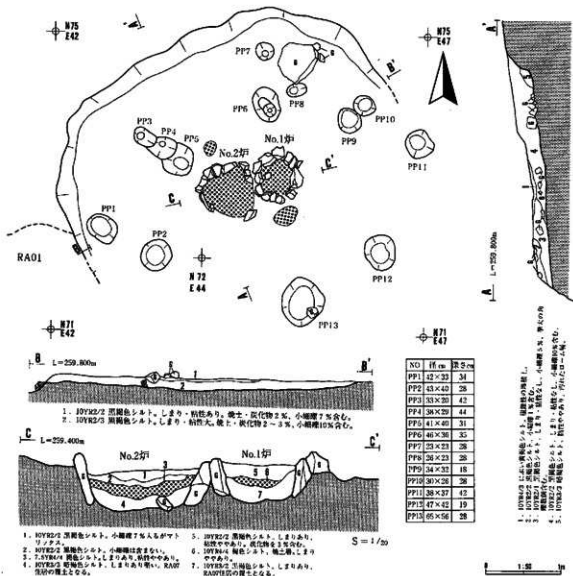
〈出土状況〉 床面・埋土下部・炉埋土から出土しており、他の住居跡の中でも最も多くの遺物が出土している。

〈土器〉 55は高坏の口縁破片であり、浅めで太い沈線の変形工字文が施される。瘤はほとんど目立たない。双山形波状口縁を呈すると思われる。56は肥大した瘤を持つ変形工字文が施文されている。59の体部には太い沈線と明瞭な瘤の貼り付いた変形工字文が展開している。体部下半には縄文が施文される。63～65は底部資料であり、63・64は浅鉢、65は壺であると思われる。63の浅鉢には体部上半に変形工字文、下半にLR斜縄文が施文される。沈線は先端の丸い工具で力強く引かれている。62は高坏の脚部の破片である。台形状に開いた脚部であり、あまり大きくはならないと思われる。施文されている文様も鋭く切り込んだ沈線を施している。66は床面から出土した粗製の壺の体部上半部である。磨滅が進んでいるが、器表面にはミガキがかけられていたと思われる。67は大波状口縁を持つ壺であり、波状頂部に2つの刻みを持つ。頸部には先端にやや丸みを持つ工具で2条の沈線が力強く引かれる。内外面とも炭化物が多く付着する。68は粗製の壺であ

り、体部はキャリバー状に膨らむ。口縁部の屈曲は小さく、直立気味に立ち上がる。ナデによる無文帯の下に1条の沈線が頸部に走っている。口唇部には指頭による押圧をほぼ2cm間隔で展開している。69は指頭押圧による小波状口縁を呈し、頸部には1条の沈線を有する。器表面の口縁部から体部上半にかけて煤が広く付着している。70は平縁であるが、頸部に条線を持つ点では69と同様である。ともに口縁部の屈曲度は弱い。74の粗製土器の体部下半の資料は炉の埋土から出土したものであるが、二次焼成を受けた痕跡は認められず、後から紛れ込んだものと思われる。76は網代痕を持つ底部資料である。

〈石器〉 77の石匙は横長タイプのもので、主要刃部が柄み部の下方側縁にある。柄み部にアスファルトが微量に付着している。

時期 出土遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。



第15図 RA08住居跡

RA09住居跡

遺構について

〈位置〉 220グリッド（斜面のへり際）

〈検出状況〉 第Ⅱ層下部において、黒褐色の埋土が円形のプランとして確認できた。さらに精査を進めたところ、炉と思われる焼土が検出され、住居跡遺構と判断した。

〈規模・平面形〉 斜面下部側に削平を受け、規模の全容をつかめないが、直径4.4mのほぼ正円形である。

〈埋土〉 黒褐色シルトを中心とした埋土で、自然堆積による。

〈壁の状態・壁高〉 斜面下部側は削られており、壁の状態は分からない。北東壁16cm、北壁50cm、北西壁47cm、西壁12cmを削り、住居跡奥部の壁は96cmに及ぶ。壁面は固くしまっている。壁際に礫が多く入るが人為的なものは分からない。北壁は中段部分に平坦な面をもち、斜めに立ち上がる。床面北側に巨大で扁平な角礫があったことから、この中段部分の平坦面は住居に伴う「奥の間」的な施設である可能性も考えられる。

〈床面・掘り方〉 掘り込んだ黄褐色ロームの面を固く踏み固めて床面としている。床面炉の北側一帯が固く、南側周辺はそれに比してやや柔らかい。

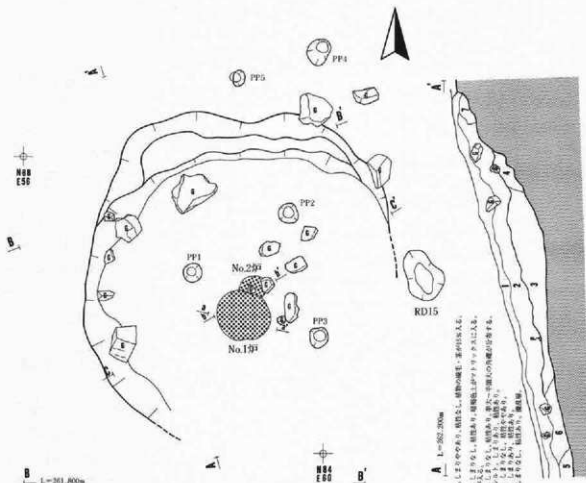
〈柱穴〉 炉を取り囲むようにして3本の柱穴が検出された。南西側にもう1本の柱穴があったと推測され、4本構成の柱と考えられる。また北壁周辺から2本の柱穴が検出されており、住居に伴う可能性も考えられる。

〈炉の形態〉 焼土のみが検出されたが、焼土周辺に石の抜き取り痕が見られること、50cm程度離れたところに被熱を受けている扁平な礫が数個存在したことから本来は石囲炉として使用したものと考えられる。またこの炉から20cmほどレベルの落ちた位置に地床炉が検出されたことから炉の作り替えが行われたものと考えられる。

遺物について

〈出土状況〉 住居内に伴う遺物は少量である。78の浅鉢は口縁に向かい合う双山形の波状口縁を有する。体部には流水文状変形工字文が2段展開しているのが認められる。沈線施工後の早い段階でミガキをかけており、そのため沈線がつぶれている部分が見られる。80の口縁直下には変形工字文が展開し、瘤の下側に若干整形を施している。79は埋土下部から出土している。口縁部に無文帯を持ち、太めの沈線で体部のLR斜縄文と区画している。82の粗製の甕の口唇部には指頭押圧がなされている。83から85は甕の体部破片である。

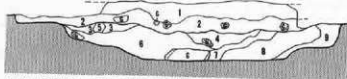
〈時期〉 出土土器などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。



1. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
2. 10YR3/2 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
3. 10YR3/1 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
4. 10YR3/0 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
5. 10YR3/4 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
6. 10YR3/5 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
7. 10YR3/6 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
8. 10YR3/7 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
9. 10YR3/8 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
10. 10YR3/9 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
11. 10YR3/10 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
12. 10YR3/11 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
13. 10YR3/12 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
14. 10YR3/13 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
15. 10YR3/14 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
16. 10YR3/15 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
17. 10YR3/16 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
18. 10YR3/17 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
19. 10YR3/18 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
20. 10YR3/19 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
21. 10YR3/20 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。

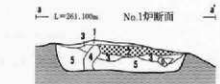
B L=261.800m

A L=262.200m



1. 10YR3/3 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
2. 10YR3/2 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
3. 10YR3/1 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
4. 10YR3/0 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
5. 10YR3/4 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
6. 10YR3/5 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
7. 10YR3/6 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
8. 10YR3/7 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
9. 10YR3/8 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
10. 10YR3/9 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
11. 10YR3/10 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
12. 10YR3/11 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
13. 10YR3/12 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
14. 10YR3/13 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
15. 10YR3/14 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
16. 10YR3/15 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
17. 10YR3/16 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
18. 10YR3/17 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
19. 10YR3/18 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
20. 10YR3/19 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。
21. 10YR3/20 赤褐色シルト。しまりあり。粘性なし。植物の腐葉・草が散らる。

ND	径 (mm)	深さ (cm)
PP1	26 × 25	35
PP2	27 × 25	22
PP3	27 × 25	22
PP4	18 × 16	20
PP5	36 × 30	27
RD15	68 × 55	25



1. 10YR2/2 暗褐色シルト。粘性あり。しまりあり。5YR3/4 暗褐色粘土層にプロット状に散らる。炭化物少量混入。
 2. 5YR3/4 暗褐色粘土。しまりあり。
 3. 2.5YR3/2 暗褐色ローム質シルト。粘性あり。しまりあり。5YR3/4 暗褐色粘土層にプロット状に散らる。
 4. 2.5YR3/1 赤褐色シルト。しまりなし。粘性なし。明赤褐色粘土層小粒状に含む。
 5. 10YR3/2 暗褐色ローム質シルト。
- S = 1/20



1. 5YR4/6 赤褐色粘土。しまりあり。粘性なし。
 2. 10YR3/4 赤褐色粘土。しまりあり。粘性ややあり。小礫含む。
- S = 1/20

1:20 1m

第16図 RA09 竪穴住居跡

RA10住居跡

遺構について

〈位置〉 21Nグリッド

〈検出状況〉 原地形の段階で遺構部分の凹みが認められた。またIII層相当の暗褐色土を掘り込むように黒褐色土が円形に広がるプランも確認できた。

〈重複関係〉 東側をRE02に、南側をRE03・RE04に切られている。

〈規模・平面形〉 他の遺構と切り合い関係にあるだけでなく、現代において南側部分を大きく土取りされており、全体の形状を把握することは難しい。残りの部分から推定すると、直径4.8m程度の円形の住居跡と推測される。

〈埋土〉 埋土上層に黒褐色シルト、埋土下層に暗褐色シルトが主体となって堆積する。床面近くになると暗褐色土に黄褐色土の小さいブロックの散在する土が堆積している。床面に炭化粒や焼土が広がる。

〈壁高・壁の状態〉 北東壁20cm、北壁36cm、北西壁40cm、西壁25cmを測り、全体的になだらかに立ち上がる。壁際に多くの角礫が見られるが、人為的なものかどうかは判別できなかった。

〈床面・掘り方〉 床面は黄褐色粘土層の面を固く踏み固めており、一様に硬い。貼り床的な構造は見られなかった。

〈柱穴〉 床面から柱穴は確認できなかった。住居跡周辺（RE03）から3本の柱穴が検出されたが、住居跡に伴うものかは分からない。

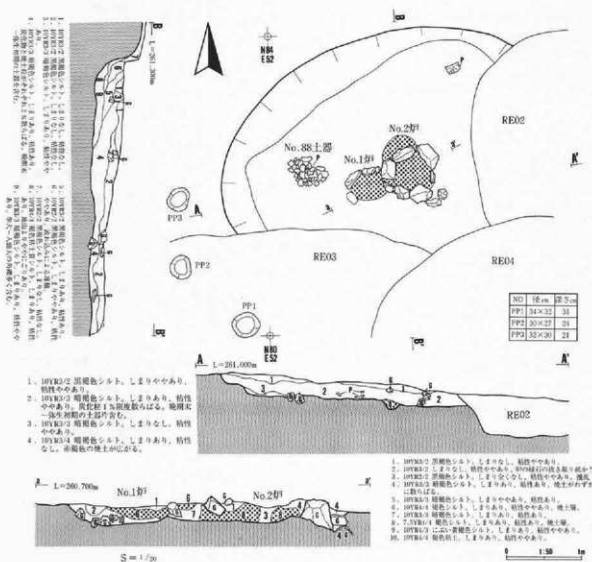
〈炉の形態〉 扁平な角礫を外側に開くようにして埋め込んで構築した石囲炉である。中央部に2つの石囲炉が位置するが、NO.1炉はNO.2炉に比べ、ややレベルの落ちたところに位置する。よってNO.1炉を作り替えてNO.2炉を構築したと思われる。NO.1炉は斜面北側の縁石だけが残っており、縁石のない部分には石の抜き取り跡が見られた。このことからNO.2炉に作り替える際にNO.1炉の縁石を転用したものと思われる。焼土の堆積は薄く、発達していない。

遺物について

〈出土状況〉 炉周辺及び北壁際の床面近くからややまとまった出土が見られた。

87の浅鉢はRE02の埋土上層から出土しているが、住居跡内埋土から同一個体片が出土しており、土砂の流出によって下部に流れたものと思われる。体部上半に流水文状変形工字文が先端のV字形の工具を用いて力強く施文されている。体部下半にはRL熱糸縄文が付される。内外面ともにいいないミガキがかけられる。3単位の文様展開である。86の高杯の脚部は台形状を呈し、脚口縁部には一段の変形工字文が巡っている。杯下半部には文様を伴わない。赤色顔料が外面に少量付着する。89・90は壺の口縁部であるが、やや外湾気味の90に対し、89は真直ぐに立ち上がる。また90はV字形の断面の沈線を呈するのに対し、89はU字形である。88は北西側の床面から出土した長胴形の甕である。体部にはLR縄文が施されており、頸部と体部で回転方法を異にしている。口縁部は外反し、頸部に1条の刻線が付される。内外面の中～下半にかけて炭化物が厚く付着する。95も床面出土の粗製の甕である。頸部にはナデが加えられるのみであり、体部にLR横位縄文が展開する。98の底面には木炭痕が確認できる。

〈時期〉 出土遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。



第17図 RA10竪穴住居跡

RA11住居跡

遺構について

〈位置〉 22Q-22Rグリッド

〈検出状況〉 暗褐色土上面においてはんやりと円形状の黒褐色土のプランが認められたが、住居跡遺構であるという認識はできなかった。

〈重複関係〉 住居跡南側をRH02(暗渠状配石遺構)に切られている。

〈規模・平面形〉 壁が検出されず、規模の把握はできなかったが、柱列の配置から推測すると直径5.2m程度の円形の住居跡であったと考えられる。

〈床面積〉 約21㎡

〈埋土〉 黒色～黒褐色土主体の埋土である。埋土内には土器片が多く含まれる。また埋土上面には斜面上部からの流れ込みによるものと思われる角礫が多数見られた。

〈壁の状態〉 壁は検出されなかった。斜面上部からの土砂による削平を受け、ほとんどの壁は消失してしまったものと思われる。東側において黄褐色土による盛り土状の高まりが見られ、住居跡の壁になる可能性もある。

〈床面・掘り方〉 床面は黒褐色土の面を踏み固めて使用したものと思われる。

〈炉の形態〉 扁平な角礫を7個程度使用し、外側に向けて開くように埋め込んでいる。弥生初頭期の住居跡の炉と構築方法は全く同一である。他の石囲炉よりも若干大きい焼土の堆積状況は厚くない。

〈柱穴〉 石囲炉を中心にして多数の柱穴が検出されたが、大別すると3時期程度の建て替えが行われているようである。a列は石囲炉に伴う柱穴列であると思われ、円形に狭い間隔で並ぶ。20～40cm間隔で壁際を巡るものと思われる。c列はa列を囲むように大きく円形を描いて配列している。直径およそ7.5mを測る。a列との新旧関係については不明である。また、a列よりやや東にずれてb列が円形状に巡る。ピットの切り合い関係からa列より古い時期に相当すると思われる。

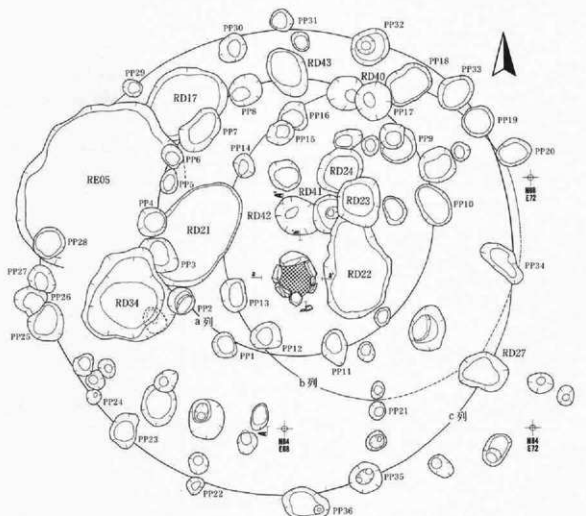
遺物について

〈出土状況〉 石囲炉周辺の床面付近から小破片の土器が出土したほか、RD21・RD34の埋土上面からも出土している。

〈土器〉 99～104は高坏・浅鉢の口縁部破片である。99は双山形の波状口縁を呈すると思われる。105には工字文の下に斜縄文が施文される。106・107は口縁部に2本の沈線を持つ壺である。108の浅鉢には体部にRL斜縄文が付され、口縁部には横ナアが加えられる。底部は上げ底状を呈す。111～113は同一個体片である。肩部に最大径を持ち、口縁部は狭い開きであると思われる。体部全面にLR横位縄文が付される。109は壺状の破片であり、110と同一個体である可能性が高い。明赤褐色の色調を持ち、無文であるが、強くミガキがかけられる。頸部に1条の沈線が巡る。115は壺状の破片とも思われるが詳細については不明である。炭化物は付着しない。

〈石器〉 118の尖頭器は三角形を呈し、基部は円基となる。側縁は直立的な形態を持つ。

時期 出土遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。



A. L=260.60m



1. 10V02-2の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
2. 10V02-3の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。黒褐色の土層を含む。
3. 10V02-4の黒色シルト。少量あり。粘り中程度。堆積物少量含む。黒褐色の土層を含む。
4. 10V02-5の黒色シルト。少量あり。粘り中程度。堆積物少量含む。黒褐色の土層を含む。
5. 10V02-6の黒色シルト。少量あり。粘り中程度。堆積物少量含む。黒褐色の土層を含む。

B. L=260.50m



1. 10V02-1の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
2. 10V02-2の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
3. 10V02-3の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
4. 10V02-4の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
5. 10V02-5の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
6. 10V02-6の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。

C. L=260.40m



1. 10V02-1の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
2. 10V02-2の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
3. 10V02-3の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
4. 10V02-4の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
5. 10V02-5の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。
6. 10V02-6の黒色シルト。少量あり。粘りなし。堆積物少量含む。

S = 1/20

S = 1/20

a 列

NO	径(m)	深さ(m)
PP1	44×38	24
PP2	48×43	27
PP3	38×23	20
PP4	47×34	28
PP5	45×41	15
PP6	38×38	14
PP7	72×48	9
PP8	40×48	15
RD43	48×53	14
RD40	40×58	15
PP9	41×38	15
PP10	23×48	11
PP11	50×41	10

b 列

NO	径(m)	深さ(m)
PP12	48×43	13
PP13	53×48	14
PP14	40×33	17
PP15	47×34	18
PP16	45×41	22
PP17	45×40	21
PP18	41×23	8
PP19	51×50	9
PP20	57×43	10
PP21	30×25	9

c 列

NO	径(m)	深さ(m)
PP22	20×20	20
PP23	40×40	20
PP24	20×20	20
PP25	20×20	20
PP26	20×20	20
PP27	20×20	20
PP28	20×20	20
PP29	20×20	20
PP30	20×20	20
PP31	20×20	20
PP32	20×20	20
PP33	20×20	20
PP34	20×20	20
PP35	20×20	20
PP36	20×20	20



第18図 RA11住居跡

3. 土坑

RD01土坑

〈位置〉 19Gグリッド

〈検出状況〉 第V層面を掘り込んでいる。RA07住居跡北東側斜面上部のやや平坦な面から検出された。

〈規模・形態〉 開口部径110×102cm、底部径105×90cm、深さ20cmの円形を呈する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、堅くしまっている。床面も同様に堅くしまっており、平坦である。

〈埋土〉 黒褐色シルトと小細礫混じりのにぶい黄褐色シルトが主体であり、焼土や炭化粒をわずかに含んでいる。

遺物 埋土上部から縄文時代晩期末～弥生時代初頭と思われる浅鉢の口縁部破片が出土している。

時期 遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RD02土坑

〈位置〉 18Hグリッド (RA06住居跡床面)

〈検出状況〉 RA06住居跡の床面より検出された。

〈規模・形態〉 開口部径110×100cm、深さ80cmの円形を呈している。底部径は58×24cmと楕円形状となっている。

〈埋土〉 黒色シルトを中心とした埋土であり、南東部の壁際に人頭大の重円礫が検出された。

時期 埋土に遺物を伴わなかったが、RA06住居跡に伴う貯蔵穴である可能性が高い。弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RD03土坑

〈位置〉 18Kグリッド (RA01住居跡の床面)

〈検出状況〉 RA01住居跡の床面より検出され、地床炉を切っている。

〈規模・形態〉 開口部径90×85cm、底部径50×35cm、深さは48cmを測る。南東側の壁がなだらかに立ち上がるのに対し、北西側の壁は垂直に近い状態で立ち上がる。

〈埋土〉 精査の進め方のまずさから層の実測・注記を残すことができなかった。

遺物 埋土から縄文時代晩期末と思われる粗製の深鉢と思われる体部破片(119)が出土している。地文としてLR横位縄文が施文されている。内外面に炭化物が多く付着する。

時期 遺物などから縄文時代晩期末の遺構と考えられる。

RD04土坑

〈位置〉 16Iグリッド

〈検出状況〉 RE01の精査段階で暗褐色の床面を黒褐色シルトが切る形でプランを確認できた。

〈規模・形態〉 開口部径140×90cm、底部径95×45cm、深さ35cmの楕円形状を呈している。壁は比較的しまっており、なだらかに立ち上がる。

〈埋土〉 黒褐色・暗褐色シルトを主体とした埋土である。遺物は伴わない。

時期 縄文時代後期中葉の遺物を伴うRE01堅穴状遺構の底面から検出されているだけに後期中葉か、それ以前の遺構である。

RD05土坑

〈位置〉 19Lグリッド

〈検出状況〉 RA08住居跡東側の第V層面から検出された。

〈規模・形態〉 開口部径105×65cm、底部径105×40cm、深さ45cmの楕円形状を呈する。壁は堅くしまっており、東側の壁は内側にえぐり込む。

〈埋土〉 黒褐色～褐色シルトを主体とする埋土であり、わずかに炭化物が混じる。

RD06土坑

〈位置〉 19Lグリッド

〈検出状況〉 RA08住居跡の精査段階において、住居跡の東側第V層面から検出された。

〈規模・形態〉 開口部径70×43cm、底部径38×25cm、深さ30cmを測る。床面は平坦である。西壁はややなだらかに立ち上がる一方、東壁は垂直に立ち上がる。

〈埋土〉 埋土上層に炭化物をわずかに含む。

RD07土坑

〈位置〉 16Dグリッド

〈検出状況〉 第V層面から黒褐色のプランを確認。

〈規模・形態〉 開口部径72×67cm、底部径65×58cmのややゆがんだ円形状を呈し、深さは12cmと浅めである。壁はほぼ直立的に立ち上がる。

〈埋土〉 精査の進め方のまずさから土層の記録を残せなかったが、黒褐色土主体の埋土である。

遺物 層の下部から120の破片が出土している。浅鉢の口縁部であり、蛇行沈線文が展開している。またその他にもミガキのかかった無文の土器片が出土している。縄文時代後期中葉のものと同推される。

時期 遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

RD08土坑

〈位置〉 19Jグリッド

〈検出状況〉 RA04住居跡の床面から検出。RA04住居跡の柱穴を構成するものと思われる。

〈規模・形態〉 開口部径70×55cm、底部径40×30cm、深さ52cmを測る。底にいくに従い、径が小さくなる。

〈埋土〉 黒褐色・暗褐色シルトを主体とした埋土であり、小細礫が多く混じっている。

RD09・10土坑

〈位置〉 18Lグリッド

〈検出状況・重複関係〉 第V層面から検出された。重複関係はない。

〈規模・形態〉 RD09ピットは開口部径70×55cm、底部径45×30cm、深さ20cmを測る。RD10ピットは開口部径60×50cm、底部径30×28cm、深さ24cmを測る。ともに楕円形状を呈している。底部は平坦である。

〈埋土〉 暗褐色、黒褐色シルトを主体とした埋土であり、底部付近には拳大の角礫が見られた。遺物は伴わなかった。

RD11土坑

〈位置〉 14Lグリッド

〈検出状況〉 第V層面から検出。黒褐色のプランが確認された。

〈規模・形態〉 開口部径130×105cmの楕円形、底部径は100×80cmの不整な楕円形状を呈している。深さは24cmある。床面は平坦であり、壁はなだらかに立ち上がる。

〈埋土〉 黒褐色シルト・暗褐色シルトを主体とした埋土である。

遺物 花卉状に開く波状口縁を持つ深鉢の破片（121）が1点出土している。口縁の頂部は三角形形状を呈すると思われる。縄文時代後期中葉～後葉の時期の遺物と考えられる。

時期 遺物から縄文時代後期中葉～後葉の遺構と考えられる。

RD12土坑

〈位置〉 15Lグリッド

〈検出状況〉 第V層面から検出。プランははっきりしなかったが、円形を呈する。

〈規模・形態〉 開口部径49×46cm、底部径37×34cmのほぼ正円形状である。深さは22cm。土坑の壁は堅くしまっている。

〈埋土〉 上部に暗褐色土、下部に褐色土が堆積する。

RD13土坑

〈位置〉 14Lグリッド

〈検出状況〉 第V層面から検出。

〈規模・形態〉 開口部径58×51cm、底部径46×40cmの楕円形状を呈する。深さは13cmと浅めである。壁は堅くしまっている。

〈埋土〉 土層記録消失。

RD14土坑

〈位置〉 23Pグリッド

〈検出状況〉 RA09北東側の第V層面から楕円形のプランが確認できた。

〈規模・形態〉 開口部径75×64cm、底部径33×30cmの不整な楕円形状を呈する。深さは18cmであり、浅い。斜面下部側の壁は削平されている。

〈埋土〉 黒色土を主体としている。

遺物 埋土中位より縄文時代晩期と思われるLR縄文を地文に持つ小破片が出土している。

時期 詳細については不明であるが、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

RD15土坑

〈位置〉 22Pグリッド

〈検出状況〉 RA09住居跡の東側壁際の第V層面から不整な楕円形のプランが確認できた。

〈規模・形態〉 開口部径68×55cm、底部径49×23cmであり、深さは25cmを測る。

〈埋土〉 黒褐色土を主体としている。

時期 埋土上面から縄文時代晩期末と思われる粗製の土器片が出土しているが、詳細については不明である。

RD16土坑

〈位置〉 20Qグリッド

〈検出状況〉 第V層面から黒褐色の円形のプランが確認された。

〈規模・形態〉 開口部径108×100cm、底部径64×74cm、深さ34cmを測る。床面は東側が若干落ち込むものの、ほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土を主体としており、下に黄褐色土が堆積する。

RD17・18土坑

〈位置〉 23Qグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RD17は第V層面を掘り込んで構築されている。RD18はRD17の埋土を切る形で掘り込んでいる。

〈規模・形態〉 RD17は開口部径124×97cm、底部径102×78cm、深さ25cmを測る。RD18は精査の描きから全容を把握できなかったが、開口部直径75cm、底部直径55cm、深さ22cmを測る。RD17の底面は平坦である。

〈埋土〉 RD17は上部に黒褐色土、下部にふい黄褐色土が堆積する。RD18は黒褐色土が主体である。

遺物 RD17埋土中位から粗製の甕の口縁部～体部上半の破片(122)が出土している。口縁はゆるやかに湾曲し、体部にはLR横位縄文が展開する。口縁外面に炭化物が付着する。縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺物と考えられる。またRD18出土の123の甕は体部にLR横位縄文を持ち、頸部には先端の尖った工具で1条の沈線を引きしている。粘土紐の輪積み痕がほぼ3cm間隔で見られる。

時期 遺物から縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RD19土坑

〈位置〉 17Mグリッド

〈検出状況〉 第V層面を掘り込んで構築されており、上面に角礫が数個乗った状態で検出されている。

〈規模・形態〉 開口部径105×105cm、底部径80×76cmの円形状を呈する。深さは26cmと浅めである。

〈埋土〉 黒褐色土・暗褐色土を主体とする。

RD20土坑

〈位置〉 13Mグリッド

〈検出状況〉 第V層面を掘り込んでいる。埋土上面に扁平な巨礫が乗るが、遺構との関連は不明である。

〈規模・形態〉 開口部径190×125cm、底部径101×96cmの楕円形状を呈する。深さは40cmである。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする。

RD21土坑

〈位置〉 22Qグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RA11住居跡の西側柱穴に切られており、RD34にも切られる。Ⅱ層面において検出している。検出面において弥生時代初頭と思われる土器片が散乱していた。

〈規模・形態〉 開口部径188×115cm、底部径175×108cmの楕円形状を呈する。深さは31cmと浅く、底面は平坦である。壁はほぼ直立に近い形で立ち上がる。

〈埋土〉 上部に黒褐色土が堆積し、炭化粒・土器片が多く混入する。下部には暗褐色土が堆積する。

RD22土坑

〈位置〉 22Rグリッド、RA11石囲炉東側

〈検出状況〉 RA11床相当面から楕円形に広がる黒褐色土のプランの広がりが確認できた。断面から2つの土坑の存在が認められたが、プランからは確認できなかった。

〈規模・形態〉 開口部径170×108cm、底部径145×82cmの楕円形状を呈する。深さは21cmと浅い。

〈埋土〉 黒褐色土主体である。

RD23土坑

〈位置〉 22Rグリッド

〈検出状況〉 RA11床相当面から検出。

〈規模・形態〉 開口部径78×70cm、底部径55×50cmのやや不整な形状を呈する。深さは16cmと浅めである。

〈埋土〉 土層記録消失。

RD24土坑

〈位置〉 22Rグリッド、RA11住居跡内

〈検出状況〉 RA11床相当面から検出。

〈規模・形態〉 切り合い関係にあり全容はつかめないが、開口部径77×65cm、底部径61×50cm、深さは15cmである。

〈埋土〉 黒褐色土と暗褐色土主体の埋土である。

RD25土坑

〈位置〉 18Oグリッド

〈検出状況〉 第Ⅴ層面において黄褐色土・褐色土・黒褐色土などが混じり合った状態で入り込む円形のプランが確認できた。

〈規模・形態〉 開口部径206×167cm、底部径170×110cmの楕円形状を呈する。深さは47cmとやや深めである。

〈埋土〉 黄褐色土主体であり、中塚相当火山灰がブロック状に混入する。

時期 埋土中から遺物は出土していないものの、周囲から縄文時代前期前半の土器が出土しており、遺構も同時期のものと考えられる。

RD26土坑

〈位置〉 20Nグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RE03床面から、暗褐色土のプランが確認できた。

〈規模・形態〉 開口部径170×108cm、底部径145×82cmの楕円形状を呈する。深さは27cmと浅めである。

壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 暗褐色土主体の埋土である。遺物は伴わない。

RD27土坑

〈位置〉 22Rグリッド

〈検出状況〉 第V層上面から黒褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径80×61cm、底部径60×42cmの不整な楕円形状を呈し、深さは11cmと極めて浅かった。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土を主体としている。遺物は伴わない。

RD28土坑

〈位置〉 21Qグリッド

〈検出状況〉 第V層上面から暗褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径149×64cm、底部径130×49cmの楕円形状を呈する。深さは32cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 暗褐色土主体の埋土であり、上部には小細礫が多く入る。埋土中に黒褐色土のブロックが帯状に広がる。遺物は伴わない。

RD29土坑

〈位置〉 21Qグリッド

〈検出状況〉 第V層上面から黒褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径90×73cm、底部径17×17cmの円形状を呈する。深さは30cmを測る。

〈埋土〉 上位に小細礫を含む黒色土が広がり、下位に黒褐色土が堆積する。遺物は伴わない。

RD30土坑

〈位置〉 20Rグリッド

〈検出状況〉 第V層上面から暗褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径73×62cm、底部径50×40cmの円形状を呈する。深さは22cmであり、なだらかに立ち上がる。

〈埋土〉 小細礫を若干含む暗褐色土主体の埋土である。遺物は伴わない。

RD31土坑

〈位置〉 23Oグリッド、RA09北側

〈検出状況〉 第V層上面から黒褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径87×59cm、底部径61×32cmの楕円形状を呈する。深さは15cmと極めて浅い。

〈埋土〉 黒褐色土主体の埋土である。遺物は伴わない。

RD32土坑

〈位置〉 23Pグリッド

〈検出状況〉 RA09竪穴住居跡の北東側から検出されている。やや斜面の勾配が急な面に構築されている。

〈規模・形態〉 開口部径110×108cm、底部径98×90cmと円形を呈する。深さは24cmと浅い。

〈埋土〉 黒色土を主体としている。

RD33土坑

〈位置〉 23Pグリッド、RA09北東側

〈検出状況・重複関係〉 第V層上面から黒褐色のプランを検出。第VII層上面においても柱穴状ピットが検出されている。

〈規模・形態〉 開口部径83×65cm、底部径48×45cmの不整な円形状を呈する。深さは17cmと極めて浅い。底面は中央部が若干窪む。

〈埋土〉 黒褐色土主体の埋土である。遺物は伴わない。

RD34土坑

〈位置〉 22Qグリッド、RA11住居跡柱穴列の西側

〈検出状況〉 第V層上面において黒褐色土のプランを検出。プランの西側から北側にかけて黄褐色の盛り土状のブロックが広がる。

〈規模・形態〉 開口部径160×143cm、底部径90×75cm、深さ55cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、中場を有する。

〈埋土〉 黒色～黒褐色を主体とした埋土である。また、埋土最上面には角礫が多く堆積する。

時期 遺物から縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RD35土坑

〈位置〉 21Pグリッド

〈検出状況〉 第V層上面において暗褐色土が楕円形状に広がるプランを確認した。

〈規模・形態〉 開口部径292×132cm、底部径190×53cmの南北に細長い楕円形状を呈する。深さは最も深いところで51cmを測る。

〈埋土〉 精査のまずさから土層の記録を残すことが出来なかったが、暗褐色土を主体とした埋土であり、層下部には黒褐色土が堆積する。また底面及び壁際に人頭大以上の角礫が多く見受けられた。

RD36土坑

〈位置〉 19Oグリッド

〈検出状況〉 第VII層上面から灰褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径110×91cm、底部径70×62cmの円形状を呈する。深さは18cmと極めて浅い。北壁

はなだらかに立ち上がるものの、南壁は急な角度で立ち上がる。

〈埋土〉 灰褐色主体の埋土であり、亜角礫が多く含まれる。遺物は伴わない。

時期 遺物は伴わないものの、周囲から縄文時代前期前半の土器が出土しており、遺構も同時期のものと考えられる。

RD37土坑

〈位置〉 19Oグリッド

〈検出状況〉 第Ⅳ層上面から灰褐色のプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径170×116cm、底部径113×51cmの楕円形状を呈する。深さは31cmを測る。壁はやや急な角度で立ち上がり、底面は平坦に広がる。

〈埋土〉 灰褐色を主体とし、埋土下部に亜角礫が若干堆積する。

遺物 126・130は埋土上部から、128・129・130は埋土下部より出土している。その他にも多くの土器片が出土している。すべての土器片の胎土に繊維が多く含まれており、器表面には縄文が施文される。遺物の時期は縄文時代前期前半と考えられる。

時期 遺物などから縄文時代前期前半の遺構と考えられる。

RD38土坑

〈位置〉 19Pグリッド

〈検出状況〉 第Ⅴ層面から、中環相当火山灰が楕円形状に堆積するプランを検出。

〈規模・形態〉 開口部径236×172cm、底部径195×132cm、深さは28cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は中環相当火山灰の堆積が主体であり、そのうち上部は水性堆積を示す。

遺物 埋土下部から125の石鏃が1点出土している。先端をわずかに欠損しているものの、三角形状を呈する。基部は平基であり、側縁形態も直立的である。縄文時代前期の遺物であろうと考えられる。

時期 遺物・埋土中に含まれる火山灰から縄文時代前期の遺構と考えられる。

RD39土坑

〈位置〉 21Pグリッド

〈検出状況〉 第Ⅴ層面から黒褐色土と暗褐色土の楕円形のプランが確認できた。

〈規模・形態〉 開口部径82×54cm、底部径55×33cm、深さは25cmである。

〈埋土〉 南半分は暗褐色土主体の埋土であり、それを切るようにして北側は黒褐色土主体の埋土が堆積する。共に柱穴裏である可能性が高く、北側は後から構築されたものと思われる。

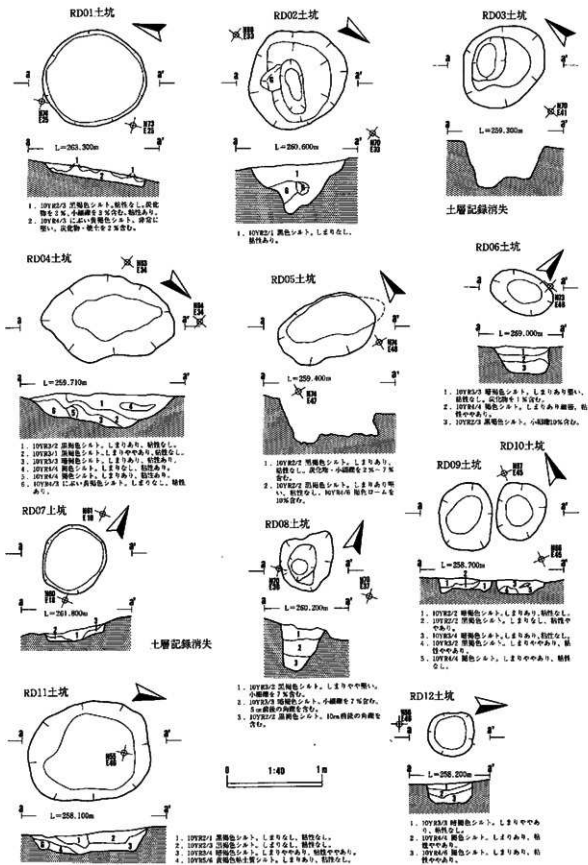
RD40土坑

〈位置〉 23Rグリッド、RA11住居跡b列北側の構成柱穴の可能性もある。

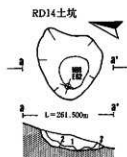
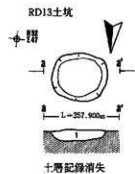
〈検出状況〉 第Ⅴ層面から検出。

〈規模〉 遺構の切り合いにより詳細は明らかでないが、開口部径60×58cm相当の円形状を呈する。深さは15cmと浅い。

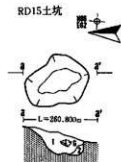
〈埋土〉 暗褐色土を主体としている。



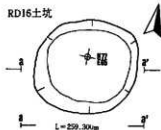
第19図 RD01土坑~RD12土坑



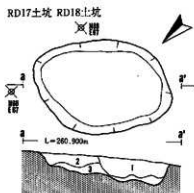
1. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりなし。粘性あり。
2. 10YR4/2 に近い黄褐色シルト。しまりややあり。粘性なし。



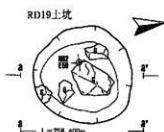
1. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりややあり。粘性あり。褐色土がアロックス状に散らばる。
2. 10YR3/2 暗褐色シルト。しまりあり。粘性あり。



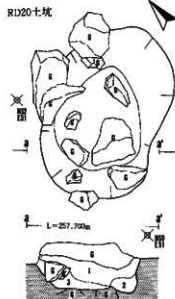
1. 10YR2/1 黒褐色シルト。しまりあり。粘性あり。小礫（粒径約3mm）あり。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりあり。粘性あり。炭化物1%あり。
3. 10YR2/2 黒褐色ローム質シルト。しまりあり。粘性あり。小礫約5%あり。炭化物約2%あり。
4. 10YR4/2 褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。腐植質あり。



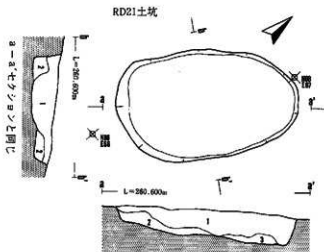
1. 10YR2/1 暗褐色シルト。しまりあり。粘性ややあり。芋片の層と土層片を混合。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりあり。粘性あり。
3. 10YR3/2 に近い黄褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。



1. 10YR2/2 暗褐色シルト。しまりややあり。粘性なし。
2. 10YR2/3 暗褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。
3. 10YR4/2 に近い黄褐色粘土質シルト。しまりややあり。粘性ややあり。小礫あり。

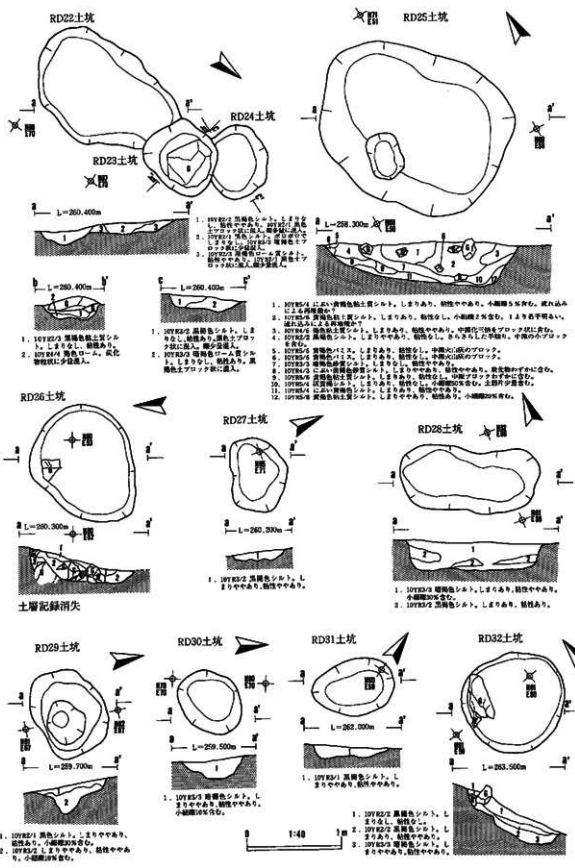


1. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりなし。粘性あり。植物の根が入り混じる。
2. 10YR2/3 に近い黄褐色粘土質シルト。しまりなし。粘性ややあり。砂層土が多く混じる。
3. 腐りすぎ

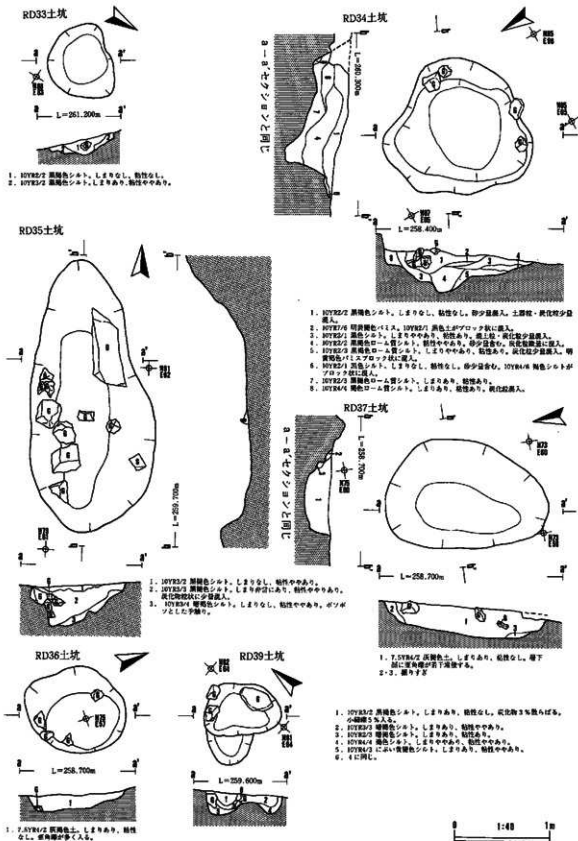


1. 10YR2/2 黒褐色シルト。しまりなし。腐植土。腐り少量混入。炭化物・土層片が混入。黄褐色火山灰層土と赤から中部に層状に混入。
2. 10YR3/2 暗褐色ローム質シルト。しまりややあり。無粘性。10YR6/6 褐色ローム質アロックス状土あり。炭化物・土層片混入。腐り少量混入。
3. 10YR2/2 褐色ローム質シルト。しまりややあり。粘性あり。10YR2/3 暗褐色ローム質土をアロックス状に少量混入。炭化物・土層片少量混入。

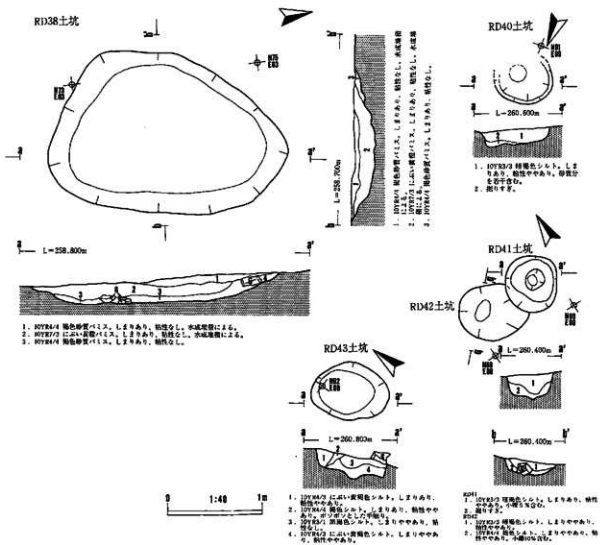
第20図 RD13土坑～RD21土坑



第21図 RD22土坑～RD32土坑



第22図 RD33土坑～RD37土坑、RD39土坑



第23図 RD38土坑、RD40土坑～43土坑

RD41・42土坑

〈位置〉 22Rグリッド、RA11住居跡石囲炉の北側

〈検出状況〉 第V層面から暗褐色土のプランが切り合い関係を持って確認された。RD42はRD41によって切られている。

〈規模・形態〉 RD41土坑は開口部径60×54cm、底部径20×22cm、深さ26cmであり、RD42土坑は開口部径76×62cm、底部径24×15cm、深さ16cmであり、ともに浅めである。

〈埋土〉 とともに暗褐色土主体の埋土である。

RD43土坑

〈位置〉 23Rグリッド、RA11住居跡a列北側の構成柱穴の可能性もある。

〈検出状況・重複関係〉 第V層面から検出。

〈規模・形態〉 開口部径81×63cm、底部径60×45cm、深さ24cmを測る。楕円形状を呈している。

〈埋土〉 黒色土主体の埋土に黄褐色土が多く混入する。

4. 竪穴状遺構

RE01竪穴状遺構

遺構

〈位置〉 17Iグリッド

〈検出状況〉 第Ⅲ層の暗褐色土面において黒褐色土のプランが確認できた。また床面からRD04土坑が検出されている。

〈規模・平面形〉 南北2.6m、東西2.4m、深さ0.4mの楕円形状を呈する。

〈埋土〉 黒褐色土を主体としている。埋土中に現地性のもと考えにくい焼土が薄く散らばるが、斜面上部からの流れ込みによる堆積と考えられる。

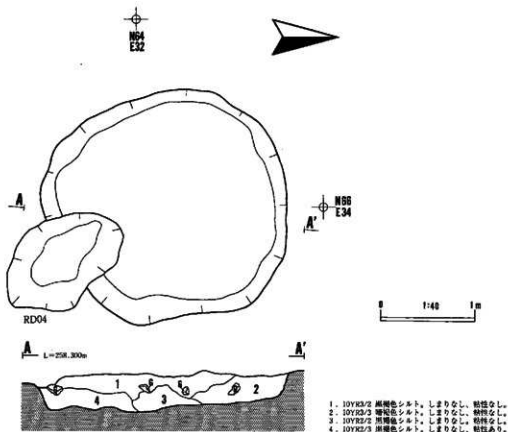
〈壁の状態〉 ややなだらかに立ち上がり、堅くしまっている。

遺物

〈出土状況〉 床面から1点、埋土中から2点の遺物が出土している。

〈土器〉 床面から深鉢の口縁部から体部にかけての破片(131)が出土している。体部にはLR斜縄文を持ち、口縁部付近に炊きこぼれの炭化物が付着する。口唇部は内・外に膨らみを持たず、まっすぐに立ち上がる。埋土中からは刺突文を文様を持つ土偶の肩部破片(445)が1点出土しているが、流れ込みによるものであると推測される。他の数地点から出土している土偶破片も文様・色調などから同一個体と推測される。

時期 床面出土の土器から縄文時代後期の遺構と考えられる。



第24図 RE01竪穴状遺構

RE02 竪穴状遺構

〈位置〉 21N～21Oグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RA10住居跡の東側を切るように構築されている。

〈規模・平面形〉 直径3.2mの円形の遺構である。

〈埋土〉 主体は粘性の強い暗褐色土の埋土であり、堅くしまっている。埋土中位～下位にかけて巨大な角礫が多く入る。

〈壁の状態〉 壁は粘土質系の土壌であり、垂直に近い角度で立ち上がる。

〈壁高〉 北壁42cm、南壁29cm、東壁37cm、西壁39cmであり、最も高い北東側は66cmを測る。

〈床面・掘り方〉 第V層面を掘り込んで遺構を構築している。床面には角礫が散らばるが平坦であり、堅くしまっている。

遺物 埋土上部から粗製の甕の体部破片が少量出土している。また床面付近から縄文時代晩期末～弥生時代初頭と思われる浅鉢の体部破片が出土しており、上部出土の破片と时期的に大きく差がないと思われる。ゆえにRE02は一気に埋められたものと考えられる。

時期 詳細は不明であるが、RA10住居跡より新しいことは明らかである。

RE03 竪穴状遺構

遺構

〈位置〉 20Nグリッド

〈検出状況・重複関係〉 RA10住居跡の南辺を切るように黒褐色土のプランが確認された。

〈規模・平面形〉 遺構の大部分を削られており、分らない。

〈埋土〉 埋土上位に黒褐色土、埋土中位～下位にかけて暗褐色土が堆積する。埋土上位の黒褐色土はRA10住居跡の埋土が流出したものである可能性が高い。

〈壁高・壁の状態〉 東壁16cm、北東壁20cm、北壁32cm、北西壁23cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、やや堅くしまっている。

〈床面・掘り方〉 ならかに斜面下位側に向けて傾斜する。

遺物

〈出土状況〉 132の磨製石斧の破片は埋土上部から出土したが、本遺構に伴うものではなく、RA10住居跡に伴う可能性が高い。基部は折損しており、先端部は使用時に欠損したものと推測される刃。

時期 詳細は不明であるが、切り合い関係よりRA10住居跡より新しいことは明らかである。

RE04 竪穴状遺構

遺構

〈位置〉 20Nグリッド

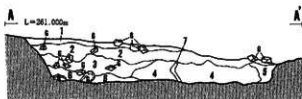
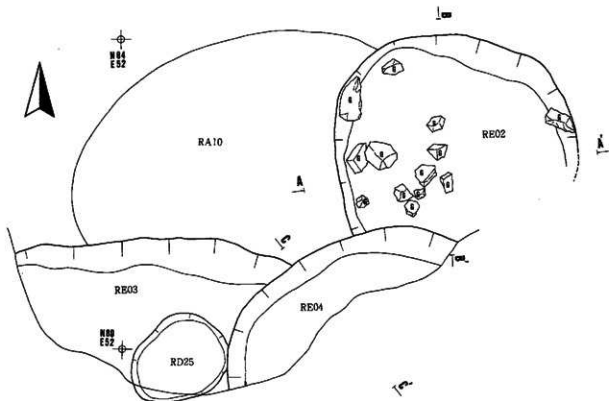
〈検出状況・重複関係〉 RA10、RE02、RE03のすべてを切る関係にある。

〈規模・平面形〉 遺構の大部分を削られており、分らない。

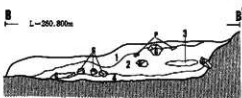
〈埋土〉 しまりのない黒褐色土を主体とする。埋土中に多くの角礫が混じる。

〈壁高〉 北東側の壁は22cmを数えたが、その他の部分は削平を受けている。

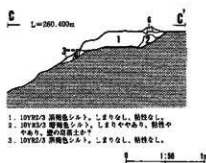
〈床面〉 角礫を多く含むものの平坦な床面である。



1. 10YR3/2 黄褐色シルト。しまりやあり。粘性なし。腐植の混入。2層目の底に土層2層存在。
2. 10YR3/4 暗褐色シルト。しまりやあり。粘性やあり。炭化粒1%程度入る。大-巨大角礫が30%入る。
3. 10YR5/4 にみよ黄褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性やあり。
4. 10YR5/4 にみよ黄褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性やあり。炭化粒の混入。高さよりややにこる。



1. 10YR2/2 黄褐色シルト。しまりなし。粘性やあり。腐植の混入。
2. 10YR3/2 黄褐色シルト。しまりなし。粘性やあり。腐植の混入。
3. 10YR4/4 暗褐色シルト。しまりやあり。粘性あり。最大一人頭大の角礫の混入。
4. 10YR3/2 暗褐色シルト。しまりあり。粘性あり。炭化粒が若干混入。最大角礫の混入。
5. 10YR5/4 暗褐色シルト。しまりなし。粘性やあり。
6. 10YR3/2 暗褐色シルト。しまりあり。粘性やあり。手掘りの角礫が非常に多く入る。
7. 10YR5/2 暗褐色シルト。しまりなし。粘性やあり。腐植。



1. 10YR2/2 黄褐色シルト。しまりなし。粘性なし。
2. 10YR3/2 暗褐色シルト。しまりやあり。粘性やあり。炭化粒若干。
3. 10YR5/2 黄褐色シルト。しまりなし。粘性なし。

第25図 RE02~RE04竪穴状遺構

時期 詳細は不明であるが、切り合い関係よりRA10住居跡より新しいことは明らかである。

RE05竪穴状遺構

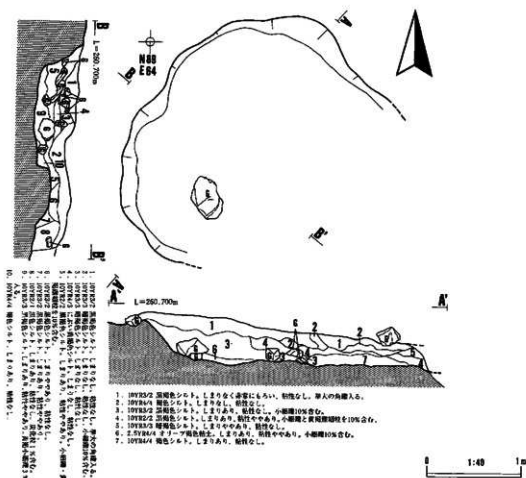
遺構

〈位置〉 22Qグリッド

〈検出状況・重複関係〉 第V層面において暗褐色土のプランがまんやりと確認できた。RD21・RD34の土坑などに南半を切られている。

〈規模・平面形〉 3×2.3mの楕円形を呈するものと推測される。

〈埋土〉 黒色~黒褐色土を主体とし、遺構の南西側には盛り土状の黄褐色土が堆積する。



第26図 RE05竪穴状遺構

〈壁高〉 北東壁14cm、北壁38cm、北西壁29cm、西壁33cm、南西壁29cmを測る。

〈床面〉 平坦な床面であり、堅くしまっている。床面上に扁平な瓦円礫が見られたが、使用されたものかは分からない。

時期 詳細は不明であるが、切り合い関係から弥生時代初頭頃と考えられる。

RE06竪穴状遺構

〈位置〉 21Sグリッド

〈検出状況〉 第V層面において暗褐色土のプランを確認した。

〈規模・平面形〉 南半は調査区外にかかるため、全容はとらえられなかったが、一辺2.2mの方形を呈すると思われる。

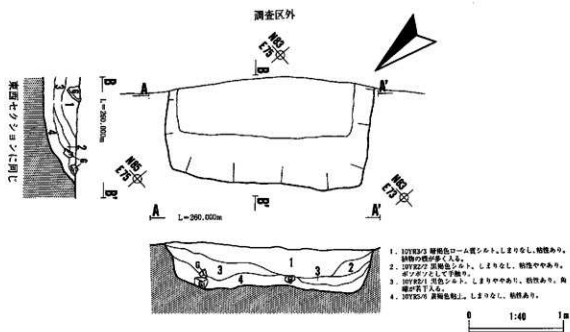
〈埋土〉 暗褐色土～黒褐色土の堆積をなす。

〈壁の状態〉 北側の壁は斜めに立ち上がるが、東西の壁はともに垂直に近い形で立ち上がる。

〈壁高〉 東壁31cm、北東壁34cm、北壁24cm、北西壁33cm、西壁32cmを測る。

〈床面・掘り方〉 第V層面を掘り込んでおり、平坦に構築されている。

時期 詳細は不明であるが、RH02配石遺構に伴う遺構とも考えられる。



第27図 RE06竪穴状遺構

5. 焼土遺構

RF01焼土遺構

〈位置〉 17Oグリッド

〈検出状況〉 中振相当火山灰を含む第V層上面で検出した。

〈規模・形態〉 92×73cmの範囲に焼土や炭化物が分布している。焼土の厚さは最大5cmを測るが、浸食によって上面部分は削られている可能性が高い。

遺物 伴う遺物はないが、周囲より縄文時代前期前半の表裏縄文の破片が出土している。

時期 遺物などから縄文時代前期前半の遺構と考えられる。

RF02焼土遺構

〈位置〉 16Oグリッド

〈検出状況〉 RF01焼土遺構よりやや南側のV層上面部分から検出された。RF01と隣り合うように位置している。

〈規模・形態〉 焼土の密度はあまり濃くないが、65×57cmの範囲に焼土が広がっている。焼土の厚さは最大で4cm程度である。

遺物 焼土上面より133の表裏縄文の土器片が出土している。縄文時代前期前半の遺物と思われる。

時期 遺物などから縄文時代前期前半の遺構と考えられる。

RF03焼土遺構

〈位置〉 17Jグリッド

〈検出状況〉 II層面から検出された。削平により、焼土上面部分が削られている可能性が高い。

〈規模・形態〉 53×43cmの範囲に焼土が認められた。厚さは最大で20cmを測るが、密度は濃くない。
 遺物 埋土内から134の石鏝が出土している。基部は欠損しているが凹状を呈し、身部にはアスファルトが付着する。また底部付近から縄文時代晩期末～弥生時代初頭の浅鉢の底部破片が出土している。
 時期 遺物などから縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構と考えられる。

RF04焼土遺構

〈位置〉 11Mグリッド

〈検出状況〉 IV層上面において発達状況の良い焼土が検出された。掘り込みがなされている。

〈規模・形態〉 直径46cmの円形の範囲に焼土の広がりが認められた。厚さは18cmを測り、焼土の発達状況は極めて良い。

時期 埋土内に遺物は含まないものの、遺構周辺から縄文時代後期中葉の土器片がまとも出土しているため、遺構も同時期と考えられる。

RF05焼土遺構

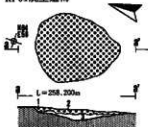
〈位置〉 21Kグリッド

〈検出状況〉 調査区北側の山裾の地肌が露出している部分より遺構の断面が確認できた。

〈規模・形態〉 60×30cmの不整な楕円形状の範囲より焼土の広がりが確認された。厚さは9cmであり、焼土の発達状況は良くない。東側縁に角礫が存在するが、遺構に伴うものかどうかわからない。

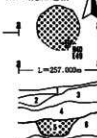
遺物 埋土内・周辺から遺物は出土していない。

RF01焼土遺構



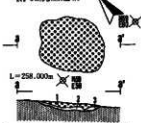
1. SYR4/A 濃い黄褐色シルト。しまりあり。粘性なし。(焼土層)
2. IJYR2/2 黒褐色シルト。しまりあり。粘性ややあり。焼土・小礫層を2層含む。
3. IJYR2/1 黒色シルト。しまりあり。粘性ややあり。焼土層を5層含む。

RF04焼土遺構



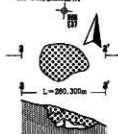
1. IJYR2/2 黒褐色シルト。しまりなし。粘性なし。小礫層多く含む。焼土層多く含む。
2. IJYR4/A 暗褐色シルト。しまりなし。粘性なし。小礫層多く含む。角礫層と厚みがある。
3. IJYR2/2 黒褐色シルト。しまりあり。粘性なし。炭化層・小礫層を多く含む。
4. IJYR4/A 濃い黄褐色粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。中・大の角礫多く含む。
5. 7. SYR4/B 暗色シルト。しまりあり。粘性あり。焼土層。
6. IJYR2/1 暗褐色シルト。しまりあり。粘性あり。中・小礫層多く含む。

RF02焼土遺構



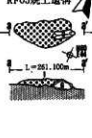
1. IJYR2/2 黒褐色シルト。しまりあり。粘性ややあり。
2. IJYR2/2 暗褐色シルト。しまりあり。粘性なし。焼土を5層含む。
3. IJYR4/A 濃い黄褐色シルト。しまりあり。粘性なし。(焼土層)

RF03焼土遺構



1. SYR4/A 暗褐色シルト。しまりややあり。粘性ややあり。(焼土層)
2. IJYR2/2 暗褐色シルト。ややしまりあり。粘性ややあり。炭化層を2層含む。
3. IJYR2/2 暗褐色シルト。ややしまりあり。粘性ややあり。

RF05焼土遺構



1. SYR4/A 濃い黄褐色焼土。しまりあり。粘性ややあり。小礫層が若干混じる。



第28図 RF01～RF05焼土遺構

6. 配石・集石・立石遺構

RH01集石遺構

〈位置〉 17Hグリッド

〈検出状況〉 第V層(褐色ローム)面において検出した。周囲に巨礫は多いものの、一カ所において拳大～人頭大の大きさの石が比較的密に集積して検出されたことから、配石遺構とした。

〈平面形〉 東西に細長く集積しており、長軸1m、短軸0.5mの範囲として確認できた。

〈埋土〉 下部には比較的大きな角礫があり、上部には拳大の角礫が分布する。周囲に掘り込み跡は認められない。

遺物

〈出土状況〉 集石内、埋土内から遺物は出土されなかった。周辺から縄文後期中業頃の粗製の深鉢の体部破片が出土している。

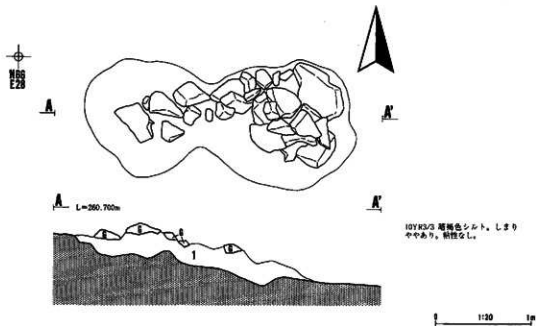
時期 詳細については不明であるが、周辺から縄文時代後期中業の土器が出土していることから同時期と考えられる。

RH02配石遺構

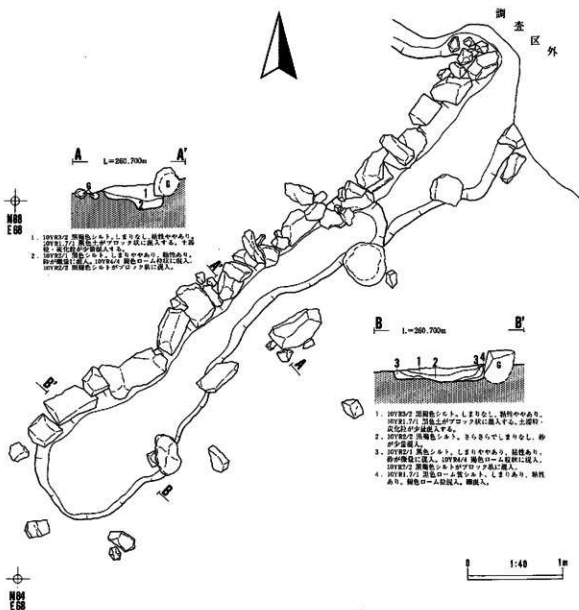
〈位置〉 22Rグリッド～23Sグリッド

〈検出状況〉 第II層上面の段階において北東から南西方向にかけて扁平な角礫を中心として規則的な配列が確認できた。

〈規模・形態〉 長さは6.8mに及び、溝の上端は最大幅110cm、最小幅40cmを測る。溝の下端は最大幅82cm、最小幅20cmを測る。溝の深さは15～26cm程度である。北東側から南西側にかけて低くなっている。配列されている構成礫は直方体の礫が中心であるが、一部扁平な円礫も使用されている。配石は北東側の昭和時代まで残っていた住居の石垣の軸線と合うため、つい最近まで使用された住居に伴う暗渠状の遺構と考えられる。



第29図 RH01集石遺構



第30図 RH02配石遺構

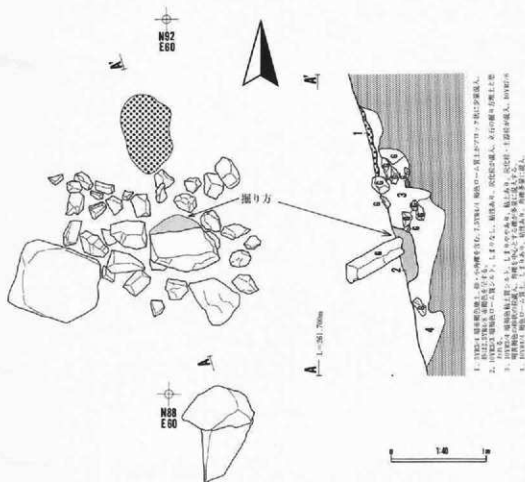
〈埋土〉 埋土上部に黒褐色土、下部に黒色土が堆積する。また、北東側には砂質土が含まれる。遺物は伴わない。

時期 昭和時代の住居に伴う暗渠状施設である可能性が高い。

RH03立石遺構

〈位置〉 23Pグリッド、RA09住居跡の北東側

〈検出状況〉 掘削段階から立石の上半は露出しており、遺構の存在を予測できた。第V層（褐色土）面上において立石（扁平な角礫）の埋め込み痕が確認でき、また同面で立石を支えていたと思われる石が検出されたことから立石遺構と判断し、精査を進めた。

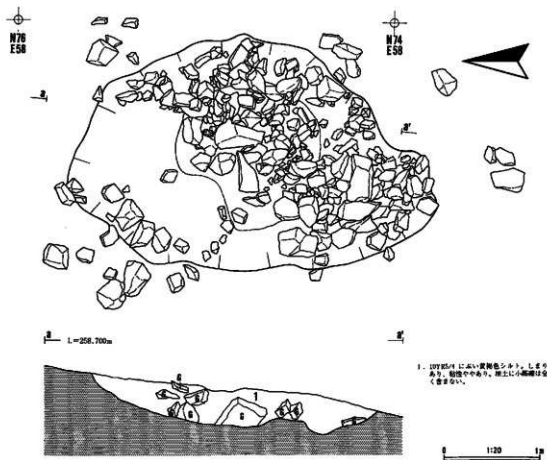


第31図 RH03立石遺構

- 〈規模〉 立石は縦38cm、横30cm、幅7cm程度の安山岩質の扁平な角礫であり、加工した様子は見られない。
- 〈形態〉 立石の埋め込み痕は直径33cmの小さい範囲で認められ、大きく穴を作って埋め込んだものではない。埋め込んだ長さは5cm程度のものである。立石の埋め込み痕周辺には「根固め石」のように角礫が立石を囲むように円上に配列されている。立石北側には42×24cmの範囲で焼土が2～3cm程度薄く堆積している。また、南方、西方には大きく扁平な礫が位置しており、本遺構に伴う可能性がある。
- 〈埋土〉 立石の掘り方の埋土には炭化物が粒状に混入する。
- 時期 遺物は伴わなかったものの、周辺の第V層面から縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺物が出土することから同時期であると考えられる。

RH04集石遺構

- 〈位置〉 190グリッド
- 〈検出状況〉 第V層下部からいび黄褐色のプランが認められ、土坑の底部付近に多くの角礫が堆積していた。
- 〈規模・形態〉 開口部径は190×126cmであり、不整な楕円形状を呈する。深さは20cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。集石は底面に多く堆積し、西側に少なく東側により多く集まる傾向を示す。拳大の亜角礫が



第32図 RH04集石遺構

多く見られる。

（埋土） におい黄褐色土が主体であり、周辺に点在する土坑の埋土と異なり、埋土に小細礫を全く含まない。埋土上面から土器片が出土している。

遺物 135～137は埋土上部から出土した。体部文様として刺突文が3列で2段に巡っている。胎土に繊維は含まれない。いずれも縄文時代前期前半の遺物と考えられる。

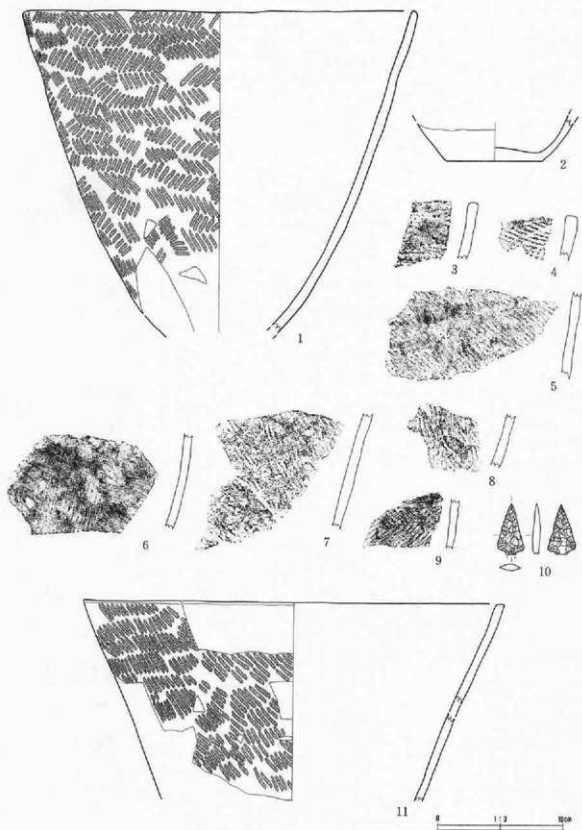
時期 出土遺物などから縄文時代前期前半の遺構と考えられる。

7. 柱穴群

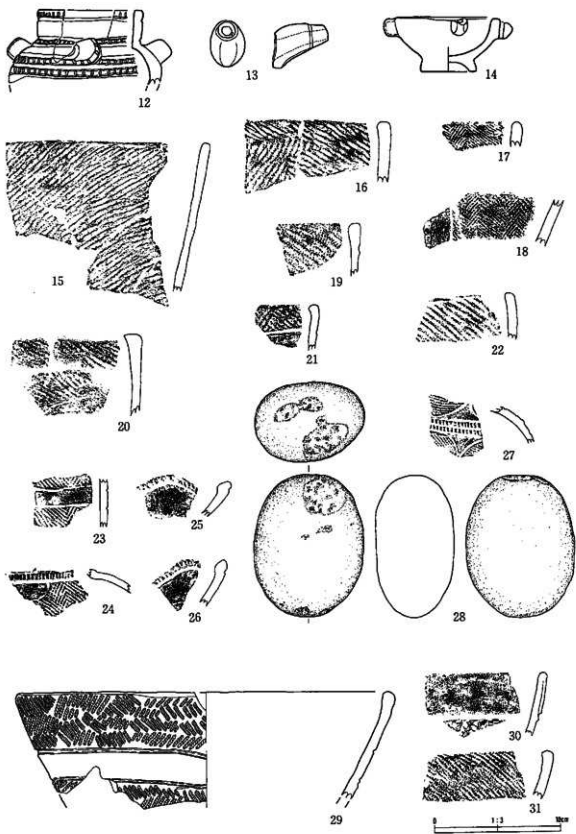
平面図は遺構配置図に、柱穴の計測値は下表に示した

柱穴No	位置	規模 (cm)	深さ	色調・土性		備考
PP01	21Q	50×40	18	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	小埋入
PP02	23Q	84×61	32	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりなし 粘性あり 小礫・砂含む	炭化粒微量を含む
PP03	24Q	40×35	14	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	埋入
PP04	24Q (58)	52	16	10Y R 4 / 4 褐色シルト	しまりなし 粘性あり	埋入
PP05	24Q	51×(42)	22	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりなし 粘性なし	砂埋入
PP06	19M	30×28	20	10Y R 3 / 4 暗褐色シルト	しまりあり 粘性ややあり	炭化粒微量に入る
PP07	17M	29×26	15	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性なし	
PP08	16M	49×34	18	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性なし	炭化粒1%入
PP09	16M	37×30	14	土層記録消滅		
PP10	15M	45×29	16	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	小一筆大の礫30%入
PP11	15M	32×32	8	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP12	15M	39×31	12	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性あり	黄褐色土がブロック状に入る
PP13	14M	50×42	11	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりややあり 粘性なし	
PP14	13M	(32)×25	13	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	
PP15	13M	38×30	13	10Y R 3 / 1 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	土器片少量含む
PP16	13M	20×18	22	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	
PP17	12N	40×31	12	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP18	12N	49×40	24	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性あり	
PP19	16N	50×34	17	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性あり	
PP20	23R	57×51	11	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 暗褐色土ブロック状に混入	砂礫少量入
PP21	22R	43×34	16	10Y R 2 / 1 黒色シルト	しまりなし 暗褐色土ブロック混入	炭化粒少量入
PP22	23R	60×(57)	13	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 暗褐色土ブロック混入	埋入
PP23	23R	30×26	11	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	しまりなし 黒色土ブロック混入	
PP24	23R	47×46	32	10Y R 2 / 1 黒色シルト	しまりなし 粘性なし 暗褐色土ブロック混入	炭化物少量入
PP25	23R	35×28	11	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり 暗褐色土ブロック混入	炭化粒少量混入
PP26	18O	51×33	12	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	中礫火山灰がブロック状に入る
PP27	22R	31×24	10	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP28	22R	74×57	21	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性あり	小礫10%入
PP29	22R	30×27	19	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性あり	
PP30	22R	28×28	12	10Y R 4 / 4 褐色砂質シルト	しまりややあり 粘性なし	
PP31	21R	35×29	13	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性あり	小礫5%入
PP32	21R	57×38	9	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりややあり 粘性あり	
PP33	21R	40×28	10	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	
PP34	21R	54×54	15	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	小礫2%入
PP35	21S	42×41	14	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりなし 粘性あり	小礫3%入
PP36	21S	41×41	21	10Y R 3 / 1 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP37	21R	49×37	19	10Y R 4 / 3 ぶい黄褐色シルト	しまりあり 粘性あり	
PP38	21R	30×26	14	10Y R 4 / 3 ぶい黄褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	小礫3%入
PP39	21Q	37×30	17	土層記録消滅		
PP40	21Q	57×41	13	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	
PP41	20R	44×36	22	10Y R 2 / 1 黒色シルト	しまりあり 粘性あり	小礫3%入
PP42	21Q	36×34	14	土層記録消滅		
PP43	20R	32×24	15	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	
PP44	20R	42×40	22	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	小礫5%入
PP45	24P	40×39	9	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性ややあり	
PP46	22P	49×45	14	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	
PP47	22P	49×37	16	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP48	22P	45×42	17	10Y R 2 / 1 黒色シルト	しまりあり 粘性ややあり	
PP49	22P	35×24	8	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性ややあり	
PP50	22N	45×38	40	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP51	22N	39×38	27	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP52	22M	46×44	28	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性なし	
PP53	19P	57×53	21	10Y R 4 / 6 褐色シルト	しまりあり 粘性あり	上面に中礫火山灰
PP54	22Q	73×55	20	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	角礫・土器片入

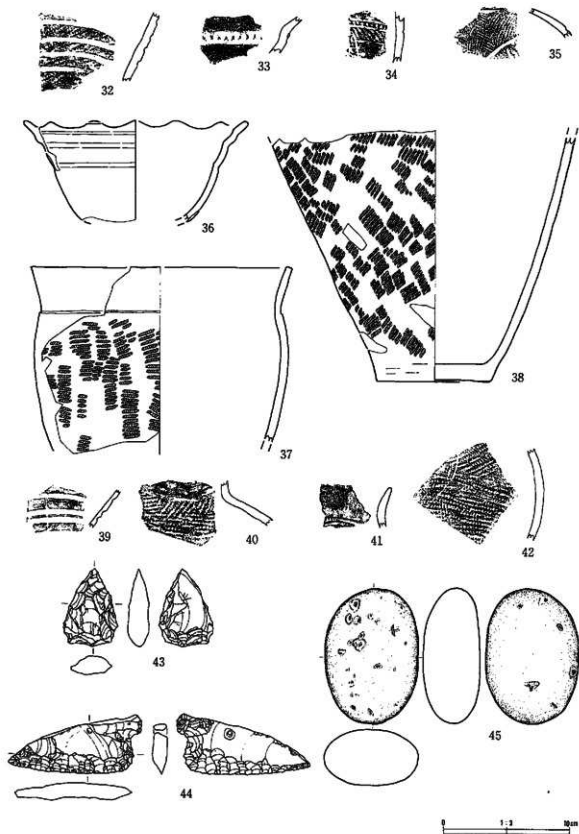
柱穴No	位置	規模 (cm)	深さ	色調・土性		備考
PP55	22Q	32×28	24	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	小礫20%入る
PP56	21Q	(62)×50	23	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりあり 粘性ややあり	
PP57	22Q	30×28	17	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	小礫若干入る
PP58	22Q	32×32	12	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性ややあり	
PP59	21Q	62×57	14	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性なし	褐色土ブロック入る
PP60	21Q	66×(45)	17	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性なし	褐色土ブロック入る
PP61	21P	40×40	18	10Y R 2 / 1 黒色シルト	しまりあり 粘性なし	小礫10%入る
PP62	21P	37×35	17	10Y R 3 / 3 暗褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	黒色土ブロック状に入る
PP63	22Q	38×33	8	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりあり 粘性なし	
PP64	21P	(60)×46	14	10Y R 1.7 / 1 黒色シルト	しまりなし 粘性なし 黒褐色土ブロック混入	礫少量入る
PP65	23R	36×34	15	10Y R 4 / 3 におい黄褐色シルト	しまりあり 粘性ややあり	
PP66	22Q	43×27	24	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	黄褐色ローム粒状に混入	炭化粒多量に入る
PP67	21Q	38×30	24	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	しまりなし褐色ローム粒状に混入	
PP68	22R	91×40	13	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性なし	
PP69	23P	60×51	24	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	しまりなし 粘性なし 砂礫含む	炭化粒少量含む
PP70	22P	68×40	20	10Y R 2 / 3 黒褐色シルト	しまりなし 砂少量含む	炭化粒含む
PP71	22P	43×42	31	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	粘性ややあり 砂少量含む	炭化粒含む
PP72	21Q	42×41	19	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりややあり 粘性ややあり	小礫3%入る
PP73	22Q	41×33	16	10Y R 3 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP74	22Q	63×57	16	10Y R 3 / 1 黒褐色シルト	しまりなし 粘性ややあり	
PP75	22S	48×31	22	10Y R 2 / 2 黒褐色シルト	しまりなし 粘性あり	小礫・黄褐色礫10%入る



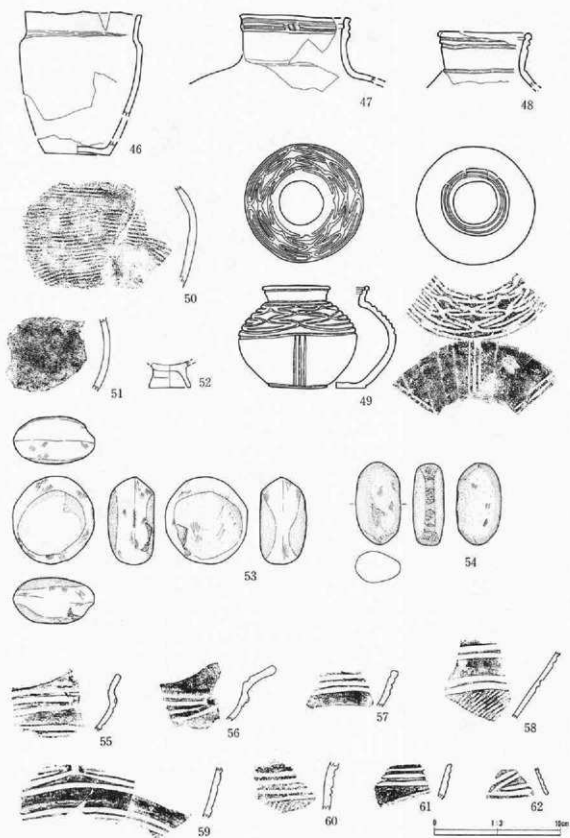
第33図 遺構内出土遺物(RA01、RA02)



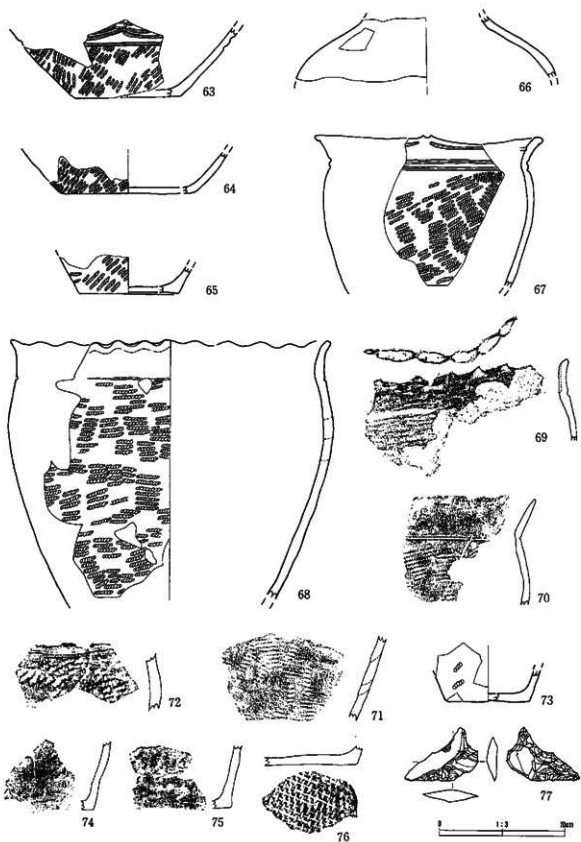
第34图 遺構内出土遺物(RA02、RA03、RA04、RA05)



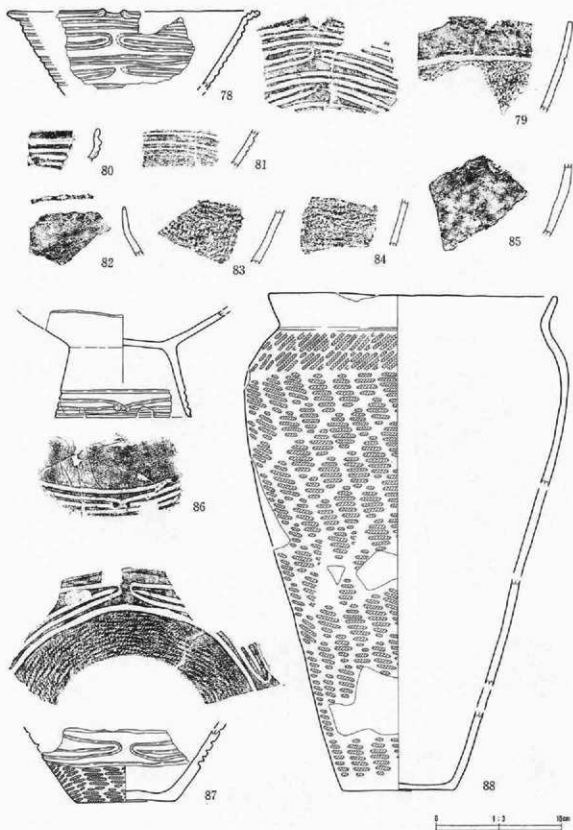
第35圖 遺構内出土遺物(RA05、RA06)



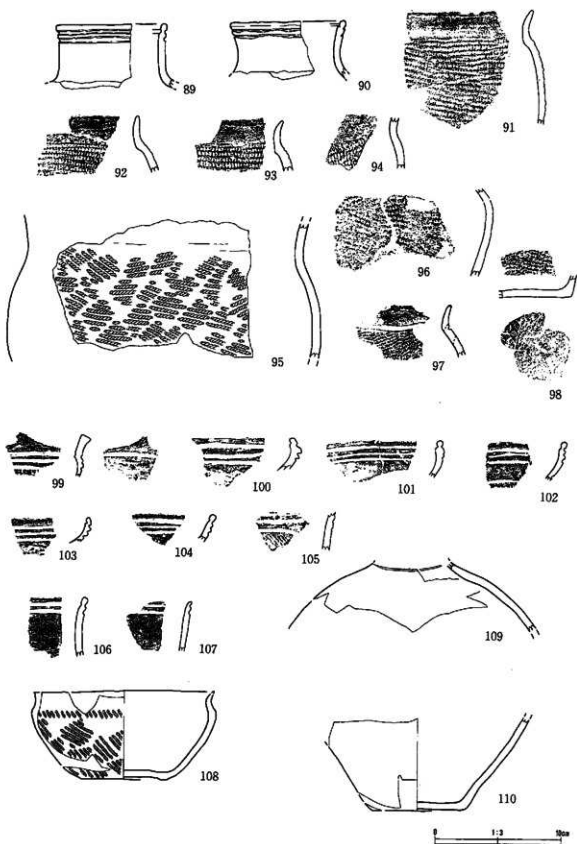
第36图 遺構内出土遺物(RA07、RA08)



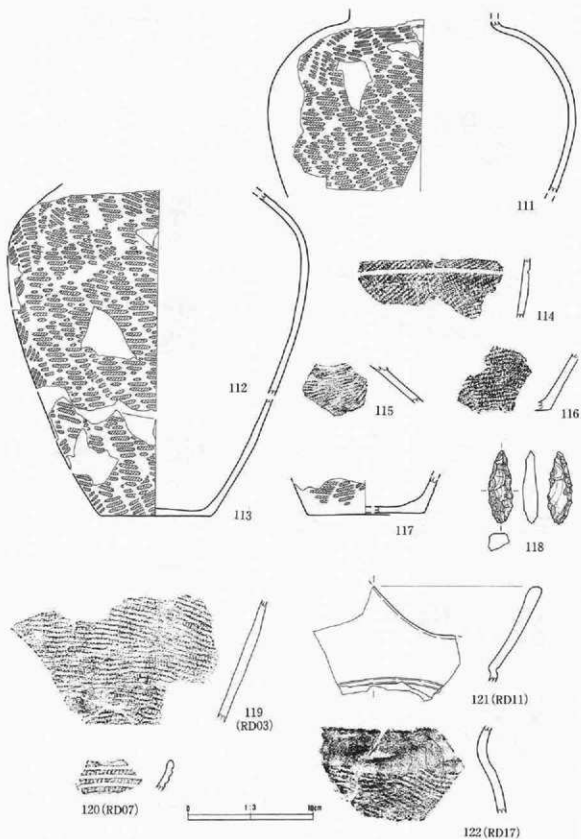
第37図 遺構内出土遺物(RA08)



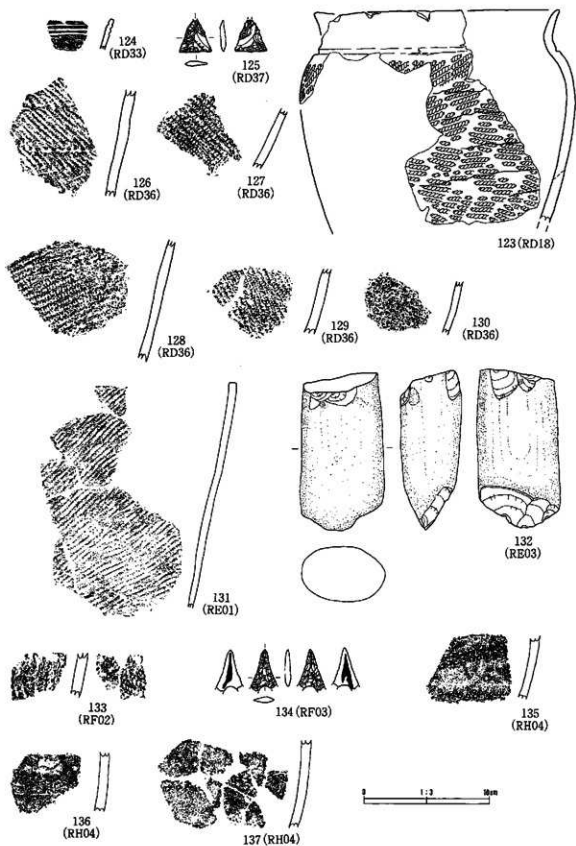
第38図 遺構内出土遺物(RA09、RA10)



第39圖 遺構内出土遺物(RA10、RA11)



第40図 遺構内出土遺物(RA11、その他の遺構)



第41図 遺構内出土遺物(その他の遺構)

8. 遺構外の出土遺物

(1) 土器

遺構外から得られた遺物は、大コンテナで4箱余りであり、住居跡数に比しても少なめである。そのうち大半は土器であり、石器は欠損しているものも含めて50点余りである。その他、土製品が若干出土している。

遺物の時期は大まかに分けると以下のように細分される。

第I群 縄文時代早期後半

第II群 前期前半

第III群 中期末

第IV群 後期中葉

第V群 縄文時代後期後葉

第VI群 晩期末～弥生初頭

第VII群 弥生中期

第VIII群 底部資料

第IX群 土製品

早期・前期の土器は主に南側調査区の平坦部（18N・19N・17O・18O・19O）において集中して出土しており、中期末の土器は西側斜面から少数出土している。後期の遺物は調査区中央部西側にかけて広がり、特に11M・12M・13L・16H・16Iより多く出土している。晩期末～弥生初頭の遺物は山麓へり際に並ぶ住居跡の斜面下部側から多く出土しており、17E・18E・17Hなどから集中して出土している。以上のように同時期の遺物はある程度のまとまりをもつ出土状況となっている。

調査区は全域にわたり、斜面上部からの土砂の崩落により、礫の堆積が非常に多い。そのため遺物の残存状況は悪く、概ねは小破片に化してしまっており、完形品の土器は数えるほどである。同様に斜面中位の14H・15H・16H・14I・15I・16I付近においても土砂の流出により層位的なまとまりとして出土状況をつかむことができなかった。遺物の全貌を把握できる個体が少なかったため、器種ごとの細分という方法を採用しにくく、文様における細分に重点を絞らざるを得なかった。

第I群土器（縄文時代早期後半）

本群の土器はいずれも第VIII層中から出土したものであり、18N・17O付近に範囲は限られている。138は貝殻文を持つ深鉢の口縁部である。口縁の内外両面に貝殻縁線を縦に施し、体部に貝殻背部の凹凸面を利用した条痕文が横に展開する。139の口体部には沈線による施文が見られる。140～142はすべて無文であり、外面は黒くコーティングされたような状態となっている。143の深鉢の尖底部は乳頭状を呈している。いずれの土器片にも繊維は含まれていない。

第II群土器（縄文時代前期前半）

本群の土器は調査区南側の平坦部において出土している。層位的には中探相当火山灰がマトリックスに入るV層中から出土しており、若干VI層中からの出土も見られる。文様または施文されている原体などから7つに細分される。

1類 144と145は同一個体と思われる。体部にループ状の圧痕を持ち、ループの内側には刺突がなされている。胎土には繊維が多量に含まれる。

2類 体部にLR斜縄文の地文を持つ土器を一括した。146・147は口縁部に3本の縦絡文を持つ。口縁端はやや外湾しながら立ち上がる。148は口唇部に縄の結末部の圧痕を持つ。149は体部破片である。いずれの土器片にも繊維が混入する。

3類 体部にRL斜縄文の地文を持つ土器を一括した。150は口唇部に連続した圧痕がなされている。151・152も同様に口唇部に装飾が施され、指頭状の押圧がなされている。153～156は地文にR・LL縄文を持ち、体部に縄の結末部圧痕を等間隔に持つ。153は口縁部であり、2列に結末部の圧痕の列が認められる。いずれの土器片にも多量の繊維が混入する。

4類 体部文様に横位の羽状縄文を持つ土器を一括した。157は口縁部、他は体部破片である。157は口唇部に縄文の圧痕を持ち、体部にはLRとRLを組み合わせた原体により羽状縄文を施している。162はRLの交互縦横回転によって羽状を形成している。いずれの土器も繊維を多量に含む。

5類 表裏縄文を持つ破片である。163、164とも両面にRL縄文による施文がなされる。

第三群（縄文時代中期末）

9DのV層上面から1個体と思われる深鉢状の土器片が出土している。その他のグリッドからは本群に属する土器は出土していない。土器形式としては大木8b式相当と思われる。

166・167はいずれも口縁部の破片である。やや湾曲しながら外側に開く大波状の口縁を持ち、口唇部には沈線による渦巻き状の模様を持つ。体部には隆起した粘土縷を貼り付け、充墳状文を施している（168～171）。また先端の丸い施文具によって楕円形・長方形の区画を施している部分も見られる。体部はキャリパー状に膨らむ器形を呈する。

第四群（縄文時代後期中葉）

本群は縄文時代後期中葉に属する土器である。当該期の土器は住居跡周辺及び西側調査区にかけて多く出土しており、東側調査区からは出土していない。土器形式として十腰内Ⅲ式、宮戸Ⅱ式、宝ヶ峰式、加曾利B式、新山権現社Ⅲ群に相当する。特徴を概観すれば、沈線と磨消縄文による区画が主体を占める。しかし区画の形状、刻みの有無、沈線の施し方により様々な形態があり8類に細分できる。

1類 縄文施文部に平行沈線を付し、弧線もしくは縦沈線によって区切りをし、文様を形成している。172と178以外は頸部付近に平行沈線文が展開すると思われる。弧線の反転する位置として、一段おきに同じ位置で反転するタイプ（172～178）と同じ位置において別方向にそれぞれ弧を描くタイプの（177・179）の2つのタイプに分けられる。173は頸部に刻みを持ち、その下に弧線が蛇行状になって垂下していくタイプとなっている。178は台付き浅鉢の底部である。179は同じ位置において別方向に弧を描くタイプだが、平行沈線文下には刻み列が返る。180以下の破片も弧線による反転がなされると思われる。地文はRL斜縄文とLR斜縄文の両者が見られるが、LR斜縄文が大勢を占める。

2類 縄文施文部に多条の斜縄文を付すことによって文様を形作っている。183の香炉型土器の浅鉢部分にはRL斜縄文の地文の上に斜縄文を施している。斜縄文の上には刻み目帯列が走り、4本の釣り手部分がつくくと推測される。

3類 縄文施文部に直線及び曲線による磨消縄文の区画がなされている土器片をまとめた。内別するとa. 直線による区画(186-193)、b. 曲線による円文状の区画(194-197)、c. 入組文状の区画(198-200)と大きく3つに細分される。

a 186は口縁直下のRL斜縄文をわずかに残し、その下に帯状に磨消帯を巡らせている。187は口縁から広めに縄文帯が占め、その下に無文部が広がっている。189は無文部を強く削り、一段低くすることで文様区画を明瞭にしている。地文はRL斜縄文である。190は壺の体部破片であるが、縦位の羽状縄文の地文にクランク状の磨消を施している。191・192も同様にクランク文的な磨消を持つが、角は丸みを帯びたものとなっている。

b 194-197は曲線による円文的な区画を持つ。磨消帯を円文にする場合(194)と磨消を施し縄文の残存部分を円文にする場合(195-197)の2パターンに分かれる。195は磨消部分を一段低くすることにより文様を強調している。地文は縦位の羽状縄文である。196は壺の体部破片であるが、十字に走る刻み目帯を中心に四方に円文帯が施文されている。

c 198-200は入組文状の文様帯を見せる。地文として198はLR斜縄文が施文され、199には横位の羽状縄文が展開する。

4類 口縁または頸部に刻みを有する土器をまとめた。口縁部端に施される刻みは波状口縁・平口縁の両方に見られるが、特徴から5つに細分される。

a 波状口縁部端に一段の刻みのみが巡るもの(201)

b 波状口縁部端に沈線による区画を伴って、一段の刻みが巡るもの(202-205)

刻み下には無文帯が広がるが、203は曲線による磨消縄文が施される。205の注口土器は口縁部と肩部に刻みを有し、取っ手状の耳が4単位で展開する。また204には縄文のみが文様として広がる。

c 波状口縁部端に沈線による区画を伴って、二段の刻みが巡るもの(206-208)

d 平口縁部端に沈線による区画を伴って、一段の刻みが巡るもの(209)

e 平口縁部端に沈線による区画を伴って、二段の刻みが巡るもの(210-212)

213-216は体部及び頸部に刻みが施されているものである。213・214は同一個体と思われるが、頸部付近に刻みがなされる。沈線による区画は上側のみである。体部下半には磨消縄文が施される。215・216は2本の沈線の区画内に刻みが施されている。

5類 口縁部端に刻みを持たない土器をまとめた。217・220の波状部には、文様を持たないものの、器表面にはミガキがよくかけられている。頸部付近から磨消縄文手法が用いられている。221・222は先端の鋭角的な波状口縁を有する深鉢と思われる。218は口縁部に刻みを施さず、無文部より一段高くして縄文を充填している。やはり波状口縁を呈すると思われる。219も刻みを有しないが、口縁に沿って磨消縄文を施している。223は突起を持つ深鉢の口縁部で反時計回りの渦巻き状のひねりを有している。

6類 浅い沈線と微隆起線による区画により文様を形作っている。224の体部上半には沈線で区画した曲線内を一段低くすることにより、渦巻き状の文様を表現している。体部下半は沈線のみを施し、微隆起による表現は見られない。全面にいいいにミガキがかけられ、黒く光沢を持っている。

7類 縄文・帯描文などの施文された、いわゆる粗製土器を一括した。主に深鉢が占め、若干浅鉢も混じる。

文様形態として最も多いのが器表面に斜行縄文を付す類であり、ほとんどはRL斜縄文である。口唇部にはナデが加えられ、整形されている点は共通であるものの、口縁部内側の肥大の有無は個々の土器により様々であり、以下のように細分される。

- a RL斜縄文が付され、口縁に肥大の見られないもの (225-227)
- b RL斜縄文が付され、口縁内側にやや肥大の見られるもの (228-234)
- c RL斜縄文が付され、口縁内側に強く肥大の見られるもの (235-239)
- d LR斜縄文が付されるもの (240-243)
- e 羽状縄文が付されるもの (244-246)

244はRLとLRの非結束の羽状縄文である。245はRLの縦横回転の交互施文により、羽状を形成している。体部下半には施文が見られない。直線的に伸びる器形を呈している。

f 先端が細く尖った施文工具を6-10本束ね櫛状にし、直線的に引いたもの (247-250)、曲線的に引いたもの (251-252) やや太めの櫛状工具で引いたもの (253-254) が見られる。

g 装飾の見られない、無文のもの (255-256)

8類 注口部を一括した。

258はRA04出土の注口部と同様、表面に強くミガキをかけたものである。257も注口部はミガキをかけただけであるが体部との接続部には無節縄文が施文されている。

第V群 (縄文時代後期後葉)

縄文時代後期後葉に属する土器であり3点のみ出土している。出土地点にまともは見られない。土器型式としては十腰内IV式、田柄VI群に相当する。

259の深鉢の口縁部は大と小の刻みを持つ波状口縁を持っている。体部には竹状施文工具による縦位の細かい刻みが沈線間に施されている。260は縄文施文後、沈線を引き、磨消を行うことによって259と同様の文様を沈線によって作り出している。261の体部には突起が貼り付けられている。

第VI群 (縄文時代晩期末-弥生時代初頭)

縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する土器であり、本遺跡の主体をなす土器群である。当該期の土器は住居跡周辺を中心に山麓のへり際から多く出土している。土器型式としては大淵A'式、砂沢式、青木畑式に相当する。特徴を概観すれば沈線による変形工字文が精製土器に多く施文され、若干平行沈線文、工字文が見られる。器種には精製土器として高坏・浅鉢が多くを占め、若干壺・甕も見られる。蓋と限定できるような土器は出土していない。

1類 高坏・浅鉢

1個体に復元できるものが少なく、高坏と浅鉢に明確に分けられるものが少なかったために一括して取り上げた。口縁部を中心に取り上げ、口縁部の形態及び屈曲の度合いによって細分を行った。また脚部と体部に関しては文様帯による細分を行っている。

(口縁資料)

A 波状口縁を持つもの

a ボタン状の貼り付けを波頂部に持つもの (262~265)

器形・文様的に把握が可能なのは262だけである。262のボタン状突起部の頂部を縁取るように沈線が巡る。波状口縁は大小の突起を伴って8単位で展開するようである。体部には先端のV字形の施文具で深めの沈線が施され、流水文状変形工字文が2段展開し、坏下半には無文帯が広がる。坏部は直線的な広がりをみせた後、浅い角度で屈曲し、口縁が外側に大きく開く器形を呈している。263には口縁直下より先端のU字形の施文具でやや浅めに沈線を引き、工字文を形成している。貼り付けられた瘤はナデが加えられ、扁平に整形されている。265は口縁外側に大きい貼り瘤がつけられている。

b 一山の頂部を持ち、頂部に刻みを有するもの (266・267)

266の土器には口縁直下に工字文が巡っているのが見える。瘤は貼り付けた後にナデを加えている。いずれも口唇部には沈線が巡っている。

c 双山の向かい合う突起を持つもの (268~270)

269には幅広い沈線が施され、瘤の膨らみもはっきりとしている。270の破片の沈線幅は細いが力強く引かれており、瘤を貼り付けた後にナデられた痕跡は認められない。

d 連続波状が施されるもの

そのほかに271の土器は大小の波状の口縁が連続して巡り、頸部付近には浅めの沈線が4本巡る。272は波状口縁を持つ浅鉢状の器形を有すると思われる。体部には緩やかに段を持つようである。

B 平口縁を持つもの

a 口縁部が屈曲せずに真っ直ぐ立ち上がるもの (273~282)

273は浅めの平行沈線が口縁部に三本巡り、体部には複節縄文が施文される。274・275は共に外湾気味に立ち上がる器形を有する。太めの沈線と明瞭な瘤で工字文に近い形の変形工字文を形成している。瘤と瘤の間の凹み部分の下にもミガキがかけられている。278は小さめの器形であるが、他の口縁と異なり、内側に沈線が巡らない。281・282は体部下半が膨らみ、体部中半から口縁にかけ、長く直線的に伸びる。282の体部上半には3本の平行沈線が2段に展開し、体部下半には横位のLR縄文が施される。

b 口縁が緩く湾曲するもの (283~292)

283・287・288は口縁部が丸く緩やかに湾曲する。283の体部上半には3本の平行沈線が2段に展開し、体部下半にはLR斜縄文が施文される。287も283と同様の文様構成をとると推測される。288は太めの沈線で施文されており、変形工字文間に2本の沈線が引かれている。その他の土器は体部が直線的に伸び、口縁部が外側に開くように緩く屈曲する。290は太い沈線と明瞭な瘤で工字文に近い変形工字文が施されている。291と292は直線的に立ち上がり口縁部端においてわずかに内湾する。共に力強い沈線が引かれる。

c 口縁がやや強く湾曲するもの (293~303)

293は先端の丸い施文具で幅の広い沈線を引いている。貼り付けられる瘤の膨らみは顕著である。変形工字文の展開は3(6)単位で巡るようである。294がやや曲線的に湾曲する以外は逆「く」の字状に折れ曲がり、口縁部は直立的に立ち上がる特徴を持つ。295は体部に流水文状変形工字文が展開される。302は変形工字文間に2本の沈線が引かれるタイプであり、3(6)単位で展開する。

d 口縁部が鋭く屈曲して、内側に折れ込むもの (304~309)

307を除くとすべて先端の丸い施文具で力強く沈線が引かれている。瘤の膨らみも非常にはっきりしたものが多く、文様として304の体部上半には変形工字文、体部下半には縄文が、305には工字文が施文される。

C (高坏・脚部資料)

脚部文様を把握できるほどの個体数が少なかったことから、器形により細分した。脚部の器形は大きく以下の3つに細分できる。

a 円筒状のもの (310~327)

脚部の大きさとしては中型のものが多い。文様として流水文状の変形工字文が施されるもの(310~313)、波状文が施されるもの(314~316)、平行沈線が見られるもの(317~327)に分けられる。胎土・焼成とも非常に洗練されている。沈線は先端の丸い施文具で力強く引かれているケースが多い。

b 逆台形状のもの (328~332)

aよりも大きめの脚部が多く、外側に大きく開いている。脚部文様には波状文の施文されるほかに、沈線間に縄文が付される例(329)もある。

c 小形で台状のもの (333~334)

D (坏部資料)

坏部文様は工字文・変形工字文・流水文状変形工字文と大きく3つに分けられるが、体部下半の縄文の有無など様々な形態が見られる。

a 工字文を体部上半に持ち、体部下半に縄文が施文されるもの (335~339)

336の器表面に煤が付着する。貼り付けられた瘤は小ぶりで膨らみもない。体部下半にはLR斜縄文が施文される。338は体部下半だけでなく、工字文下の空間にも縄文を施文している。瘤は膨らみを持っており、瘤下にはナデが加えられている。

b 変形工字文を体部上半に持つもの (340~342)

340・341は変形工字文間に1本の沈線が入るタイプである。共に瘤の貼り付けは小さめである。342・343は流水文状変形工字文を有し、体部上半に2段程度展開するものと思われる。343は体部下半に無文帯が広がる。344は坏部の下半資料であり、LR斜縄文が施文される。349の坏底面には円文の沈線が見られる。347・348は浅鉢の底部であり、共に縄文が施文されている。

2類 壺

個体数が少なく、しかも全体の形状を把握できにくかったため、精製・粗製とも一括して取り上げた。

351は4単位の波状口縁を持ち、体部上半に変形工字文が展開されている。波頂部には刻みを有する。変形工字文に伴う瘤は大きく明瞭としており、沈線も先端の丸い施文具で力強く引かれている。全面に強くミガキがかけられる。352は口縁が非常に短く「広口壺」の器形を呈している。体部上半には3段の流水文状変形工字文が見られ、いずれもほぼ同じ位置で反転している。口縁部には2~3cm間隔ごとに焼成前の穿孔が見られる。接合しなかった破片からも穿孔が見られたので口縁部を一周するものと推測される。4単位展開で穿孔は施されているようである。穿孔は蓋をかぶせるための経過し穴であった可能性が考えられ、352は蓋付き土器と推測される。全面にミガキが丁寧につけられ、特に口縁部は内面にもミガキがかけられている。353は体部上半に流水文状の工字文の施文がなされ、3(6)単位の展開をなす。口縁部はやや外湾気味に開き、肩部に向けて下がり気味に広がる。沈線の断面形はU字状を呈し、幅は狭い。355は磨減が激しいものの、口縁に立体的な凸帯がつけられている。357・358は口縁部であり、口縁端には2条の沈線がともに巡っている。359・360の体部には縄文が見られる。361・362は肩部が張り、底部に向かってすぼまる器形と

推測される。

3類 精製・変

体部に縄文以外の文様を持つ変状の破片を一括して取り上げた。368の破片は他のものと異なり大洞C2期の特徴を持っている。

363～365は口縁部下に変形工字文が施されている。いずれも沈線は太く、瘤もはっきりとした膨らみを持っている。365は突起が2対となって向かい合う形で形成される口縁と推測されるが、その他は一山状で波頂部に刻みが見られるタイプである。367は波状口縁を持つ広口壺と思われる。頸部には2条の沈線が引かれ、波頂部には刻みが入る。内外面ともに煤が多量に付着する。368の体部には平行沈線が多条に引かれ、口唇部には刻みが施されている。口縁部付近で外反する。

4類 粗製・変

体部に縄文の施文された、いわゆる粗製土器を取り上げた。本遺跡において最も出土量の多かった土器である。しかし、体部に縄文以外の文様を持たないことから頸部形態、口唇部装飾などに着眼して細分を行った。

A 頸部で緩やかに屈曲するもの (370～380)

370の口唇部には指頂または棒状工具側面の押圧により表現した小波状口縁を呈し、口縁の反りが小さく、直立気味となる。体部にはLR斜縄文が施文される。内面の体部下半には炭化物が若干付着する。やや左にゆがんだ器形を呈している。374～377の頸部には先端の丸い工具で浅めの沈線が巡っている。口縁下には375を除いてLR斜縄文が施文される。378・379の口唇部には指頂押圧による小波状口縁が巡る。376の口唇部には縄文圧痕が見られる。

B 頸部で強く屈曲するもの (381～395)

381は体部にLRとRLの交互施文による縦位羽状縄文が付される。口唇部には縄文の圧痕が見られる。381～384の口唇部に装飾は見られない。いずれも体部にはLR縄文が施文される。388には先端の尖った工具で1条の刻線が引かれている。386～390は頸部に先端の尖った工具で細い沈線を引いたものである。いずれも口縁の幅は広い。体部には390を除いてLR横位縄文が展開する。394・395の口縁は波状を呈し、頂部には刻みが加えられる。

A・Bは頸部の形態によりさらに3つに細分することが出来る。

- 頸部に何も引かれていないもの (370～373、381～384)
 - 頸部に1条の沈線が引かれるもの (374～380、385～395)
 - 頸部に2条以上の沈線が引かれるもの (396・397)
- C 口縁部が外反せず、内屈もしくは直立するもの (398～402)

398・399は口縁が内屈しており、口縁無文部にLR斜縄文を施文後、ナデを加えている。400～402は口縁が直立し、深鉢状を呈す。400・401の口縁直下には沈線が引かれ、体部に縄文が付される。

D 口縁部が緩やかに外反するもの (403～405)

403は口縁部を欠損しているが、頸部に2本の沈線が巡る。404の口唇部には刻みが施されている。405は口縁直下の無文帯が幅広く占め、器表面に炭化物が強く付着する。いずれも体部にはLR斜縄文が展開される。

第Ⅷ群

弥生時代中期から後期に相当する土器を一括して取り上げた。

410は口縁部の破片で連弧文が3段展開している。沈線は先端の尖った工具で引かれている。外面には炭化物が若干付着する。411の沈線間には波状の沈線を描いており、ともに連弧文を特徴とする異形罫式に相当すると思われる。413の折り返し口縁部には指頭による押圧整形がなされる。その後、先端の四角い棒状工具による刺突が施される。口縁内面にも同様の刺突痕が見られる。412も折り返し口縁を持ち、連続刺突がなされる。さらにその直下に刻みが入られる。土器型式として天王山式に相当すると考えられるが詳細については不明である。

第Ⅷ群 底部資料

底部資料を一括して掲載した。ほとんどが縄文時代後期から弥生時代初期にかけての土器であると推測される。438～443には網代痕資料を掲載した。

第Ⅸ群 土製品

445～451は土偶の胴～腰部の破片であり、同一個体片と考えられる。出土地点にまともではなく、12M・14K・16E・16F・17I・19Nグリッドの広い範囲から出土している。土偶は中空による作りであり、沈線と刺突による文様が施される。449の股間部には1本の筋を入れている。小破片のみで全体の形状を把握することは困難だが、砂沢式の刺突文土偶に似た特徴を備えている。452の土製円盤は地文にLR縄文が付され、中央部に裏面からの穿孔がなされる。

(2) 石器

出土量は少なく、製品は破片も含めて50点余りにすぎない。石器の種類としては石鏃17点、石匙6点、尖頭器4点、石槍・石錐・石棒・石製玉製品・石皿ら各1点、石斧6点（うち磨製石斧4点、打製石斧2点）、凹石3点、磨石5点・敲石1点が出土している。石器の材質として剥片石器は細粒流紋岩質凝灰岩・凝灰質粘板岩を主体としており、特に石鏃に顕著に使用されている。また石斧などに若干緑色凝灰岩が用いられている。ホルンフェルス素材としたものも2点見られる。礫石器には安山岩・花崗閃緑岩が多く使用されている。いずれも北上山地を主産地とした素材と推測される。

第Ⅰ群 石鏃

石鏃は総数17点出土しており、本遺跡の石器の中でも多い割合を占める。基部形態より大きく(A)無茎鏃と(B)有茎鏃に分けられる。無茎鏃は(1)平基と(2)凹基に分けられ、平基が大部分を占める。また有茎鏃は(3)凸基と(4)尖基の2タイプに分けることが出来るが、尖基は少数である。

石鏃の形状の多くは(a)二等辺三角形形状を呈し、(b)正三角形形状のものも少数見られる。大きさとしては2.0cm～3.2cmの範囲に多く見られる。7.1cmという大型のものも見られるが一般的ではない。重量では0.8g～1.2gの間にほとんどの石鏃が包含される。

使用されている石材として総数17点の内、凝灰岩系が8点(細粒流紋岩質凝灰岩7点、赤褐色凝灰岩1点)を数える。また粘板岩系が4点(凝灰質粘板岩3点、粘板岩1点)出土している。その他に安山岩2点、チャート2点、流紋岩1点である。いずれも北上山地が主産地であり、遺跡周辺から入手可能な石材を利用しているといえる。

アスファルトの付着が認められたものは4点見られた。主に基部および身部に付着する。

第II群 尖頭器

4点出土している。石鏃よりも身部にやや厚みを持ち、大きさ・質量とも大きめである。「田柄貝塚Ⅲ」の分類を参考にすると、平面形から(A)三角形状のもの、(B)木葉形状のものに分けられる。さらに基部の形態から(1)円基、(2)尖基、(3)平基があり、側縁の形態として(a)外湾気味のもの、(b)直線的なもの、(c)内湾気味のものとしている。その分類をもとに細分すると43は平基気味であり、基部に打面を持っている。両面加工が施されるが、丁寧な剥離ではない。467の基部は円基であり、木葉形状を呈す。468の側縁部は外湾気味である。

第III群 石鏃

1点のみ出土している。両面加工により、棒状の身部を作り出しているものや、鋭利な端部を作り出しているものを言う。469の端部は欠損しており、全容は明らかでないが、強いえぐり出し部分は持っていない。

第IV群 石槍

1点のみ出土している。両面加工による丁寧な剥離を施している。木葉形状を呈し、握み部分を有している。刃部には打撃による大きな剥離痕が残っている。縄文時代前期前半の土器を包含する第V層中より出土していることから同じ時期のものと思われる。

第V群 石匙

総数6点出土している。形状からすると(A)縦長タイプ(2点)、(B)横長タイプ(4点)に分けられる。また縁辺の構成する数により(1)2縁辺のもの、(2)3縁辺のものに分けられる(田柄貝塚Ⅲ参考)。両面加工はしているが背面部分は大きい剥離面を残し、若干刃部に加工を施して石匙としているものが多い。44の石匙は白い塗点部分に穿孔がなされている。472の石匙の握み部にはアスファルトの付着が認められる。その他の石匙には見られない。

使用されている石材としては石鏃をはじめとする剥片石器同様、凝灰岩系を使用している割合が多く、細粒流紋岩質凝灰岩3点、凝灰質粘板岩1点を数える。その他に赤褐色粘板岩1点、チャート1点である。主産地は北上山地と推測される。

第VI群 不定形石器

石鏃・尖頭器・石鏃・石槍・石匙を除く剥片石器をまとめた。全部で4点出土している。「田柄貝塚Ⅲ」の分類を参考にすると

- A 剥辺の1縁辺に刃部があるもの
- B 剥辺の2縁辺に刃部があるもの
- C 剥辺の3縁辺に刃部があるもの

と分けられる。Aには475・478が含まれ、Bには476・477が含まれる。

第Ⅴ群 石斧

総数6点出土しており、うち(A)磨製石斧4点、(B)打製石斧2点が出土している。磨製石斧の内、132と480は弥生時代初頭の頃に製作された石斧と考えられる。また483の打製石斧は出土層位からも縄文前期のものと同推測される。石材として凝灰岩系のもが多く、緑色凝灰岩・砂質凝灰岩・チャート質細粒凝灰岩などが利用されている。481の磨製石斧(欠損)はホルンフェルスを利用しており特異な例である。弥生時代前半のものと思われる132の磨製石斧は凝灰質砂岩を利用しており、主産地は北上山地と推定される。

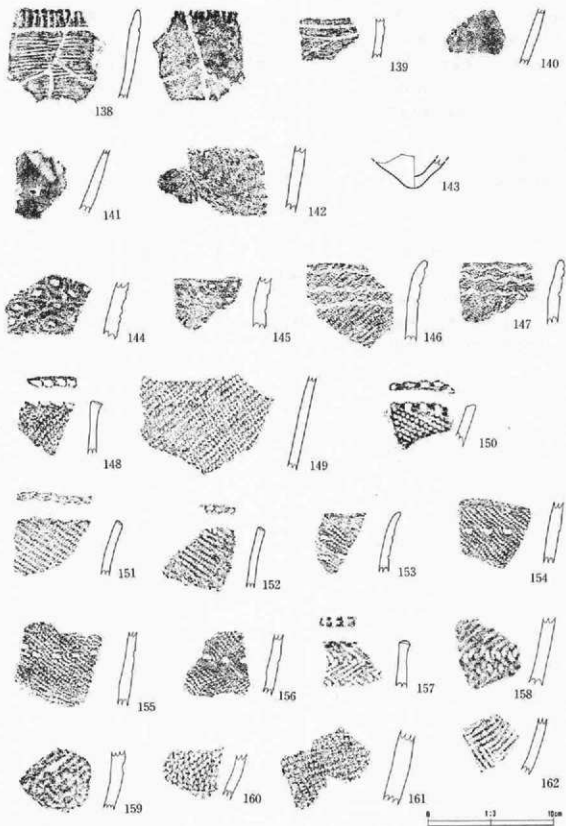
第Ⅵ群 石棒

484の石棒にはホルンフェルスが利用されており、他の石器類とは石材を異にしている。

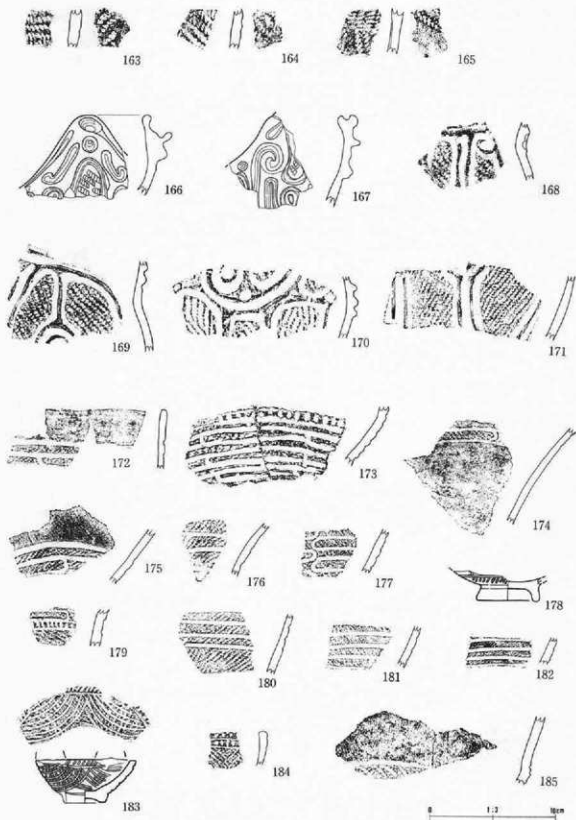
第Ⅶ群 礫石器

10点中、5点が磨石、3点が凹石、1点が敲石と石皿状礫石器である。45の磨石は減摩の状態が認められ、片面のみ赤彩の痕がうかがえる。54の磨石は側面全面を使用しており著しく減摩している。28・489らは凹部分も認められるが敲打による使用痕も認められる。

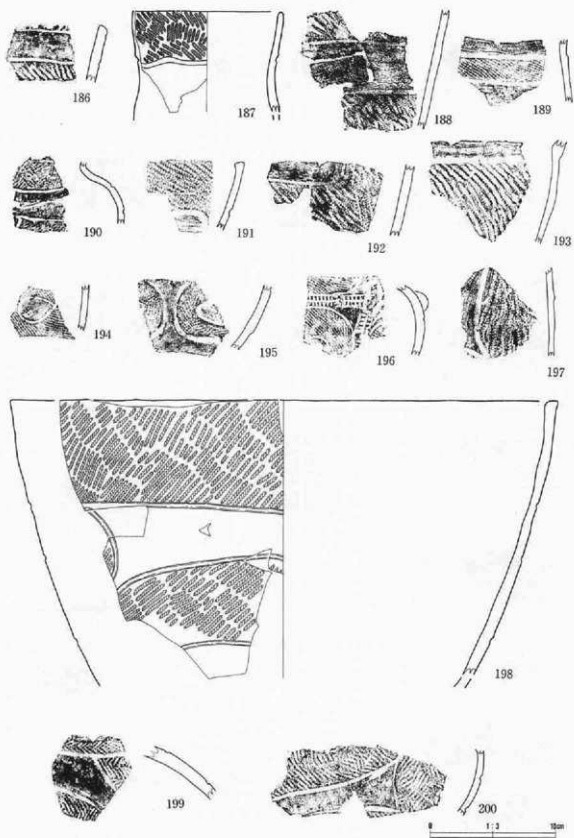
石材として10点中5点に花崗閃緑岩が利用され、残る3点に安山岩、2点に緑色凝灰岩が利用されている。いずれも遺跡内に多く見られる石材である。



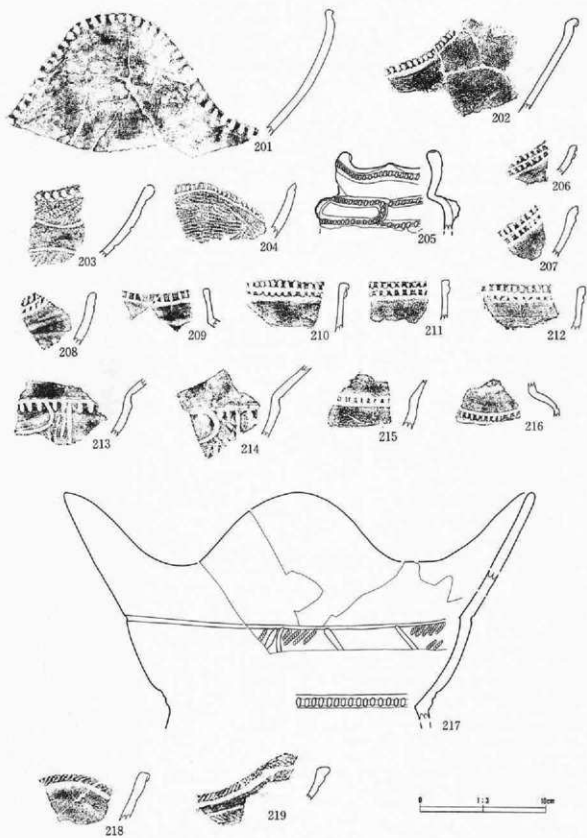
第42図 遺構外出土土器(1)



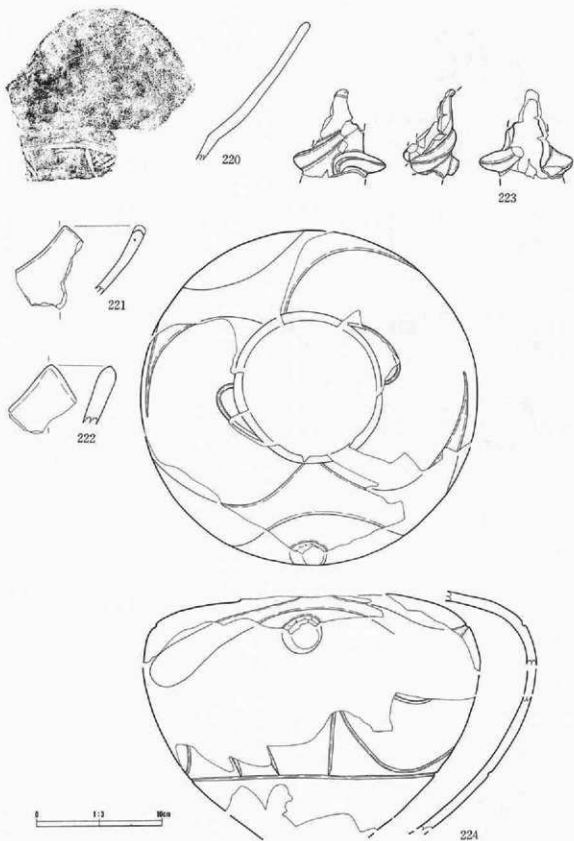
第43図 遺構外出土土器(2)



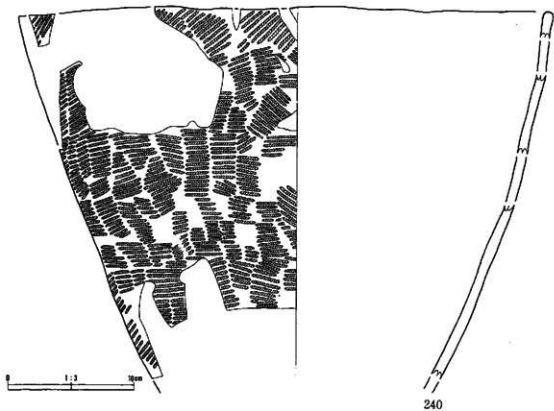
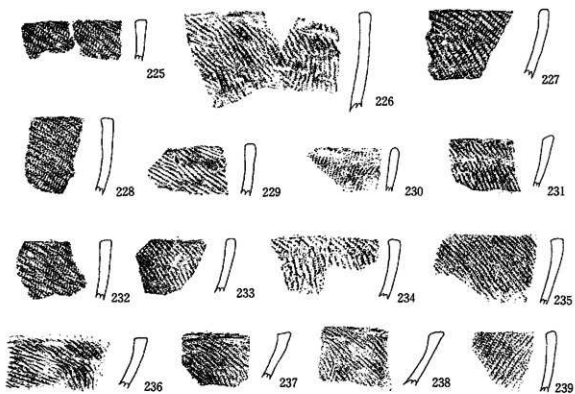
第44图 遺構外出土土器(3)



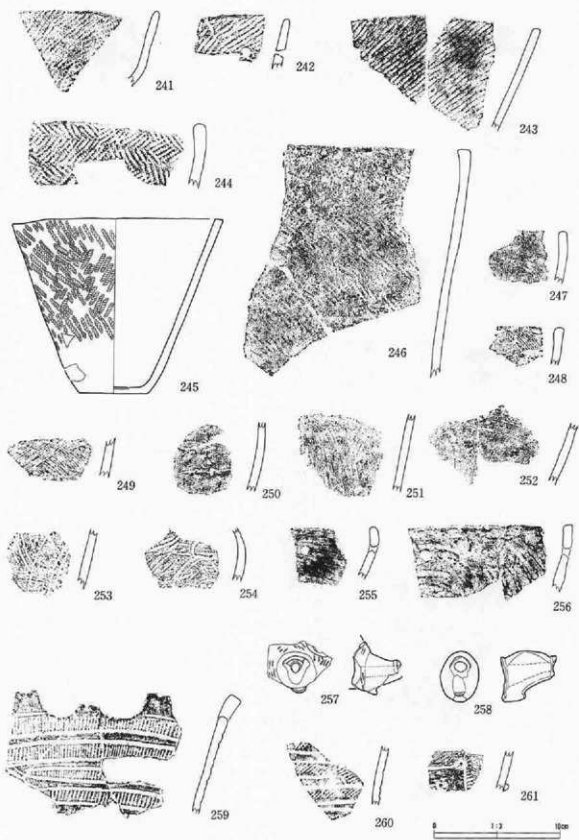
第45図 遺構外出土土器(4)



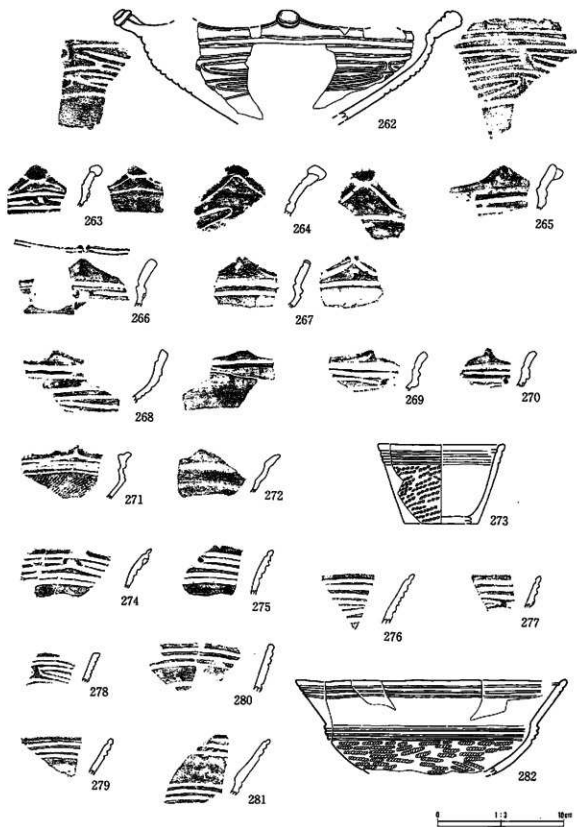
第46図 遺構外出土土器(5)



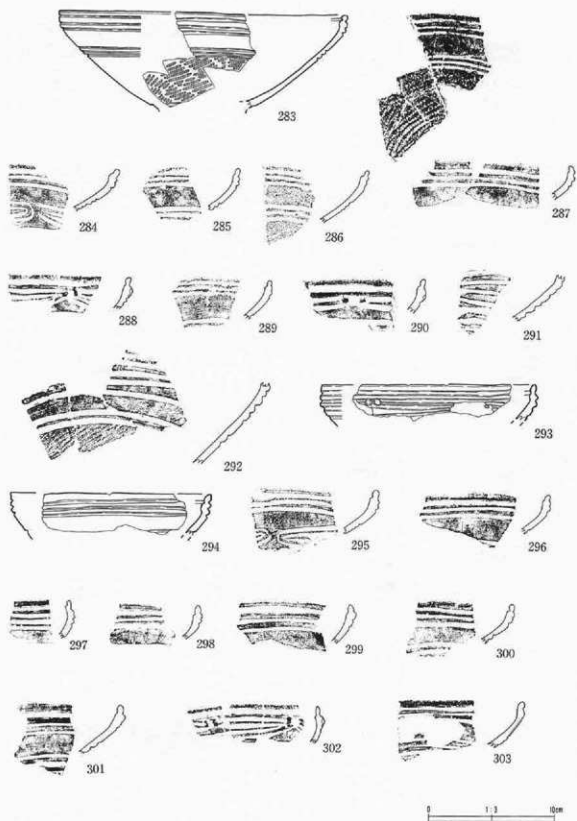
第47图 遺構外出土器(6)



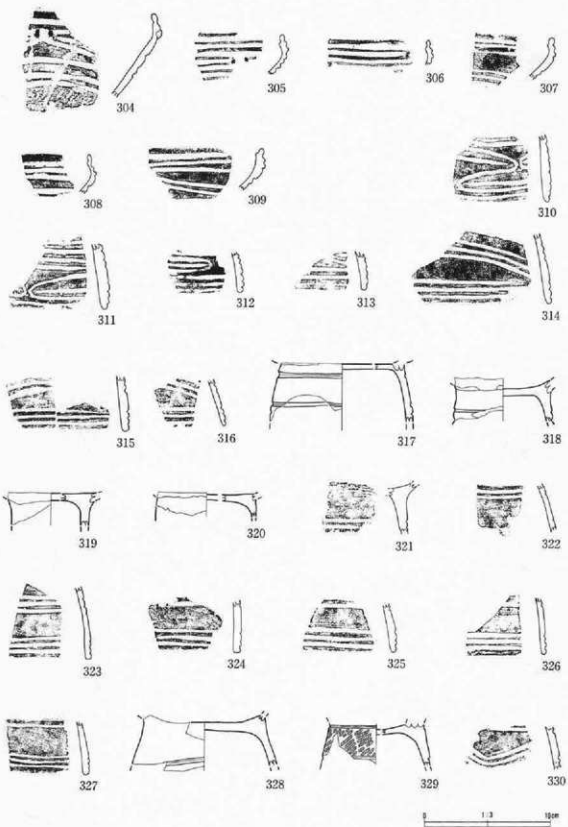
第48図 遺構外出土土器(7)



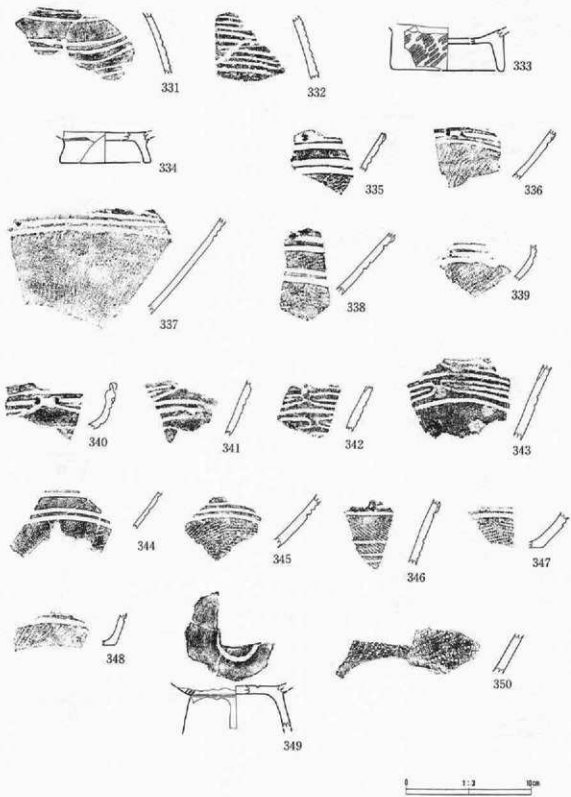
第49图 遺構外出土土器(8)



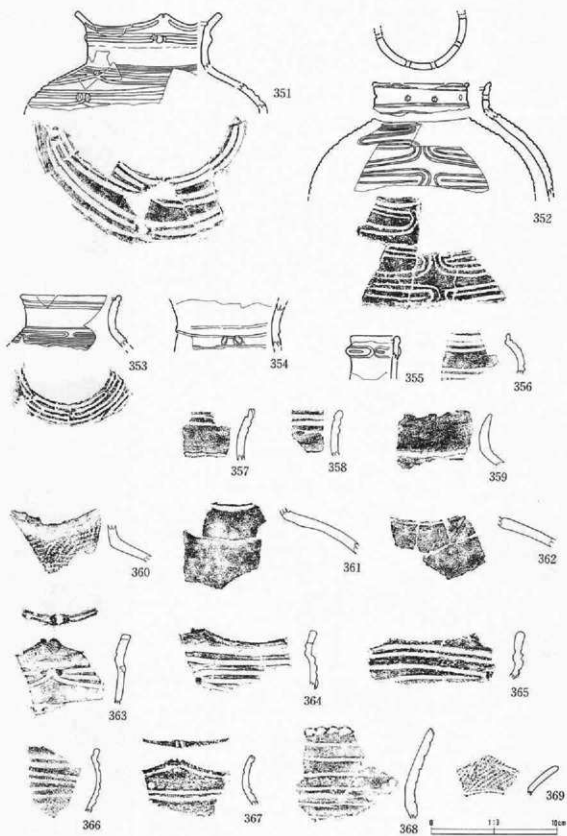
第50図 遺構外出土土器(9)



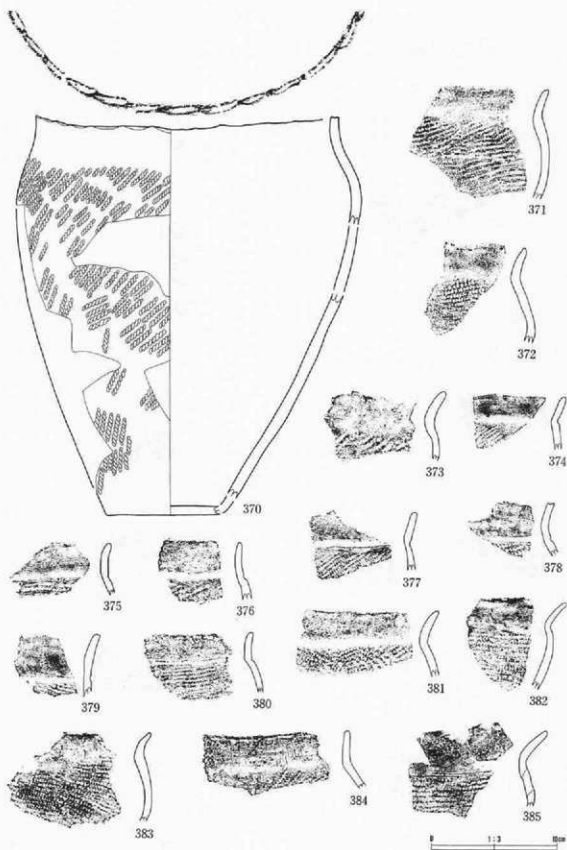
第51図 遺構外出土土器(10)



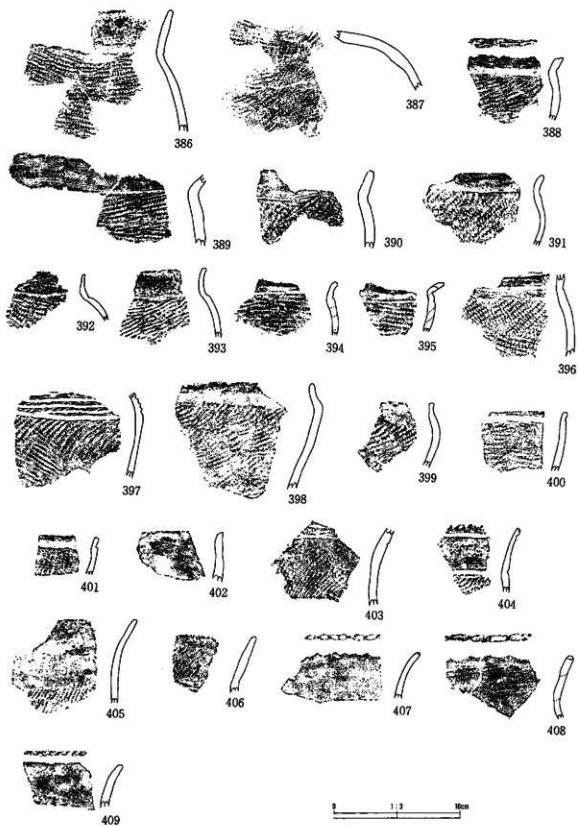
第52図 遺構外出土土器(11)



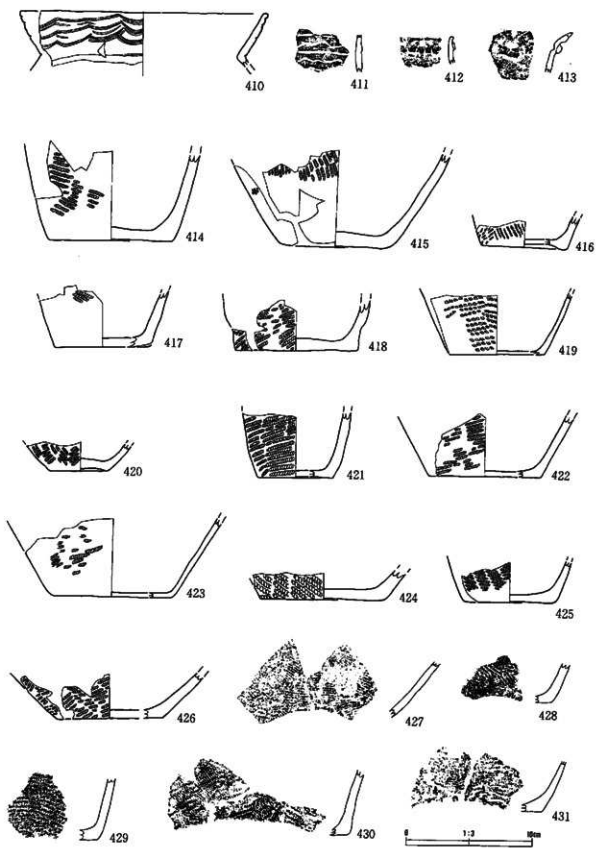
第53圖 遺構外出土土器(12)



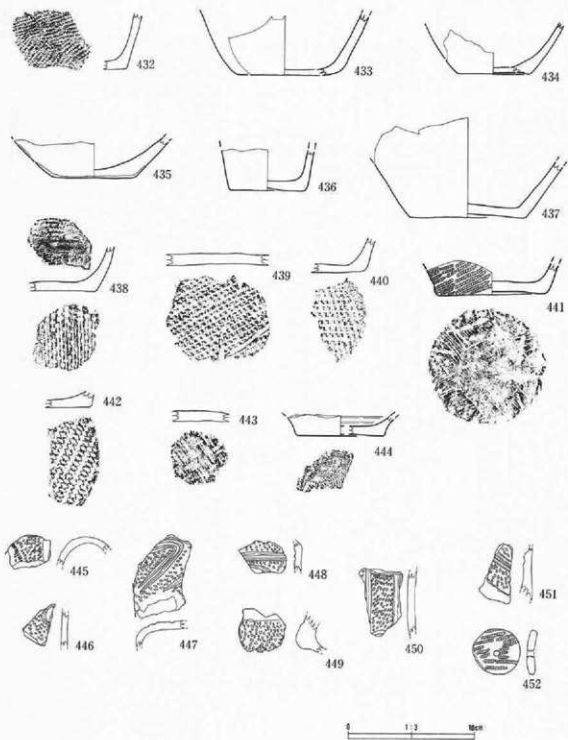
第54図 遺構外出土土器(1)



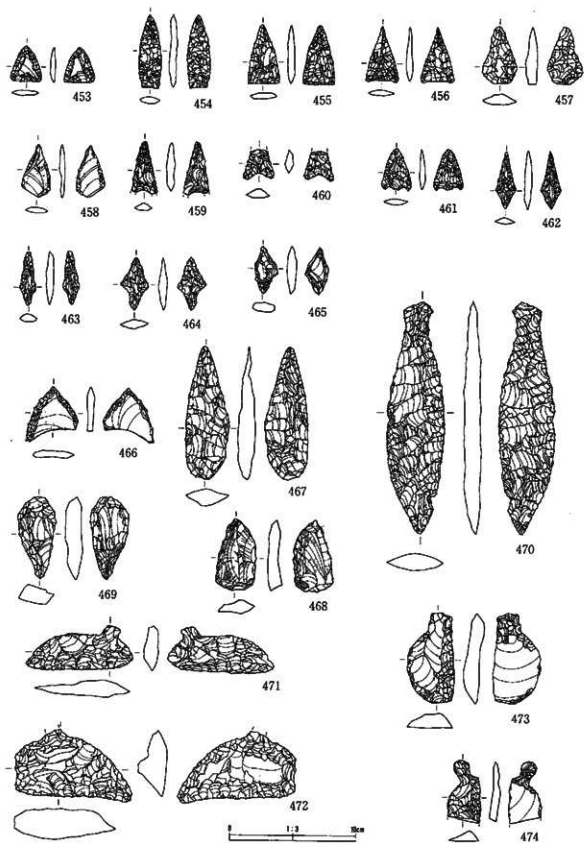
第55圖 遺構外出土土器(14)



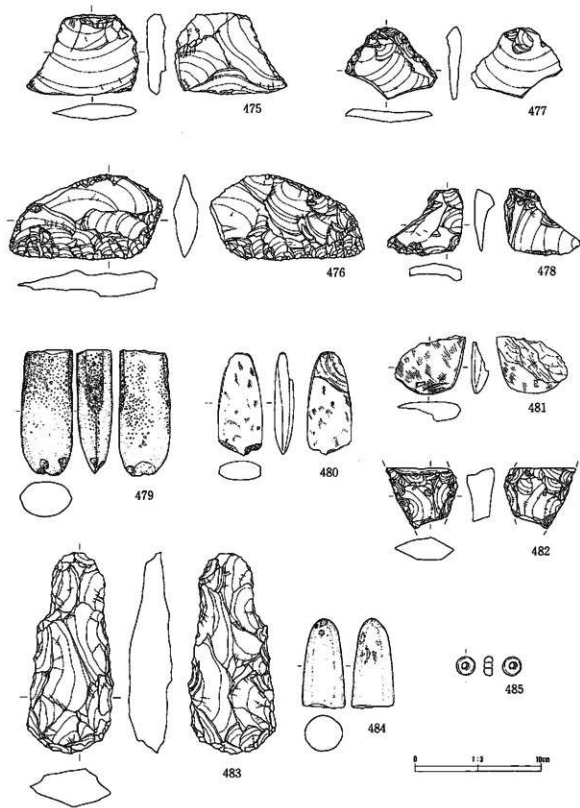
第56圖 遺構外出土土器(15)



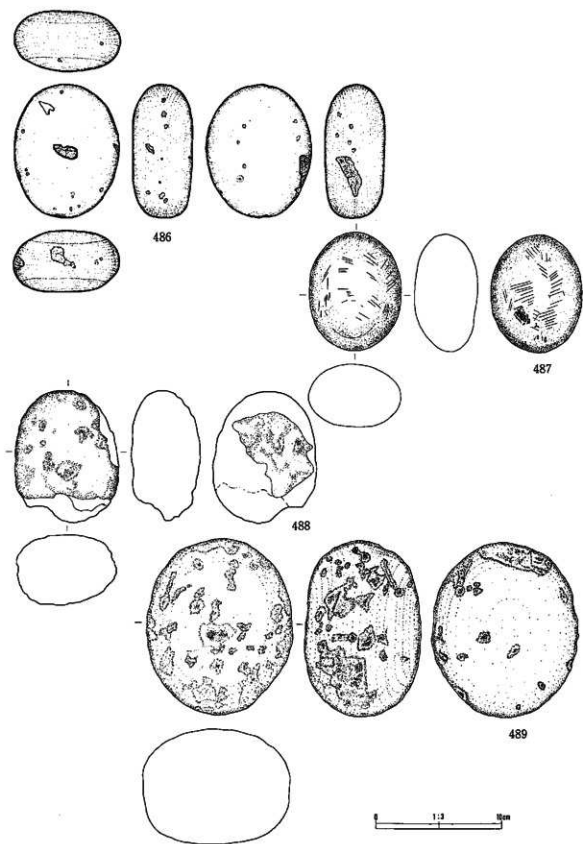
第57圖 遺構外出土土器(16)・土製品



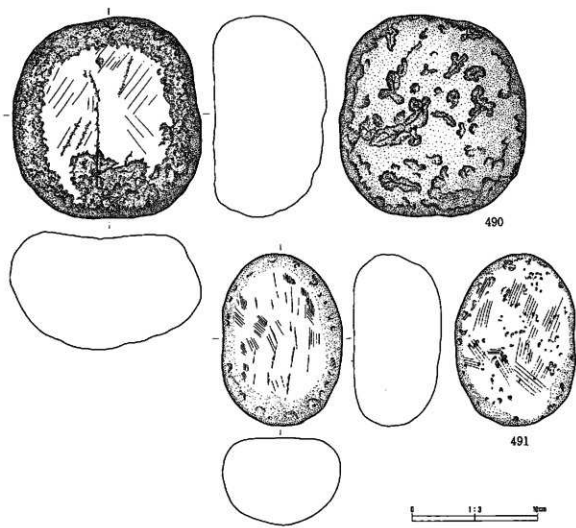
第58圖 遺構外出土石器(1)



第59図 遺構外出土石器(2)



第60圖 遺構外出土石器(3)



第61圖 遺構外出土石器(4)

観察表

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	趣願	533
1	RA01床面	深鉢	口縁～体部下半	内面体部下半に炭化物付着	IV 7 e	33図	図37
2	RA01床面	深鉢	底部	やや上げ気味	IV 7 e	33図	図37
3	RA01覆瓦部	深鉢	口縁部	口縁裏にもナゲが巡る	IV 7 e	33図	図37
4	RA01床面	深鉢	口縁部	外面に煤付着	IV 7 b	33図	図37
5	RA01埋土最下部	深鉢	体部	外面に煤付着	IV 7 b	33図	図37
6	RA01埋土最下部	深鉢	体部	R L縄文施文後、ハケ目		33図	図37
7	RA01埋土最下部	深鉢	体部	R L縄文		33図	図37
8	RA01埋土上部	深鉢	体部	7と同一個体		33図	図37
9	RA01埋土	深鉢	体部	L R・R L縄文の交互施文、沈線間にはミガキ	IV 7 e	33図	図37
10	RA01埋土最下部	石鏡	完形	基部にアスファルト、長さ2.0、幅1.3、厚さ0.3、重量0.47、安山岩・北上山地	I B 3 a	33図	図37
11	RA02床面	深鉢	口縁～体部	R L縄文、炭化物付着	IV 7 a	33図	図37
12	RA02床面	注口	口縁～体部	割れ口は疑似口縁状を呈す	IV 4 c	34図	図37
13	RA02埋土	注口	注口部	外面にミガキ	IV 8	34図	図37
14	RA02埋土下部	台付浅鉢	完形	内外面にミガキ	IV 8	34図	図37
15	RA02床面	深鉢	口縁部	L R縄文	IV 7 d	34図	図38
16	RA02埋土	深鉢	口縁部	R L交互施文	IV 7 e	34図	図38
17	RA02床面	深鉢	口縁部		IV 7 e	34図	図38
18	RA02床面	深鉢	体部	磨消縄文（地文はR L縦位羽状縄文）	IV 7 e	34図	図38
19	RA02埋土	深鉢	口縁部		IV 7 c	34図	図38
20	RA02埋土	深鉢	口縁部	口縁部に煤付着、R L斜縄文	IV 7 a	34図	図38
21	RA02埋土	深鉢	口縁部	R L縦位羽状縄文	IV 7 e	34図	図38
22	RA02床面	深鉢	体部			34図	図38
23	RA03床面	深鉢	口縁部	内面は黒色処理、外面には赤彩痕	IV 4 a	34図	図38
24	RA03床面	深鉢	口縁部	外面にミガキ	IV 4 a	34図	図38
25	RA03床面	深鉢	体部	磨消縄文（地文はR L縦位羽状縄文）	IV 3 a	34図	図38
26	RA03床面	深鉢	体部	25と同一個体か？	IV 3 c	34図	図38
27	RA04埋土上部	甕	体部	完形縄文か？	IV 3 c	34図	図38
28	RA04床面	敲石	完形	上部先端に敲打痕、長さ11.4、幅8.8、厚さ6.3、重量97.60、安山岩・北上山地	IX	34図	図38
29	RA05床面	深鉢	口縁～体部上半	クラク文的磨消縄文	IV 3 a	34図	図38
30	RA05西半埋土	深鉢	口縁部	L R縄文	IV 7 d	34図	図38
31	RA05埋土	深鉢	口縁部	外面のみ煤付着、R L斜縄文	IV 7 b	34図	図38
32	RA05床面	深鉢	体部	L R斜縄文上に純行沈線	IV 1	35図	図38
33	RA05埋土	深鉢	頸部	ミガキを加える	IV 4	35図	図38
34	RA05埋土	深鉢？	体部	原体磨滅して不明	IV 1 a	35図	図38
35	RA05埋土	甕	体部上半			35図	図38
36	RA06西半埋土	浅鉢	口縁～体部下半	体部にミガキ	VI 1 d	35図	図38
37	RA06床面	甕	口縁～体部下半	L R縦位縄文	VI 4 a b	35図	図38
38	RA06床面	甕	体～底部	内外面に多くの炭化物付着	VI 4	35図	図38
39	RA06埋土下部	高坏	体部			35図	図38
40	RA06埋土	甕	頸部～体部	頸部にミガキ、360と同一個体	VI 2	35図	図38
41	RA06北半埋土	甕	体部	頸部L R斜縄文、体部L R横位縄文		35図	図38
42	RA06西半埋土	甕	口縁部	R L縄文		35図	図38
43	RA06埋土	尖頭器	完形	長さ4.2、幅2.9、厚さ1.1、重量13.63、細粒流紋岩質凝灰岩・北上山地	E A 3 b	35図	図39
44	RA06床面	石匙	完形	白い石質部分に穿孔、長さ2.7、幅5.6、厚さ0.8、重量19.12、チャート・北上山地	V B 1	35図	図39
45	RA06床面	磨石	完形	赤彩痕、長さ11.0、幅7.5、厚さ4.5、重量539.0、安山岩・北上山地	IX	35図	図39
46	RA07床面	甕	完形	体部にケズリの痕	VI 4 A	36図	図39
47	RA07埋土	甕	口縁～体部上半	瘤ナゲが加えられ扁平・4單位	VI 2	36図	図39
48	RA07埋土	甕	口縁部	口縁部に炭化物が若干付着	VI 2	36図	図39

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	起出	時期
49	18E・II層	壺	完形	赤色顔料を頸部付近まで内蔵	VI 2	36図	図39
50	RA07埋土	甕	体部上半	頸部部分に炭化物付着、249と同一個体		36図	図39
51	RA07床面	壺	体部	内面にわずかに煤付着		36図	図39
52	RA07埋土下部	台付洗鉢	脚部		VI 1 C c	36図	図39
53	RA07埋土	磨石	完形	長さ6.7.幅3.6.厚さ2.5.重量95.50.緑色凝灰岩	IX	36図	図39
54	RA07埋土	磨石	完形	長さ7.1.幅6.6.厚さ3.7.重量257.98.緑色凝灰岩・北上山地	IX	36図	図39
55	RA08床面	高坏	口縁部	口唇部にも一条の沈線	VI 1 A	36図	図39
56	RA08埋土	高坏	口縁部	外面に煤付着、壺が肥大	VI 1 A	36図	図39
57	RA08北半埋土	洗鉢	口縁部	暗褐色系の色漬	VI 1 B a	36図	図39
58	RA08北半埋土	高坏	体部	体部下半にLR斜縄文		36図	図39
59	RA08床面	高坏	体部	体部下半には縄文施文		36図	図39
60	RA08埋土下部	甕	体部	体部下半にLR斜縄文		36図	図39
61	RA08床面	高坏	脚部		VI 1 C b	36図	図39
62	RA08北半埋土	高坏	脚部	先端の尖ったT.具で施文	VI 1 C c	36図	図39
63	RA08埋土	洗鉢	体部～底部	内外面丁寧なミガキ	VI 1	37図	図40
64	RA08埋土	洗鉢	底部	内面にミガキ	VI 1	37図	図40
65	RA08埋土	壺	底部	やや上げ気味	III a	37図	図40
66	RA08床面	壺	体部上半	外面にミガキ	VI 2	37図	図40
67	RA08埋土	甕	口縁～体部	内外面に多くの炭化物付着	VI 4 A c	37図	図40
68	RA08床面	甕	口縁～体部下半	口唇部に指頭押圧	VI 4 A b	37図	図40
69	RA08床面	甕	口縁部	指頭押圧口縁、外面に煤付着	VI 4 A b	37図	図40
70	RA08埋土下部	甕	口縁部	口縁部にナデ目、LR横位縄文	VI 4 A b	37図	図40
71	RA08床面	甕	頸部	頸部にナデ目、外面に煤付着		37図	図40
72	RA08埋土下部	甕	体部	LR横位縄文		37図	図40
73	RA08埋土下部	甕	底部	底面に煤付着	III a	37図	図40
74	RA08埋土下部	甕	体部～底部	外面に煤付着	III a	37図	図40
75	RA08埋土	甕	体部～底部		III a	37図	図40
76	RA08床面	甕	底部	網代板	III c	37図	図40
77	RA08埋土下部	石匙	完形	柄み部にアスファルト、長さ2.2.幅3.3.厚さ0.5.重量4.18.細粒流紋岩質凝灰岩・北上山地	VI B 1	37図	図40
78	RA09埋土上部	洗鉢	口縁～体部上半	流水文状変形工字文が展開	VI 1 A c	38図	図40
79	RA09埋土	洗鉢	口縁部	沈線下にLR斜縄文	IV 4 B	38図	図40
80	RA09埋土上部	洗鉢	口縁部			38図	図40
81	RA09埋土下部	洗鉢	体部		IV 1 B b	38図	図40
82	RA09床面	甕	口縁部	口唇部に指頭圧痕、器表面に炭化物付着	VI 4 A	38図	図40
83	RA09埋土上部	甕	体部			38図	図40
84	RA09埋土上部	甕	体部			38図	図40
85	RA09埋土上部	甕?	体部			38図	図40
86	RA10床面	高坏	坏部下半～脚部	脚部に一段の装工文、赤色顔料付着・3単位か?	VI 1 C b	38図	図41
87	RA10埋土上部	洗鉢	体部上半～底部	体部下半にRL垂糸縄文、3単位	VI 1	38図	図41
88	RA10床面	甕	完形	頸部に沈線、内外面に炭化物付着	VI 4 B b	38図	図40
89	RA10床面	甕	口縁部	口縁にU字形の断面の沈線2本	VI 2	39図	図41
90	RA10埋土上部	甕	口縁部	口縁にV字形の断面の沈線2本	VI 2	39図	図41
91	RA10埋土上部	甕	口縁部	LR横位縄文	VI 4 B a	39図	図41
92	RA10埋土上部	甕	口縁部	LR横位縄文	VI 4 B a	39図	図41
93	RA10埋土上部	甕	口縁部	LR横位縄文	VI 4 B a	39図	図41
94	RA10埋土上部	甕	体部上半		VI 4 B a	39図	図41
95	RA10床面	甕	体部上半	LR横位縄文	VI 4 A a	39図	図41
96	RA10埋土上部	甕	体部上半	磨減が著しい		39図	図41
97	RA10埋土上部	甕	口縁部	口唇部に指頭圧痕	VI 4 B b	39図	図41
98	RA10埋土	甕?	底部	底面に木炭痕	III a	39図	図41

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	図録	写真
99	RA11 埋土	高坏?	口縁部	2対の波状口縁か?	VI A c	39図	図41
100	RA11 埋土	浅鉢	口縁部		VI B b	39図	図41
101	RA11 埋土	浅鉢	口縁部		VI B a	39図	図41
102	RA11 埋土	浅鉢	口縁部		VI B b	39図	図41
103	RA11 埋土	浅鉢	口縁部		VI B b	39図	図41
104	RA11 埋土下部	浅鉢	口縁部		VI B a	39図	図41
105	RA11 埋土	浅鉢?	体部			39図	図41
106	RA11 床面	壺	口縁部		VI 2	39図	図41
107	RA11 床面	壺	口縁部		VI 2	39図	図41
108	RA11 埋土	浅鉢	完形	体部にRL斜縄文、やや上げ底気味	VI B b	39図	図41
109	RA11 埋土下部	壺	体部上半	外面強いミガキ	VI 2	39図	図41
110	RA11 埋土	壺?	体部下半-底部	109と同一個体か?		39図	図41
111	RA11 埋土	壺	体部上半	112と同一個体か?	VI 4	40図	図41
112	RA11 埋土	壺	体部上半	外面に窯が広く付着	VI 4	40図	図42
113	RA11 埋土	壺	体部下半-底部	112と同一個体	VI 4	40図	図42
114	RA11 埋土	壺	体部			40図	図42
115	RA11 埋土下部	壺?	体部上半			40図	図42
116	RA11 埋土上部	壺	体部下半-底部		VI a	40図	図42
117	RA11 埋土下部	壺	底部		VI a	40図	図42
118	RA11 埋土	尖頭器	完形	長さ3.9.幅1.3.厚さ0.9.重量4.35.赤褐色粘板岩・北上山地	IA 4 a	40図	図42
119	RD03 埋土	深鉢	体部	内外面に炭化物付着		40図	図42
120	RD07 埋土	浅鉢	口縁部	平行沈線文系	IV 1	40図	図42
121	RD11 埋土	深鉢	口縁部	口縁外側に大きく開く	IV 5	40図	図42
122	RD17 埋土2層	壺	口縁-体部上半	口縁に炭化物付着	VI 4 A a	40図	図42
123	RD18 埋土	壺	口縁-体部上半	頸部に1条の沈線	VI B b	41図	図42
124	RD33 埋土	浅鉢	口縁部		VI B a	41図	図42
125	RD37 埋土下部	石鏡	完形	先端わずかに欠損、長さ1.7.幅1.7.厚さ0.25.重量0.84.凝灰質粘板岩・北上山地	IA 1 b	41図	図42
126	RD36 埋土上部	深鉢	体部			41図	図42
127	RD36 埋土上部	深鉢	体部			41図	図42
128	RD36 床面	深鉢	体部	磨減著しい		41図	図42
129	RD36 埋土下部	深鉢	体部			41図	図42
130	RD36 床面	深鉢	体部			41図	図42
131	RE01 床面	深鉢	口縁部		IV 7 a	41図	図42
132	RE03 埋土上部	磨製石斧	欠損	長さ8.4.幅4.4.厚さ3.1.重量191.22.凝灰質砂岩・北上山地	VI A	41図	図42
133	RF02 埋土上部	深鉢?	体部	表面縄文	II 5	41図	図42
134	RF03 埋土	石鏡	基部欠損	長さ2.7.幅1.4.厚さ0.35.重量1.23.チャート・北上山地	IA 2 a	41図	図42
135	RH04 埋土上部	深鉢	体部上半	137と同一個体	I	41図	図42
136	RH04 埋土上部	深鉢	体部		I	41図	図42
137	RH04 埋土上部	深鉢	体部上半	刺突列が展開	I	41図	図42
138	170-V層	深鉢	口縁部	貝殻沈線文	I	42図	図43
139	170-V層	深鉢?	体部	沈線による施文	I	42図	図43
140	18N-V層	深鉢?	体部	143と同一個体か?	I	42図	図43
141	18N-V層	深鉢?	体部	143と同一個体か?	I	42図	図43
142	18N-V層	深鉢	体部下半	磨減著しい	I	42図	図43
143	18N-V層	深鉢	底部	乳頭状尖底土器	I	42図	図43
144	13M-V層	深鉢	体部上半	145と同一個体	II 1	42図	図43
145	14M-II層	深鉢	体部上半	ループ文の圧痕と刺突による施文	II 1	42図	図43
146	18L-V層	深鉢	口縁部	縄線文が横位に展開	II 2	42図	図43

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	登録順	図順
147	18L・V層面	深鉢	口縁部	146と同一個体	Ⅱ 2	42図	図43
148	19P・V層面	深鉢	口縁部	口唇部に縄の結束部の圧痕	Ⅱ 2	42図	図43
149	19P・VI層	深鉢	体部		Ⅱ 2	42図	図43
150	18N付近・V層面	深鉢	口縁部	縁端汎入	Ⅱ 3	42図	図43
151	19P・VI層	深鉢	口縁部	口唇部に指頭状の圧痕	Ⅱ 3	42図	図43
152	19O・IV層	深鉢	口縁部	口唇部に指頭状の圧痕	Ⅱ 3	42図	図43
153	19P・VI層	深鉢	口縁部	R L L L 縄文	Ⅱ 3	42図	図43
154	20P・V層面	深鉢?	体部	R L L L 縄文	Ⅱ 3	42図	図43
155	20P・V層面	深鉢?	体部	R L L L 縄文	Ⅱ 3	42図	図43
156	20P・V層面	深鉢?	体部	R L L L 縄文	Ⅱ 3	42図	図43
157	15E・II層	深鉢	口縁部	口唇部に縄文施文、体部に結束羽状縄文	Ⅱ 4	42図	図43
158	18N付近・V層面	深鉢	体部	同上、結束羽状縄文、口唇に結束圧痕	Ⅱ 4	42図	図43
159	18O・V層面	深鉢?	体部	結束羽状縄文、磨滅著しい	Ⅱ 4	42図	図43
160	19N付近・V層面	深鉢	体部	羽状縄文	Ⅱ 4	42図	図43
161	16M・V層面	深鉢?	体部	羽状縄文	Ⅱ 4	42図	図43
162	15O付近・V層	深鉢	体部	非結束羽状縄文	Ⅱ 4	42図	図43
163	18K・V層	深鉢?	体部	表裏縄文	Ⅱ 5	43図	図43
164	18K・V層	深鉢?	体部	表裏縄文	Ⅱ 5	43図	図43
165	18K・V層	深鉢?	体部	表裏縄文	Ⅱ 5	43図	図43
166	9D・V層面	深鉢	口縁部	大木8b式	Ⅲ	43図	図43
167	9D・V層面	深鉢	口縁部	166と同一個体	Ⅲ	43図	図43
168	9D・V層面	深鉢	体部上半	166と同一個体	Ⅲ	43図	図43
169	9D・V層面	深鉢	体部上半	166と同一個体	Ⅲ	43図	図43
170	9D・V層面	深鉢	体部上半	166と同一個体	Ⅲ	43図	図43
171	9D・V層面	深鉢	体部上半	166と同一個体、内面に炭化物付着	Ⅲ	43図	図43
172	11M・II層	深鉢	口縁部	平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
173	17H・II層下部	深鉢	体部上半	平行沈線文(蛇行沈線)	Ⅳ 1	43図	図44
174	16D・IV層	深鉢	体部上半	平行沈線文(弧線反転)、内面黒色処理	Ⅳ 1	43図	図44
175	12M・II層	深鉢	体部上半	平行沈線文(弧線反転)	Ⅳ 1	43図	図44
176	15L・攪乱部	深鉢?	体部	平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
177	16H・III層	深鉢	体部	平行沈線文(弧線反転)	Ⅳ 1	43図	図44
178	不明・表探	台付浅鉢	底部	体部に平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
179	13M・III層	?	体部	平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
180	11M・II層	?	体部	平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
181	17D・II層	深鉢?	体部	平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
182	17E・不明	深鉢?	体部	平行沈線文	Ⅳ 1	43図	図44
183	16I・IV層	香炉型土器	体一底部	鈔手部分は欠損、4単位の文様	Ⅳ 2	43図	図44
184	15M・攪乱部	?	口縁部	割み下に斜線文が展開	Ⅳ 2	43図	図44
185	11M・II層	浅鉢?	体部	平行沈線間に斜線文	Ⅳ 2	43図	図44
186	17E付近・I層	深鉢	口縁部		Ⅳ 3 a	44図	図44
187	16I・II層	壺	口縁一体部上半	口縁に不整な羽状縄文	Ⅳ 3 a	44図	図44
188	16I・II層	深鉢	体部	192と同一個体か?	Ⅳ 3 a	44図	図44
189	17E・II層	壺?	体部	内面に深付帯、磨消部一段低い	Ⅳ 3 b	44図	図44
190	11M・II層	壺	体部	クラク文系?、縦位羽状縄文施文	Ⅳ 3 a	44図	図44
191	15J・III層	深鉢	口縁部	磨消縄文	Ⅳ 3 a	44図	図44
192	16I・II層	深鉢	体部	188と同一個体か?	Ⅳ 3 a	44図	図44
193	17H・II層	深鉢	体部	R L 斜縄文	Ⅳ 3 a	44図	図44
194	17H・II層	壺?	体部	円文(ループ状)部を磨消	Ⅳ 3 b	44図	図44
195	17E・II層	壺?	体部	磨消部一段低い	Ⅳ 3 b	44図	図44
196	11H・II層内褐色土	壺	体部上半	冑状の突起部に二段の割み目	Ⅳ 3 b	44図	図44
197	16I・II層	深鉢	体部	磨消部一段低い	Ⅳ 3 b	44図	図44
198	12L・II層	深鉢	口縁~体部上半	施文にL R 斜縄文	Ⅳ 3 c	44図	図44

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	図版	図44
199	1 2 J・Ⅱ層	盃?	体部	地文に羽状縄文	IV 3 c	44図	図44
200	1 2 N・Ⅱ層	盃?	体部	入組文状	IV 3 c	44図	図44
201	1 7 H・Ⅲ層	深鉢	口縁部	花卉状に開く波状口縁	IV 4 a	45図	図44
202	1 2 L・Ⅱ層	深鉢	口縁部	花卉状に開く波状口縁	IV 4 b	45図	図44
203	1 1 M・Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁部に磨消縄文	IV 4 b	45図	図45
204	1 4 L・Ⅱ層	深鉢	口縁部	口縁外面に R L 縄文施文	IV 4 b	45図	図45
205	1 4 K・Ⅲ層	注口	口縁一体部上半	波頂部には浅い刺突・4 単位	IV 4 b	45図	図45
206	不明・表採	深鉢	口縁部	花卉状に開く波状口縁	IV 4 c	45図	図45
207	1 6 J・Ⅱ層	深鉢	口縁部	花卉状に開く波状口縁	IV 4 c	45図	図45
208	1 2 L・Ⅲ層	深鉢	口縁部	花卉状に開く波状口縁	IV 4 c	45図	図45
209	1 6 I・Ⅱ層	注口?	口縁部	内外面にミガキ	IV 4 d	45図	図45
210	1 6 I・Ⅲ層	盃?	口縁部	内外面にミガキ	IV 4 e	45図	図45
211	不明・表採	盃?	口縁部	内外面にミガキ	IV 4 e	45図	図45
212	1 1 H・Ⅱ層内褐色土	盃?	口縁部	内外面にミガキ	IV 4 e	45図	図45
213	1 7 H・Ⅲ層	深鉢	体部上半	磨消縄文	IV 4	45図	図45
214	1 7 H・Ⅲ層	深鉢	体部上半	213と同一個体か?	IV 4	45図	図45
215	1 6 I・Ⅲ層	深鉢	体部上半		IV 4	45図	図45
216	1 4 H・攪乱部	盃	体部上半		IV 4	45図	図45
217	1 7 H・Ⅱ層下部	深鉢	口縁一体部上半	頸部に磨消帯、口縁 4 単位か?	IV 5	45図	図45
218	1 7 J・攪乱部	深鉢	口縁部	波状口縁端部に縄文施文	IV 5	45図	図45
219	1 7 L・攪乱部	鉢?	口縁部	波状口縁部に帯状の磨消帯	IV 5	45図	図45
220	1 7 H・Ⅲ層	深鉢	口縁部	217と同一個体か?	IV 5	46図	図45
221	1 7 L・Ⅱ層	深鉢	口縁部	121と同一個体か?	IV 5	46図	図45
222	不明・表採	深鉢	口縁部	121と同一個体か?	IV 5	46図	図45
223	1 5 H・Ⅲ層	深鉢	口縁部	反時計回転のひねりを持つ	IV 5	46図	図45
224	1 7 I 西平・Ⅱ層	注口	体部上半～下半	外面に黒色研磨	IV 6	46図	図45
225	1 7 E 付近・Ⅰ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 a	47図	図46
226	1 5 I・Ⅲ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 a	47図	図46
227	1 7 K・Ⅰ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 a	47図	図46
228	1 7 E 付近・Ⅰ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
229	1 1 L・Ⅱ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
230	1 2 I・Ⅲ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
231	1 1 H・Ⅱ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
232	1 6 G・Ⅱ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
233	1 6 E・Ⅳ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
234	1 1 L・Ⅲ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 b	47図	図46
235	1 3 N・Ⅱ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 c	47図	図46
236	1 5 K・Ⅲ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文・内面に炭化物付着	IV 7 c	47図	図46
237	1 3 N・Ⅱ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 c	47図	図46
238	1 3 N・Ⅳ層	浅鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 c	47図	図46
239	1 4 K・Ⅲ層	深鉢	口縁部	R L 斜縄文	IV 7 c	47図	図46
240	1 3 I・Ⅲ層	深鉢	口縁一体部	L R 斜縄文・口縁と内面体部下半に炭化物付着	IV 7 d	47図	図46
241	1 7 H・Ⅱ層下部	浅鉢	口縁部	L R 斜縄文	IV 7 d	48図	図46
242	1 5 J・Ⅲ層	深鉢	口縁部	L R 斜縄文・外から内へ穿孔	IV 7 d	48図	図46
243	1 5 J・Ⅲ層	深鉢	口縁部	L R 斜縄文	IV 7 d	48図	図46
244	1 5 I・Ⅳ層	深鉢	口縁部	横位羽状縄文	IV 7 e	48図	図46
245	1 7 H・Ⅱ層	深鉢	宍形	横位羽状縄文?・内面に炭化物付着	IV 7 e	48図	図46
246	1 7 H・Ⅲ層	深鉢	口縁部	横位羽状縄文・口縁部に炭化物付着	IV 7 e	48図	図46
247	1 4 M・Ⅱ層内褐色土	深鉢	口縁部	櫛歯文	IV 7 f	48図	図46
248	1 8 N 付近・Ⅰ層	深鉢	口縁部	櫛歯文	IV 7 f	48図	図46
249	1 8 N 付近・Ⅰ層	深鉢	体部	櫛歯文	IV 7 f	48図	図46
250	1 5 M・Ⅱ層	深鉢	体部	櫛歯文	IV 7 f	48図	図46

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	図録	図版
251	14M・Ⅱ層内母埴土	深鉢	体部	247と同一個体か?	IV7f	48図	図46
252	15N・Ⅱ層	深鉢	体部下半	磨擦文	IV7f	48図	図46
253	11H・Ⅱ層内母埴土	深鉢?	体部	表面に粗い刷毛目	IV7f	48図	図47
254	18O・V層	甗?	体部上半	表面に粗い刷毛目	IV7f	48図	図47
255	17E・不明	深鉢	口縁部	両面から穿孔(燒成後)	IV7g	48図	図47
256	16I・Ⅱ層	深鉢	口縁部	有孔は内外両面から穿孔	IV7g	48図	図47
257	14H・V層	注口	注口部		IV8	48図	図47
258	19L・Ⅱ層上部	注口	注口部		IV8	48図	図47
259	21Q・Ⅱ層	深鉢	口縁部		V	48図	図47
260	17K・Ⅰ層	深鉢?	体部		V	48図	図47
261	17M・Ⅱ層	?	体部	突起付き土器	V	48図	図47
262	18D・Ⅱ層	高坏	口縁~体部上半	体部下半は無文・4(8)単位	VI1A*	49図	図47
263	13L・Ⅱ層	高坏	口縁部	波状頂部にボタン状突起	VI1A*	49図	図47
264	14K・Ⅱ層	高坏	口縁部	波状頂部にボタン状突起	VI1A*	49図	図47
265	16H・Ⅱ層	高坏	口縁部	口縁部の瘤が肥大、外面に窪付着	VI1A*	49図	図47
266	17H・Ⅱ層	高坏	口縁部	瘤は扁平に整形、口唇部にも沈線	VI1A b	49図	図47
267	17E付近・Ⅰ層	高坏	口縁部	頂部に刻み	VI1A b	49図	図47
268	14K・Ⅱ層	高坏	口縁部	口唇部にも沈線	VI1A c	49図	図47
269	17H・Ⅱ層	浅鉢・高坏	口縁部	瘤の膨らみ顕著	VI1A c	49図	図47
270	16I・Ⅱ層	高坏	口縁部	瘤の膨らみ顕著	VI1A c	49図	図47
271	13L・Ⅱ層	浅鉢	口縁部	口唇部に沈線	VI1A d	49図	図47
272	16I・Ⅱ層	浅鉢	口縁部	波状口縁か?	VI1A d	49図	図47
273	18K・Ⅱ層	浅鉢	完形	平行沈線の刻みは浅め	VI1B a	49図	図47
274	13I・Ⅱ層	浅鉢	口縁部	太めの沈線施文	VI1B a	49図	図47
275	15E付近・Ⅰ層	浅鉢	口縁部	274と同一個体か?	VI1B a	49図	図47
276	14K・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B a	49図	図47
277	13K・Ⅱ層	浅鉢	口縁部	瘤は扁平になでられる	VI1B a	49図	図47
278	14J・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B a	49図	図47
279	23R付近・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B a	49図	図47
280	17J・Ⅱ層	浅鉢	口縁部	瘤の膨らみ顕著	VI1B a	49図	図47
281	14L・Ⅰ層	浅鉢	口縁部	丸底の浅鉢か?	VI1B a	49図	図47
282	17J・Ⅱ層	高坏	口縁~体部	坏下半はLR横位縄文	VI1B a	49図	図47
283	23R・Ⅱ層	高坏	口縁部	LR斜縄文	VI1B b	50図	図48
284	17E・Ⅱ層	高坏	口縁部	内面のミガキが非常に丁寧	VI1B b	50図	図48
285	18E・Ⅱ層下部	浅鉢	口縁部		VI1B b	50図	図48
286	13I・Ⅱ層	浅鉢	口縁部	体部下半に縄文	VI1B b	50図	図48
287	13K・Ⅱ層	高坏	口縁部		VI1B b	50図	図48
288	14K・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B b	50図	図48
289	13L・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B b	50図	図48
290	不明・表探	浅鉢	口縁部	瘤の膨らみ顕著	VI1B b	50図	図48
291	16M・Ⅱ層	浅鉢	体部		VI1B b	50図	図48
292	11M・Ⅱ層	浅鉢	口縁~体部上半		VI1B b	50図	図48
293	17H・Ⅱ層下部	浅鉢・高坏	口縁部	瘤の膨らみ顕著・3(6)単位	VI1B c	50図	図48
294	13L・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B c	50図	図48
295	17E・Ⅱ層	高坏	口縁部		VI1B c	50図	図48
296	13I・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B c	50図	図48
297	17I・Ⅱ層	浅鉢・高坏	口縁部		VI1B c	50図	図48
298	13I・Ⅱ層	浅鉢	口縁部		VI1B c	50図	図48
299	13L・Ⅱ層	高坏	口縁部		VI1B c	50図	図48
300	13K・Ⅱ層	高坏	口縁部		VI1B c	50図	図48
301	13L・Ⅱ層	高坏	口縁部	内面に赤彩	VI1B c	50図	図48
302	15E付近・Ⅰ層	浅鉢	口縁部	瘤の貼り付け痕は明瞭・3(6)単位	VI1B c	50図	図48

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	数量
303	1 6 G・攪乱部	浅鉢	口縁部		VI 1 B c	50図 図48
304	1 1 K・II層	浅鉢	口縁部	沈線太く、貼り付け瘤も明瞭	VI 1 B d	51図 図48
305	1 8 E・II層	浅鉢	口縁部	小さな瘤だが貼り付け痕は明瞭	VI 1 B d	51図 図48
306	1 8 E・II層	浅鉢	口縁部	小さな瘤だが貼り付け痕は明瞭	VI 1 B d	51図 図48
307	1 7 E・II層	浅鉢	口縁部		VI 1 B d	51図 図48
308	1 7 F・II層内褐色土	浅鉢	口縁部		VI 1 B d	51図 図48
309	1 7 E・II層	浅鉢	口縁部		VI 1 B d	51図 図48
310	1 3 J・I層	高坏	脚部	流水文状変形工字文	VI 1 C a	51図 図48
311	1 3 K・II層	高坏	脚部	310と同一個体	VI 1 C a	51図 図48
312	1 7 F・II層	高坏	脚部	流水文状変形工字文	VI 1 C a	51図 図48
313	1 4 K・II層	高坏	脚部	流水文状変形工字文	VI 1 C a	51図 図48
314	1 7 E・II層	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図48
315	不明・表探	高坏	脚部	波状文を展開すると思われる	VI 1 C a	51図 図48
316	1 7 E・II層	高坏	脚部	波状文を展開すると思われる	VI 1 C a	51図 図48
317	1 7 E・II層	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図48
318	1 3 N・II層	高坏	脚部	坏下半部に縄文	VI 1 C a	51図 図48
319	1 2 N・II層	高坏	底部		VI 1 C a	51図 図49
320	2 2 Q・II層	高坏	体部下半～脚部		VI 1 C a	51図 図49
321	1 2 M・II層	高坏	脚部	坏部にLR縄文施文	VI 1 C a	51図 図49
322	1 9 M・II層内暗褐色土	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図49
323	1 3 M・II層	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図49
324	1 3 L・II層	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図49
325	1 7 E付近・II層	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図49
326	1 4 E・II層	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図49
327	1 5 H・攪乱部	高坏	脚部		VI 1 C a	51図 図49
328	1 3 K・II層	高坏	脚部		VI 1 C b	51図 図49
329	1 5 M・IV層	高坏	脚部	脚部にLR斜縄文	VI 1 C b	51図 図49
330	1 6 M・II層	高坏	脚部	波状文が展開、磨滅進む	VI 1 C b	51図 図49
331	1 7 E付近・II層	高坏	脚部	波状文展開	VI 1 C b	52図 図49
332	1 8 E・II層	高坏	脚部		VI 1 C b	52図 図49
333	1 5 M・I層	高坏	脚部	断面はサンドイッチ状に炭化	VI 1 C c	52図 図49
334	1 1 I・II層	台付浅鉢	脚部		VI 1 C c	52図 図49
335	1 7 F・II層	高坏	体部		VI 1 D a	52図 図49
336	1 3 L・II層	浅鉢	体部	体部下半にLR斜縄文	VI 1 D a	52図 図49
337	1 3 L・II層	高坏	体部上半	体部下半にLR縦位縄文	VI 1 D a	52図 図49
338	1 3 I・II層	浅鉢	体部上半	沈線間にも縄文施文・瘤の下にミガキの痕あり	VI 1 D a	52図 図49
339	1 6 E・II層	浅鉢	体部		VI 1 D a	52図 図49
340	1 8 E・II層	高坏	口縁部	瘤間の溝が特に深い	VI 1 D b	52図 図49
341	1 8 E・II層	浅鉢	体部	小さい貼り付け瘤	VI 1 D b	52図 図49
342	1 8 D・II層	浅鉢	体部上半		VI 1 D b	52図 図49
343	1 8 E・II層	浅鉢	体部	体部下半は無文	VI 1 D	52図 図49
344	1 8 E・II層	高坏	体部		VI 1 D	52図 図49
345	2 2 S・攪乱部	浅鉢	体部		VI 1 D	52図 図49
346	2 2 Q・II層	浅鉢	体部上半	大洞C 2期か?	VI 1 D	52図 図49
347	2 1 Q付近・I層	浅鉢	底部		VI 1 D	52図 図49
348	1 4 K・II層	浅鉢	底部	LR斜縄文	VI 1 D	52図 図49
349	1 7 I・II層	高坏	坏底部～脚部	坏底部に円文、体部には縄文施文の痕あり	VI 1 D	52図 図49
350	1 5 E付近・II層	高坏	体部	R斜縄文	VI 1 D	52図 図49
351	1 4 J・II層	壺	口縁～体部上半	4単位波状口縁	VI 2	53図 図50
352	1 7 H・II層	壺	体部	内面に指痕あり、4(8)単位	VI 2	53図 図50
353	1 8 K・II層	壺	口縁部	工字文施文	VI 2	53図 図50
354	1 4 K・II層	壺	口縁部	貼り付け瘤にはナデが加えられる	VI 2	53図 図50

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	種類	時期
355	不明・表採	壺	口縁部		VI 2	53図	図50
356	1 2 M・II層	壺(小型)	口縁部		VI 2	53図	図50
357	1 3 L・II層	壺	口縁部		VI 2	53図	図50
358	1 7 H・III層	壺	口縁部		VI 2	53図	図50
359	1 8 E・II層	壺	口縁部		VI 2	53図	図50
360	1 3 H・攪乱部	壺	体部上半	40と同一個体	VI 2	53図	図50
361	1 8 J・II層下部	壺	体部上半		VI 2	53図	図50
362	1 4 K・II層	壺	体部上半		VI 2	53図	図50
363	1 7 F・II層内褐色土	壺	口縁部	瘤の膨らみ顕著	VI 3	53図	図50
364	1 6 K・II層	壺	口縁部	口唇部にも沈線	VI 3	53図	図50
365	1 4 J・I層	壺	口縁部	瘤の膨らみ顕著	VI 3	53図	図50
366	1 9 K・I層	壺	口縁部		VI 3	53図	図50
367	1 9 K・I層	壺	口縁部	焼成後に外面から穿孔	VI 3	53図	図50
368	1 4 M・II層	壺	口縁部	外面に煤付着、大割C 2期	VI 3	53図	図50
369	2 1 Q付近・I層	壺	口縁部	内面炭化	VI 3	53図	図50
370	1 8 E・II層	壺	定形	内面体部下半に炭化物が若干付着	VI 4 A a	54図	図50
371	1 2 M・II層	壺	口縁部	体部上半に煤付着	VI 4 A a	54図	図50
372	1 3 I・II層	壺	口縁部		VI 4 A a	54図	図50
373	1 7 H・II層下部	壺	口縁部	頸部付近に煤付着、L R斜縄文	VI 4 A a	54図	図50
374	1 7 G・II層	壺	口縁部	口縁部外側にわずかに煤付着	VI 4 A b	54図	図50
375	2 2 R付近・I層	壺	口縁部		VI 4 A b	54図	図50
376	1 8 N付近・II層	壺	口縁部	口唇部に縄文の任意施文	VI 4 A b	54図	図50
377	1 5 E付近・I層	壺	口縁部		VI 4 A b	54図	図50
378	1 6 M・II層	壺	口縁部	口唇部指張圧痕	VI 4 A b	54図	図50
379	1 6 E・II層	深鉢	口縁部	口唇部指張圧痕	VI 4 A b	54図	図50
380	1 9 N付近・I層	壺	口縁部	頸部に細い糸線、磨減著しい	VI 4 A b	54図	図51
381	1 3 I・II層	壺	口縁部		VI 4 B a	54図	図51
382	1 3 J・II層	壺	口縁部	外側体部上半にかけて炭化物付着	VI 4 B a	54図	図51
383	1 2 M・II層	壺	口縁部		VI 4 B a	54図	図51
384	1 8 O・V層面	壺	口縁部		VI 4 B a	54図	図51
385	1 6 H・III層	壺	口縁部	口縁部外面のみに煤付着	VI 4 B b	54図	図51
386	1 2 M・II層	壺	口縁部		VI 4 B b	55図	図51
387	1 8 E・II層	壺	体部		VI 4 B b	55図	図51
388	1 6 J・II層	深鉢	口縁部	口唇部に線刻	VI 4 B b	55図	図51
389	1 4 L・II層	壺	体部上半		VI 4 B b	55図	図51
390	1 2 M・II層	壺	口縁部		VI 4 B b	55図	図51
391	1 9 N付近・I層	壺	口縁部		VI 4 B b	55図	図51
392	不明・表採	壺	口縁部		VI 4 B b	55図	図51
393	2 2 R付近・II層	壺	口縁部		VI 4 B b	55図	図51
394	1 3 L・II層	壺	口縁部	波状口縁か?	VI 4 B b	55図	図51
395	1 7 H・II層下部	小型壺	口縁部	外面に煤付着、L R横縄文	VI 4 B b	55図	図51
396	1 3 M・II層	壺	体部上半		VI 4 c	55図	図51
397	1 9 N・表採	壺	体部上半		VI 4 c	55図	図51
398	1 3 L・II層	壺	口縁部		VI 4 C a	55図	図51
399	1 2 L・II層	鉢	口縁部		VI 4 C a	55図	図51
400	1 3 J・I層	壺	口縁部		VI 4 C b	55図	図51
401	1 4 N・II層	小型壺	口縁部		VI 4 C b	55図	図51
402	1 5 E付近・I層	壺	口縁部		VI 4 C b	55図	図51
403	1 8 J・II層	深鉢	体部上半		VI 4 D b	55図	図51
404	1 7 E付近・I層	深鉢	口縁部	口唇部に刻み	VI 4 D b	55図	図51
405	1 4 K付近・I層	壺	口縁部	器表面に炭化物が厚く付着	VI 4 D a	55図	図51
406	1 5 M・攪乱部	壺	口縁部		VI 4	55図	図51

No	出土地点・層位	器種	部位	備考	分類	数量	写真
407	1 2 M・II層	甕	口縁部	口唇部に指頭圧痕、炭化物付着	VI 4	55図	図51
408	1 6 D・II層	甕	口縁部		VI 4	55図	図51
409	1 7 G・II層	甕	口縁部	口唇部に縄文施文	VI 4	55図	図51
410	1 9 L・II層	甕	口縁部	外面に炭化物付着	Ⅶ	56図	図52
411	1 8 I・II層	?	底部		Ⅶ	56図	図52
412	1 7 D・II層	?	口縁部	天王山式か?	Ⅶ	56図	図52
413	1 9 L・II層	甕	口縁部	内外面から刺突痕、天王山式か?	Ⅶ	56図	図52
414	1 6 H・II層	深鉢・甕	底部	網代痕のすりけし痕あり	Ⅶ a	56図	図52
415	1 5 K・III層	深鉢・甕	底部下半～底部		Ⅶ a	56図	図52
416	1 3 J・II層	深鉢・甕	底部	単筋斜縄文	Ⅶ a	56図	図52
417	1 3 K・II層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
418	1 3 K・II層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
419	1 9 K・I層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
420	1 4 L・II層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
421	1 8 H・II層	深鉢・甕	底部下半～底部		Ⅶ a	56図	図52
422	1 3 L・II層	深鉢・甕	底部下半～底部		Ⅶ a	56図	図52
423	1 9 N付近・I層	深鉢・甕	底部下半～底部		Ⅶ a	56図	図52
424	1 1 L・II層下部	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
425	1 5 K・V層上部	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
426	1 1 M・II層	浅鉢	底部	内面・底面ともミガキ	Ⅶ a	56図	図52
427	1 2 M・II層	深鉢・甕	底部下半～底部	外面に炭付着	Ⅶ a	56図	図52
428	1 6 M・IV層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
429	1 3 M・II層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
430	1 7 D・II層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
431	1 7 I・II層	深鉢・甕	底部		Ⅶ a	56図	図52
432	2 3 O・II層	深鉢・甕	底部下半～底部		Ⅶ a	57図	図52
433	不明・表採	浅鉢	底部		Ⅶ b	57図	図52
434	1 7 E付近・II層	深鉢・甕	底部	網代痕	Ⅶ b	57図	図52
435	1 8 E・II層	浅鉢	底部		Ⅶ b	57図	図52
436	1 1 M・III層	?	底部	外面に強いミガキ	Ⅶ b	57図	図52
437	1 1 M・II層	甕?	底部下半～底部	外面にミガキ、内面にけずりの痕が顕著	Ⅶ b	57図	図52
438	2 2 R・II層	?	底部	網代痕	Ⅶ b	57図	図52
439	1 8 E・II層	深鉢・甕	底部	網代痕	Ⅶ c	57図	図52
440	1 8 K・II層	深鉢・甕	底部	網代痕	Ⅶ c	57図	図52
441	1 2 M・II層	深鉢・甕	底部	網代痕	Ⅶ c	57図	図53
442	1 6 D・I層	深鉢・甕	底部	底部に網代痕	Ⅶ c	57図	図53
443	1 3 J・II層	深鉢・甕	底部	網代痕あり	Ⅶ c	57図	図53
444	1 7 E付近・I層	深鉢・甕	底部	土層部、底面に回転糸切痕	Ⅶ c	57図	図53
445	1 7 I・III層	土偶	胴部	刺突による文様	Ⅷ	57図	図53
446	1 2 M・II層	土偶	胴部左半身	沈線による円状部分を作り出す	Ⅷ	57図	図53
447	1 9 N付近・I層	土偶	胴上半部?	2本の沈線が鋭角的に曲がる	Ⅷ	57図	図53
448	1 6 E・III層	土偶	胴部?	沈線の断面形はV字形	Ⅷ	57図	図53
449	1 6 F・攪乱部	土偶	臀～股間部	他の部位よりも肉厚が厚い	Ⅷ	57図	図53
450	1 4 K・II層	土偶	?		Ⅷ	57図	図53
451	1 6 E・III層	土偶	?		Ⅷ	57図	図53
452	1 8 K・II層下部	土製円盤	完形	表面に縄文施文、赤彩の痕あり	Ⅷ	57図	図53

石器観察表

No	出土地点・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	分類	絵図	写真
10	RA01埋土最下部	石鏝・完形	2.0	1.3	0.3	0.47	○安山岩	北上山地・中生界	I B 3 a	33図	図37
28	RA04床面	磨石・完形	11.4	8.8	6.3	976	安山岩	北上山地・中生界	IX	34図	図38
43	RA06埋土	尖頭器・完形	4.2	2.9	1.1	13.63	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	II A 3 b	35図	図39
44	RA06床面	石匙・完形	2.7	5.6	0.8	19.12	チャート	北上山地・古生界	V B 1	35図	図39
45	RA06床面	磨石・完形	11.0	7.5	4.5	539	安山岩	北上山地・中生界	IX	35図	図39
53	RA07埋土	磨石・完形	6.7	3.6	2.5	95.5	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	IX	36図	図39
54	RA07埋土	磨石・完形	7.1	6.6	3.7	257.98	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	IX	36図	図39
77	RA08埋土下部	石匙・完形	2.2	3.3	0.5	4.18	○細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	V B 1	37図	図40
118	RA11埋土	尖頭器・完形	3.9	1.3	0.9	4.35	赤褐色粘板岩	北上山地・古生界	II B 2 b	40図	図42
125	RD37埋土下部	石鏝・完形	1.7	1.7	0.25	0.84	凝灰質粘板岩	北上山地・古生界	IA 1 b	41図	図42
132	RE03埋土上部	磨製石斧・欠損	8.4	4.4	3.1	191.22	凝灰質砂岩	北上山地・古生界	III A	41図	図42
134	RF03埋土	石鏝・身部欠損	2.7	1.4	0.35	1.23	チャート	北上山地・古生界	IA 2 a	41図	図42
453	16 G・Ⅲ層上部	石鏝・完形	1.9	1.7	0.29	0.79	○細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IA 1 b	58図	図53
454	17 E・Ⅴ層	石鏝・完形	3.9	1.2	0.4	1.76	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IA 1 a	58図	図53
455	17 E・Ⅱ層	石鏝・完形	3.2	1.6	0.4	1.74	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IA 1 a	58図	図53
456	18 E・Ⅱ層	石鏝・完形	2.9	1.8	0.36	1.12	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IA 1 a	58図	図53
457	17 H・Ⅲ層	石鏝・完形	3.1	1.8	0.6	2.41	流紋岩	北上山地・中生界	IA 2 a	58図	図53
458	16 I・Ⅱ層	石鏝・身部欠損	2.8	1.55	0.3	1.27	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IA 2 a	58図	図53
459	13 M・Ⅲ層	石鏝・完形	2.8	1.4	0.4	1.49	凝灰質粘板岩	北上山地・古生界	IA 2 a	58図	図53
460	12 M・Ⅲ層	石鏝・身部欠損	(2.6)	1.6	0.45	0.93	凝灰質粘板岩	北上山地・古生界	IA 2 a	58図	図53
461	17 I・Ⅲ層	石鏝・完形	1.2	1.6	0.3	0.9	チャート	北上山地・古生界	IA 2 a	58図	図53
462	不明・表探	石鏝・完形	3.1	1.1	0.4	0.83	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IB 3 a	58図	図53
463	16 I・Ⅲ層	石鏝・身部欠損	2.8	0.9	0.4	1.0	○細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	IB 4	58図	図53
464	16 I・Ⅱ層	石鏝・完形	2.9	1.5	0.45	1.02	○安山岩	北上山地・古生界	IB 3 a	58図	図53
465	13 I・Ⅲ層	石鏝・完形	2.6	1.2	0.5	1.53	赤褐色凝灰岩	北上山地・古生界	IB 3 a	58図	図53
466	不明・表探	石鏝・身部欠損	2.3	2.6	0.4	3.01	粘板岩	北上山地・古生界	IA 1	58図	図53
467	16 H・Ⅲ層	尖頭器・完形	7.1	3.3	0.9	12.11	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	II A 1 c	58図	図53
468	18 N・Ⅲ層	尖頭器・完形	3.8	2.1	0.75	7.04	粘板岩	北上山地・古生界	II A a	58図	図53
469	17 H・Ⅱ層	石鏝・完形	4.4	2.0	0.9	8.38	安山岩	北上山地・中生界	IV	58図	図53
470	18 M・Ⅴ層	石鏝・完形	12.5	3.05	0.95	34.80	赤褐色粘板岩	北上山地・古生界	IV	58図	図53
471	16 I・Ⅱ層	石匙・完形	2	5.7	0.9	8.42	細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	V B 2	58図	図54
472	不明・表探	石匙・完形	3.6	6.5	1.5	33.01	凝灰質粘板岩	北上山地・古生界	V B 2	58図	図54
473	16 L・表探	石匙・完形	4.8	2.5	0.9	10.1	○細粒流紋岩質凝灰岩	北上山地・古生界	VA 1	58図	図54
474	16 M・Ⅴ層	石鏝・身部欠損	(3.3)	1.8	0.55	33.6	赤褐色粘板岩	北上山地・古生界	VA 1	58図	図54
475	16 E・Ⅳ層	不定形・完形	4.3	5.7	1.0	24.25	粘板岩	北上山地・古生界	VA	59図	図54
476	18 I・Ⅲ層	不定形・完形	4.45	7.5	1.25	43.9	チャート質粘板岩	北上山地・古生界	VI A	59図	図54
477	21 Q・Ⅰ層	不定形・欠損	3.9	5.0	0.8	12.20	凝灰質粘板岩	北上山地・古生界	VI B	59図	図54
478	22 Q・Ⅱ層	不定形・完形	3.6	4.1	1.1	11.08	チャート質凝灰岩	北上山地・古生界	VI A	59図	図54
479	16 E・Ⅳ層	磨製石斧・欠損	9.9	4.1	2.8	189.47	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	VII A	59図	図54
480	17 E・Ⅱ層	磨製石斧・欠損	8.1	3.5	1.5	69.41	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	VII A	59図	図54
481	15 I・Ⅱ層	磨製石斧・欠損	4.1	5.2	1.35	32.22	ホルンフェルス	北上山地・古生界	VII A	59図	図54
482	20 P・Ⅱ層	打製石斧・欠損	(3.2)	3.9	1.5	17.88	チャート質凝灰岩	北上山地・古生界	VII B	59図	図54
483	18 N・Ⅴ層	打製石斧・完形	10.6	4.3	2.2	111.93	砂質凝灰岩	北上山地・中生界	VIII B	59図	図54
484	18 E・Ⅱ層	石鏝・欠損	7.2	3.4	2.8	108.31	ホルンフェルス	北上山地・古生界	VIII	59図	図54
485	16 I・Ⅱ層	玉・完形	1.0	1.0	0.45	0.43	緑色凝灰岩	北上山地・古生界	59図	図54	
486	15 M・Ⅱ層下部	磨石・完形	9.5	7.4	5.0	495.0	安山岩	北上山地・中生界	IX	60図	図55
487	12 I・攪乱部	凹石・完形	10.7	8.6	4.8	671.0	花崗閃緑岩	北上山地・中生界	IX	60図	図55
488	15 H・Ⅲ層	凹石・完形	10.4	8.2	5.5	667.0	花崗閃緑岩	北上山地・中生界	IX	60図	図55
489	15 I・Ⅲ層	凹石・完形	14.3	11.9	9.2	2129	花崗閃緑岩	北上山地・中生界	IX	60図	図55
490	14 K・Ⅱ層	石鏝・完形	16.2	15.2	9.2	3663	花崗閃緑岩	北上山地・中生界	IX	61図	図55
491	18 J・Ⅱ層	磨石・完形	13.7	9.7	7.2	1386	花崗閃緑岩	北上山地・中生界	IX	61図	図55

V まとめと考察

1. 上甲子遺跡全遺構について

今回の調査の結果、本遺跡は縄文時代後期中葉と縄文時代晩期末～弥生時代初期の2時期にかけて営まれた集落であり、それ以前の縄文時代早期後半から生活していたであろうことを推測させる資料が発見されている。本項では、まともとして、調査結果の総括と若干の考察を付したい。

竪穴住居跡

本遺跡では11棟の竪穴住居跡が検出されており、そのうち縄文時代後期中葉期のものが5棟、縄文時代晩期末～弥生時代初期のもの6棟であり、この2時期に小規模な集落が営まれていた。時期を問わず、共通の立地条件としてRA05竪穴住居跡を除く、すべてが北側斜面沿いのへり部分に構築されており、隔当たりの良い条件を備えている。その他の特徴としては以下のことがあげられる。

縄文時代後期中葉期

〈平面形・規模〉 遺構が割平されており、全体の形状をつかめる住居跡は少ないが、ほぼ円形の形状を呈している。規模は3.5m～5mと様々であり、統一性はない。

〈炉〉 RA05を除いて地床炉である。地床炉は床面のほぼ中央部に位置し、2棟には出入り口側に大きい立石を伴う。焼土の発達状況は比較的良好で、特にRA01竪穴住居跡・RA02竪穴住居跡の炉の焼土層は厚かった。また2棟に伴う立石については以下の通りである。

- ・住居中心部からやや南側の出入り口側に埋置する。
- ・掘り込む穴の大きさは石の先端よりもやや大きい程度である。
- ・掘り込み跡の埋土には炭化物が混じる。
- ・石の表面には火を受けた痕跡が見られない。
- ・石の先端の太いほうを上にし、細い方を下にして埋め込んでいる。
- ・安山岩を加工して使用している。

などが挙げられる。立石炉を持つ住居跡も多いが、そのほとんどは出入り口から遠い「奥の間」に存在し、しかも被熱を受けている痕跡が顕著である。しかしこの2本の立石の場合、それらの事例とは異なる点が多く、しかも焼土を切って立石を埋めるための穴が構築されている（RA01住居跡）ことから、生活していた段階での住居に伴う祭儀的な施設ではないと思われる。むしろ住居を廃絶する際に埋置した可能性が高い。

〈壁〉 斜面上部側の壁を深く掘り込んでおり、急激に立ち上がる例が多い。

〈柱穴〉 地床炉を取り囲むようにしての4本構成が多い。

〈出土遺物〉 RA01竪穴住居跡・RA02竪穴住居跡から床面より土器が出土しており、いずれも加曾利B式・十腰内Ⅲ式相当の時期のものであり、その他の同時期の住居跡の埋土からも同時期の遺物が出土している。石器は概して多くない。

縄文時代晩期末～弥生時代初期

〈平面形・規模〉 全容を把握できる住居跡はないが、残存する部分から推測すると円形の住居跡が多い。直径は4.5m～5.5mの規模があるが総じて5.0m前後に集中する。

〈炉〉 拳大～半頭大の角礫を「ハ」の字状に外に開くようにして組んだ石囲炉であり、共通性がある。炉の位置はいずれも中心部に位置しており、RA07竪穴住居跡を除いて炉の作り替えがなされている。炉を作

り替える際に旧炉の上に土を貼って覆い隠し、新炉を隣に構築している。またRA08・RA10住居跡に見られるように旧炉のひとつの構成礫を抜き取って新炉に転用した痕跡がうかがえる。なお焼土の発達状況はあまり良くなく、長期にわたる集落であったとは考えにくい。

〈壁〉 ならだかに立ち上がる壁が多く、縄文後期の住居跡のように急激な立ち上がり方は見せない。

〈柱穴〉 柱穴の並びのはっきりしない住居跡が多く、全体的な傾向は述べられない。

〈出土遺物〉 変形工字文の文様を持つ浅鉢・高坏などが出土している。土器型式として大河A¹式・谷起高式及び砂沢式相当の土器型式が与えられる。変形工字文の特徴については本章の後半で取り上げる。

遺構名	平面形	規模 (m)	炉	柱穴	時期	備考
RA01	円形	直径約4.5m	地床炉	?	縄文後期中葉	炉南側に立石。出入口伏施設あり。
RA02	円形	直径約5m	地床炉	4本	縄文後期中葉	炉南側に立石。
RA03	円形	直径約3.5m	地床炉	4本	縄文後期中葉	南側攪乱を受ける
RA04	不明	不明	地床炉	(4本)	縄文後期中葉	炉周辺と壁際に2重に柱穴巡る?
RA05	不明	不明	石囲炉	?	縄文後期中葉?	炉中央部に人頭大の円礫あり。
RA06	不明	直径約5.5m	石囲炉	?	縄文晩期末～弥生初頭	住居内に貯蔵穴と思われる土坑(RD02)あり。炉の作り替えあり。
RA07	円形	直径約4.5m	石囲炉	6本?	縄文晩期末～弥生初頭	住居内側に周溝巡る。焼失家屋か?
RA08	楕円形	5.0×4.5m	石囲炉	6本?	縄文晩期末～弥生初頭	炉の作り替えあり。南側に攪乱を受ける。
RA09	円形	直径約4.4m	石囲炉	(4本?)	縄文晩期末～弥生初頭	炉の作り替えあり。
RA10	円形?	直径約4.8m?	石囲炉	?	縄文晩期末～弥生初頭	炉の作り替えあり。南側に攪乱を受ける。
RA11	円形?	直径約5.2m?	石囲炉	?	縄文晩期末～弥生初頭	壁は検出できず、柱穴は壁際に巡る。3期に分かれる。

土坑

土坑は43基を数えたがそのほとんどが浅いものであり、フラスコ状ピットなどの貯蔵穴、または墓坑を示すものは検出されなかった。内訳として縄文時代前期前半と思われる土坑が4基、縄文時代後期が4基、縄文時代晩期末～弥生時代初頭が9基、時期不明が26基を数える。時期不明の土坑の大半は縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土坑と思われるが確実な判断資料に欠ける。前期の土坑は調査区中央部の18-O、19-O、19-Pグリッドに集中してみられ、その他に同時期と思われる集石・焼土も検出されており、生活を営んでいた痕跡がうかがわれる。後期と考えられる土坑はL・M列付近にややまとまってみられる。住居跡周辺からはほとんど検出されていない。逆に晩期末～弥生初頭の土坑は住居跡周辺に集中している。形状として楕円形のもの26基であり、60%強をしめる。円形のもの15基で33%を占めている。

深さとしては20cm程度の浅い土坑が多いが、上部の層を削平されているためであり、本来はもう少し深さがあったものと推測される。

遺構名	位置	形状	直径 (cm)	深さ	時期	備考
RD01	19G	円形	110×102	20	縄文晩期末～弥生初頭	埋土に焼土・炭化粒含む
RD02	18H	円形	110×100	80	弥生初頭	RA06に伴う貯蔵穴か?
RD03	18K	円形	90×85	48	縄文晩期末	RA01床面を掘り込む
RD04	16I	楕円形	140×90	35	縄文後期中葉?	RE01床面より検出
RD05	19L	楕円形	105×65	45	?	
RD06	19L	楕円形	70×43	30	?	
RD07	16D	円形	72×67	12	縄文後期中葉	土層記録消滅
RD08	19J	楕円形	70×55	52	縄文後期中葉	RA04住居の主柱穴か?
RD09	18L	楕円形	70×55	20	?	RD10と隣接
RD10	18L	楕円形	60×50	24	?	RD09と隣接
RD11	14L	楕円形	130×105	24	縄文後期中葉～後葉	
RD12	15L	円形	49×46	22	?	
RD13	14L	楕円形	58×51	13	?	土層記録消滅
RD14	23P	楕円形	75×64	18	縄文晩期?	
RD15	22P	楕円形	68×55	25	縄文晩期末	
RD16	20Q	円形	108×100	34	?	
RD17	23Q	楕円形	124×97	25	縄文晩期末～弥生初頭	RD18に切られる
RD18	23Q	円形	75×75	22	縄文晩期末～弥生初頭	RD17を切る
RD19	17M	円形	105×105	26	?	
RD20	13M	楕円形	190×125	40	?	
RD21	22Q	楕円形	188×115	31	?	RA11住居西側柱穴に切られる
RD22	22R	楕円形	170×108	21	?	
RD23	22R	不整	78×70	16	?	土層記録消滅
RD24	22R	楕円形	77×65	15	?	
RD25	18O	楕円形	206×167	47	縄文前期前半?	埋土中に中環火山灰入る
RD26	20N	楕円形	170×108	27	縄文晩期末～弥生初頭?	RE03床面より検出
RD27	22R	楕円形	80×61	11	?	
RD28	21Q	楕円形	149×64	32	?	
RD29	21Q	円形	90×73	30	?	
RD30	20R	円形	73×62	22	?	
RD31	23O	楕円形	87×59	15	?	
RD32	23P	円形	110×108	24	?	
RD33	23P	不整	83×65	17	?	
RD34	22Q	円形	160×143	55	縄文晩期末～弥生初頭	
RD35	21P	楕円形	292×132	51	?	底面・壁際に人頭大の角礫
RD36	19O	円形	110×91	18	縄文前期前半?	
RD37	19O	楕円形	170×116	31	縄文前期前半	
RD38	19P	楕円形	236×172	28	縄文前期前半	埋土中に中環火山灰入る
RD39	21P	楕円形	82×54	25	?	
RD40	23R	円形	60×58	15	?	
RD41	22R	円形	60×54	26	?	
RD42	22R	楕円形	76×62	16	?	
RD43	23R	楕円形	81×63	24	?	土層記録消滅

竪穴状遺構

6基検出されている。RE02・RE03・RE04竪穴状遺構はRA10竪穴住居跡を切って構築しており、弥生時代初頭以降の遺構である。埋土中に角礫が多く入るが、人為的なものかはよく分からない。RE06竪穴状遺構は調査区外に遺構が伸び、全容を明らかにできなかったが、方形を呈する。RH02配石遺構の暗渠状施設に伴う施設である可能性もあり得る。

配石・集石・立石遺構

本遺跡では石組みによる遺構が4基検出されている。RH02配石遺構は規則正しく礎が並び配石間には水の流れた痕跡が認められる。上手の旧民家の石垣と軸が一致することから近現代の暗渠状施設と考えられる。RH03立石遺構は立石と焼土が絡んでくると言う点でRA01住居跡・RA02住居跡に伴う立石と同じ特徴を持っていることから縄文時代後期の時期の可能性も高いが詳細については不明である。RH04集石遺構の埋土周辺からは前期前半相当の土器が出土しており、遺構も同時期と考えられる。

遺構名	種別	規模・形態	軸	時期	備考
RH01	集石	1×0.5m。楕円形状の集石。掘り込み跡なし。	東西軸にはほぼ一致	縄文後期中業?	RA02住居の南側
RH02	配石	長さ6.8m、溝幅40～110cm、深さ15～26cm。	関連なし	近代	暗渠として使用したものか?
RH03	立石	38×30×7cmの扁平な角礫の立石。北側に薄く焼土が広がる。	立石から見ると焼土は北方に位置。	?	立石周辺に扁平な大型礫あり。
RH04	集石	190×120cmの土坑の底面に集石	関連なし	縄文前期前半	埋土上面より大木2b相当土器出土

焼土遺構

全部で5基検出されている。うち2基は縄文時代前期の遺構、さらに2基は縄文時代後期の遺構、1基は時期不明である。前期の焼土遺構（RF01・RF02）は上部を削平されているためでもあるが、焼土の堆積は薄く、発達状況としては良くない。後期の焼土遺構（RF04）は厚い焼土の堆積が見られた。

2. 立石を伴う竪穴式住居跡について

本遺跡では前述したとおり、立石を伴う住居跡が2棟検出されている。2棟とも地床炉南側の出入り口に近い位置に構築されている。特に近い割には火による変色を受けていない。その他にも共通している点が多く挙げられるが、ここでは県内・県外の類似した資料を挙げてみる。（掲載資料の基準としては「竪穴内部の他の構成礫よりも顕著に大きい石が埋め込まれているもの」とし、立石炉も範疇に含めた。また本来立石とは思われるが、調査段階にすでに抜けている状態で検出された資料は除外している。）

第62図に示した資料から以下のように分類することができる。

- A 炉の構成礫の一部として埋置されたもの（立石炉）
- B 炉から若干離れた位置に埋置されたもの
- C 出入り口状施設付近に埋置されたもの
- D 奥部に埋置されたもの

Aのタイプが最も多く見られるが、中でも炉の南辺部の出入り口側に埋置されているケースが多い。礫の特徴としては扁平な板状角礫が多く、若干楕円形の重円礫が用いられている。立石部の掘り方は炉の焼土と同時期であることを示している。よって被熱による変色が著しい状態の立石が多い。

Bは厨Ⅱ遺跡と上尾股(2)遺跡・白石遺跡の立石があげられる。いずれも地床炉から10cm程度離れた地点に位置し、出入り口側に埋置されていると推測される。本遺跡RA02住居跡の立石と類似するが、被熱を受けている点で相異なる。

Cは湯沢遺跡の立石が該当する。出入り口状施設の東側に位置するが、「出入り口状施設」とみなせるものではない、としている。

Dとしては田中5遺跡・与助尾根遺跡の例があげられる。与助尾根遺跡の立石は四角柱状の礎がそびえ立つように埋置されており、祭祀的な色彩が強いと考えられる。奥部に埋置した例である。

立石を持つ竪穴住居跡

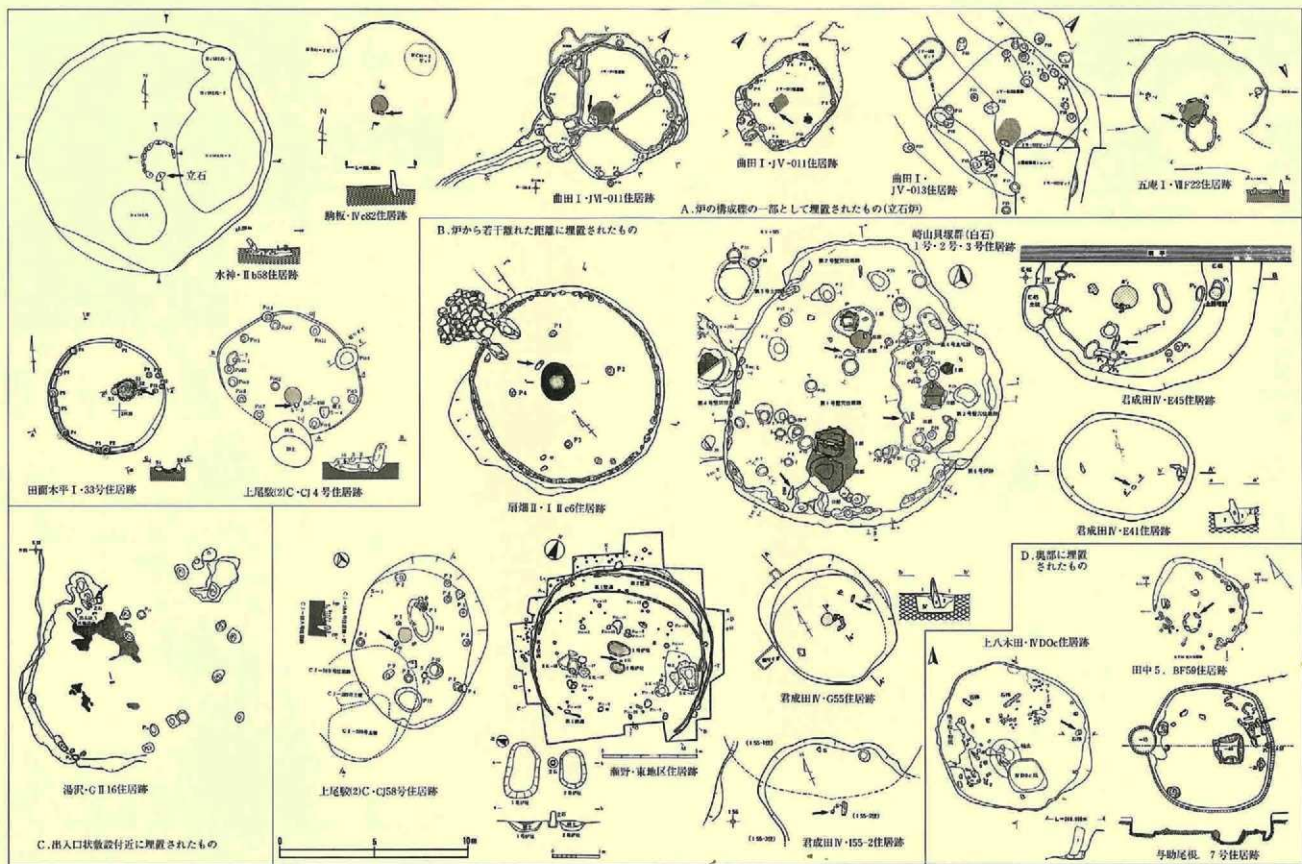
遺跡名	所在地	遺跡名	時期	形態	規模	備考	分類
水神遺跡	安代町	I 5 58住居跡	後期前半	立石が、C字状の石両伊の南面に縦に長く、外縁角状に直立。	長さ37cm、幅26cm、厚さ16cmの直立角礎。	竪穴住居。	A
駒取遺跡	稲束町	IV c 82住居跡	後期前半	立石が、焼土の南側に埋置。	長さ60cm×32cm、最大幅7cm、安山岩質の方形板状礎。	立石の廻り方礎土を焼土が覆う。	A
高田1遺跡	安代町	J IV -011住居跡	後期前半	立石が、焼土の南側に全体の半分ほど埋置。	43×32cm、厚さ20cmの石英安山岩質角礎。	抜き替えの痕跡なく、焼土による紫色着色。	A
高田2遺跡	安代町	J V -011住居跡	後期前半	立石が、焼土南東側(出入口側)に直立。	33×30cmの板状の石英安山岩質角礎。	隅丸方形状の竪穴住居跡。	A
高田3遺跡	安代町	J V -013住居跡	後期前半	立石が、焼土の南側に埋置。	32×24cmの板状角礎。	隅丸方形状の竪穴住居跡。	A
五滝1遺跡	浄法寺町	IV F 22住居跡	中期	立石が、伊の東側の縁石。	長さ28cmの板状角礎。	C字状の炉だが木炭は石が一層すると考えられる。	A
田中水干1遺跡	青森県八戸市	33号住居跡	後期前半	立石石礎が、炉の出入口側に埋置。	直径±25cm、の基礎で、角礎に高さ10cmの礎あり。	立石の周囲には扁平な石圓柱状の礎がみられる。	A
上地坂(2)C遺跡	青森県六ヶ所村	C J 4号住居跡	後期前半	伊の南面に直立。焼土を切って埋置。	長さ34cm、直径±13cmの円筒状礎。	伊の焼土を切って埋置。	A
高田2遺跡	安代町	I II c 6住居跡	後期中葉	地床から出入口の縁石の中間付近に直立。	10×30cmの扁平な礎が50cmほどの高さで直立。	伊との関連は考えられないが、炉側は火焼を受け易い。	B
崎山遺跡群 I白石遺跡	青森市	1号住居跡	中期	立石を伴う板状礎。住居跡南側一かの位置に埋置。	長さ38cm、幅15cmの三角柱状礎。		B
崎山遺跡群 I白石遺跡	青森市	2号住居跡	中期	立石を伴う板状礎。住居跡の南側に埋置し、I部地床伊の東西に位置する。	長さ40cm、幅14cmの三角柱状礎。	直径25cmほどのピットに16cmほど埋め込んでいる。	B
崎山遺跡群 I白石遺跡	青森市	3号住居跡	中期	立石を伴う板状礎。西壁際(伊の南側面)に位置する。	長さ30cm、幅15cmの三角柱状礎。	埋り込み方は浅い。	B
若成田南遺跡	稲束町	E 41住居跡	後期前半	南側の扉面より埋置。伊は州東側に位置。	26×10×10cmの石で20cmほど埋め込まれる。		B
菅成田南遺跡	稲束町	E 45住居跡	後期前半	伊の南東側の壁の手前に埋置。	長さ41cm、幅30cm、厚さ11-12cmの板状自然石が15cmほど埋められている。	埋石には板状礎が一面し、北面には大型深鉢の埋置が見られる。	B
菅成田南遺跡	稲束町	G 55住居跡	後期前半	ほぼ中央に位置する伊の東側50cmの東壁近くに埋置。	幅27cm、縦12cm、幅6-8cm人の板状礎。	30cm埋り込み、斜めに埋えらる。	B
菅成田南遺跡	稲束町	I 55-2住居跡	後期中葉	石礎よりの扉面に直立に埋置。	幅34cm、縦10cm、厚さ10cmの石が24cm埋り込みで扉面に埋えらる。	焼土との関連はない。特徴不明。	B
上地坂(2)C遺跡	青森県六ヶ所村	C J 58(A)号住居跡	後期前半	立石が、地床伊の南側に縦長石を埋置。	直径±13cm、長さ±33cmの礎。		B
磯野遺跡	青森県黒川町	東地区住居跡	弥生前期	1号炉と2号伊の中間点に埋置。4号炉の給水角縁の交点上に埋置。	直径14cm、長さ30cmの円柱状で直径30cm、高さ15cmの小穴に埋置。	立石は全面磨石によって整形される。2つの伊の焼土の塊は焼石。	B
磯野遺跡	黒川町	G II 6住居跡	中期前半	出入口状礎付近に伴う。	長さ±44cm、直径±21cm、円筒状の安山岩質。	床面下±17cmの深度で埋め込む。	B
上八木遺跡	黒川町	IV D O C住居跡	中期後半	石礎埋置。東側面において直立した状態で出土。5cm程度土を盛りその中に埋置。	長さ39.2cm、幅13.7cm、厚さ12.3cm、10,250gの流紋岩質。	立石は自然石を磨石によって整形したもの。	D
田中5遺跡	一戸町	B F 59住居跡	中期後半	不明	不明	伊入口は東側と考えられることから立石は東側に埋置されたもの。	D
与助尾根遺跡	青森県野辺町	7号住居跡	中期	伊の中央部に設置する立石。	長さ67cmの角柱。地上に50cm出る。		D

3 上甲子遺跡出土土器変形工字文の分類について

第VI群の精製土器に伴う文様として、沈線と貼り付け瘤による「変形工字文」が主体となっている。「変形工字文」は縄文時代晩期末～弥生時代前半にかけて見られる文様であり、土器型式としては大洞A'式土器とそれに継続する砂沢式土器が与えられ、弥生時代初期の土器文様としての目安ともなっている。また砂沢式と併行する型式として、青木畑式・谷起島式もあげられ、地域性による文様の相違について様々な検討が加えられている。本項では上甲子遺跡の持つ変形工字文をいくつかのタイプに分類し、特徴を述べてみたい。なお分類の基準としては須藤隆氏の提言する「変形工字文A型～C型」を参考として分類を行ってみた。ただし本遺跡の土器は完形品が少なく、文様の全容を把握することは困難であり、変形工字文の全体的な流れをつかめる土器は少なかったことをあらかじめ断っておく。

変形工字文A型

主に体部上半にかけて文様が展開される。大洞A'式に多く見られる粘土瘤貼り付けと中点の彫り込みが特徴となっている。A型はさらに3つに細分される。



第62図 立石を伴う竪穴住居跡集成図

1類 2～3条の平行沈線が回り、沈線上に2対の貼り瘤がなされる。貼り瘤に連結する沈線はなく独立している。本来、「変形工字文A型」の midpoint にあたる部分の資料と思われる。

a 346には小さめの瘤がつくが、沈線間にRL斜縄文が施文される。大洞A'式よりもやや古いと思われる。

b 沈線は3mm弱であり、浅い彫り込みである。瘤は小さく、膨らみも目立たない。瘤の先端・下端にナデを加えている。色調としては黄橙色が多い。大洞A'式と思われる。

c 瘤間を棒状工具で掘り込むことで文様を形作っている。沈線は先端の丸い工具で4mm弱とやや太めに引かれている。瘤は貼り付けた後に先端・下端にナデを加えている。大洞A'式の終末頃と思われる。

d cと同じ特徴を持つが瘤にはナデが加えられない。瘤の貼り付けは明瞭である。338は沈線間にも縄文が付されている点で他の土器とは異なっている。青木畑式相当と思われる。

2類 2対の瘤を起点として横位と斜位にのびる2本沈線による π 字文の変形工字文である。沈線はいずれも4～5mmと太く力強い。断面形もU字形を呈している。瘤は大きめのものが多く、高坪脚部の86を除いて貼り付け後に整形は施されていない。文様帯は広めには展開しない。

3類 1類の沈線間(平行沈線と斜線の間)にもう1本の沈線が引かれるものである。上甲子遺跡の変形工字文の中ではこのパターン構成が最も多い。しかし沈線の太さ・瘤の大きさ・色調などによりさらに3つに細分される。

a 沈線の断面形はV字形で太さは2～3mm程度と細い。瘤の貼り付けは行われぬが、沈線を描く段階で粘土が引き寄せられることによってわずかな膨らみを有する。文様は midpoint に新たに2対の瘤を配することによって、多段に展開する「喰い違い型」の変形工字文である。大洞A'式でも古い方の部類と考えられる。

b 沈線の断面形はV字形で太さは2～3mm程度と細い。瘤は小さく目立たぬが貼り付けられる。色調は黄橙色を呈している。色調は黄橙色である。大洞A'式と思われる。

c 瘤の貼り付けは大きめであり、ナデも加えられないケースが多い。沈線は4mmほどでやや太めであるが、断面はV字形で先端の尖った工具を使用している。色調は明赤褐色～褐色が多く見られる。大洞A'式～砂沢式的要素が強い。

d 瘤の貼り付けは大きく、膨らみもあるが、ナデは施されていない。瘤間の彫り込みは強く削られている。沈線は先端の丸い工具で4～5mmの幅の力強い沈線が引かれている。内外面とも非常にいいにミガキのかけられる土器が多い。また体部下半にLR斜縄文が展開するケースが見られる。色調は明赤褐色が多い。砂沢式的要素が強いと思われる。

4類 2類の沈線間(平行沈線と斜線の間)に2本の沈線が引かれるものである。全体の文様構成については不明の点が多いが、間に入る沈線の内、上の1本は他の瘤に連結する。沈線は3～4mmとやや太めであり、断面形はいずれもU字形を呈す。貼り付け瘤にも明瞭な膨らみが認められ、ナデは加えられない。色調としては明赤褐色を呈し、内外面のミガキも顕著である。大洞A'式～砂沢式と考えられる。

変形工字文B型

特徴として平行沈線と斜線の交点部分を沈線で結びつけてしまい、その中央部に縦長の彫り込みを加えることが特徴となっている。二枚橋式土器に多く見られるタイプだが、本遺跡からは確認されていない。

変形工字文C型

変形工字文に2対の貼り瘤と彫り込みが伴わず、流水文状に連続して下位に展開していくタイプのもので

ある。青木畑式土器、谷起高式土器などに多く見られる。

1類 2mm程度の細目の沈線により流水文状の変形工字文を形作っている。沈線間に新たな沈線は刻まれず、1本の沈線で1周し、2段で終結する。下部には異なる文様が広がるようである。沈線の断面はV字形と鋭角的である。色調は赤褐色を呈する。大洞A'式の古い方と考えられる。

2類 3～5mmの太い沈線により流水文状の変形工字文を形作っている。1類の変形工字文間に1本の沈線が引かれ、下段の変形工字文に連結している。C型の中では最も力強い沈線で刻まれる。体部下半には無文であったり縄文が施文されたりと一律でないが、体部上半には2段以上の流水文状の変形工字文が施文されている。青木畑式の時期と考えられる。

3類 3～4mm程度の沈線により流水文状の変形工字文を形作っている。1類の変形工字文間に2～3本の沈線が引かれ、下段の変形工字文に連結している。やや先端の丸まった施文具を使用している。352の蓋を伴うと推測される壺には広い範囲にわたって文様が展開する。大洞A'式の新しい方～砂沢式の時期が考えられる。

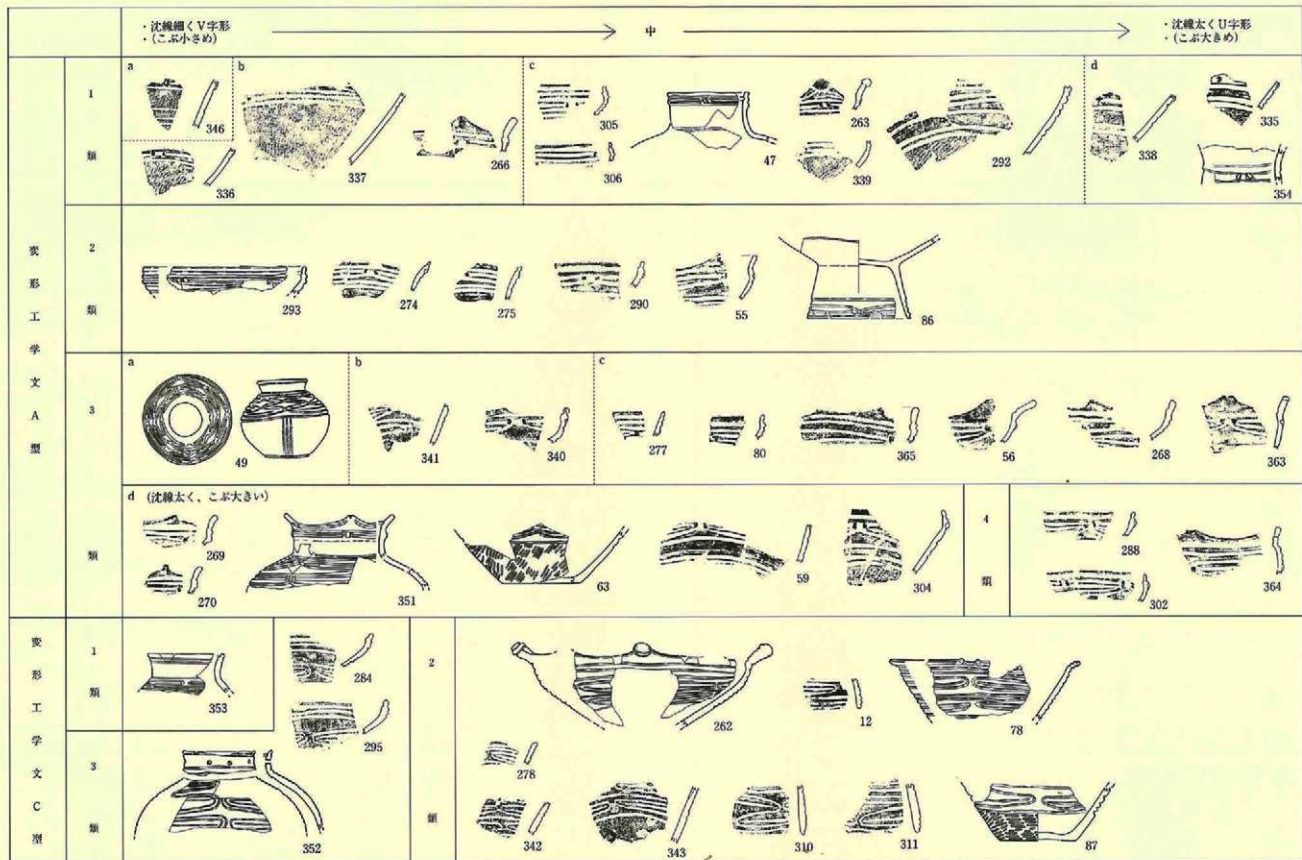
以上のことから上甲子遺跡出土の縄文晩期末～弥生初頭の土器は大きく「大洞A～A'式」「大洞A'式」「砂沢式併行」の3時期に大分される。各時期の土器片の特徴はだいたい次の通りである。

	大洞A～A'式	大洞A'式	砂沢式併行
文様	変工字文A型がやや多い。	変工字文A型がやや多く、C型も見られる。	変工字文C型が多く、A型も見られる。
沈線	2～3mmで細め、断面はV字形。	3～4mmでやや太め、断面はV字形で力強い。	4～5mmで太め、断面はU字形で力強い。
瘤	ついていない。もしくは小さい。	小さく、膨らみも不明瞭。ナデが加えられ、扁平になっている。	大きく、膨らみも明瞭。ナデによる整形は加えられない。
ミガキ	かけられていないケースも多い。	内外面ともかけられる。	内外面とも非常に丁寧にかけられる。
色調	黄白灰色。断面はサンドイッチ状に炭化している。	黄灰色、および赤褐色。	明赤褐色
単位	4(8)単位、3(6)単位の両方見られるが、よくわからない。	4(8)単位が多い。	3(6)単位が多いが、4(8)単位も見られる。

<参考文献>

- 「日本先史器の縄文」山内清男 先史考古学会 1979
 「石器の基礎知識Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」柏書房 1981
 「東北地方縄文時代早期後半の様相—条痕文系土器群の系譜—」熊谷常正 遠光器 8 1974
 「大木式土器理解のためにⅡ」奥野義一 考古学ジャーナル16 ニューサイエンス社 1968
 「大木式土器理解のためにⅤ」奥野義一 考古学ジャーナル132 ニューサイエンス社 1969
 「縄文集落」村田文夫 ニューサイエンス社 1985
 「考古学から見た火」石部正志小学館 民俗大系「火」1974

- 「岩手の弥生式土器曜年試験」小田野哲憲 岩手県立博物館研究報告第5号 1987
 「岩手県における弥生時代の住居跡」小田野哲憲 紀要Ⅷ08岩槻文センター 1988
 「岩手県出土の蓋形土器について」小田野哲憲 岩手県立博物館研究報告第1号 1983
 「東北地方北部における弥生文化受容器の様相—北上川中流域の土器群の分析を中心に—」佐藤嘉広 岩手県立博物館研究報告第7号 1989
 「岩手県内における弥生時代の石器組成について」相原康二 紀要Ⅷ08岩槻文センター 1989



第63図 上甲子遺跡出土土器変形工文字分類図

- 「縄文のムラと習俗」 桐原健 雄山閣 1988
- 「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居跡」 酒井宗孝 〔御岩埋文センター紀要Ⅶ〕 1987
- 「東北地方北部における縄文時代後期中葉の土器—新山権現社遺跡Ⅲ群1～3類土器—」 金子昭彦 〔御岩埋文センター紀要ⅩⅣ〕 1993
- 「青い森の縄文人とその社会—縄文時代中期・後期編—」 ふるさと青森の歴史シリーズ2 青森県教委 1991
- 「長野県史—考古資料編—1巻(南信)」 長野県教委 1983
- 「尖石」 宮坂英武 茅野町教委 1957
- 「十原内」 青森県弘前市十原内縄文式遺跡調査予報1968
- 「田面木平遺跡」 八戸市教委 1987
- 「丹後谷地遺跡」 八戸市教委 1986
- 「上尾敷(2)遺跡」 青森県教委 1988
- 「風張遺跡」 八戸市教委 1990
- 「田柄貝塚」 宮城県教委 1986
- 「立石遺跡」 大迫町教委 1979
- 「崎山弁天遺跡」 大槌町教委 1974
- 「崎山遺跡群Ⅱ—白石遺跡—」 宮古市文化財調査報告書15 1987
- 「田中5遺跡」—戸バイパス関係埋蔵文化調査報告書Ⅳ 1983
- 「川口Ⅱ遺跡」 〔御岩埋文センター第84集〕 1985
- 「湯沢遺跡」 〔御岩埋文センター第2集〕 1977
- 「扇畑Ⅱ遺跡」 〔御岩埋文センター第39集〕 1982
- 「曲田Ⅰ遺跡」 〔御岩埋文センター第87集〕 1985
- 「水神遺跡」 〔御岩埋文センター第96集〕 1986
- 「五處Ⅰ遺跡」 〔御岩埋文センター第97集〕 1986
- 「駒坂遺跡」 〔御岩埋文センター第98集〕 1986
- 「新山権現社遺跡」 〔御岩埋文センター第188集〕 1993
- 「上八木田遺跡」 〔御岩埋文センター第227集〕 1995
- 「土器組成論」 須藤隆 考古学研究19-4 1973
- 「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」 須藤隆 考古学研究23-2 1976
- 「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」 須藤隆 考古学雑誌68-3 1983
- 「東日本における弥生文化の受容」 須藤隆 考古学雑誌73-1 1987
- 「東北地方における弥生文化」 須藤隆 伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢 1990
- 「岩手の土器」 高橋信雄 小田野哲彦 熊谷常正 岩手県立博物館 1982
- 「岩手県の弥生文化」 草間俊一 北奥古代文化第10号 1978
- 「東北地方南部における縄文文化の終焉と弥生文化の成立—土器と土偶を中心に—」 仲田茂司 北奥古代文化第21号 1989
- 「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」 工藤竹久 考古学雑誌72-4 1987
- 「是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末から弥生時代の土器」 工藤竹久・高島芳弘 八戸市博物館研究紀要第2号 1986
- 「東北地方の弥生式土器の編年について」 縄文文化検討会 1988
- 「第4次谷起鳥遺跡発掘調査概報」 一関教委 1981
- 「青木畑遺跡」 宮城県教委 宮城県文化財調査報告書第85集 1982
- 「山王田遺跡調査図録」 宮城県—追町教委 1985
- 「砂沢遺跡」 弘前市教委 1991
- 「名川町剣吉克町遺跡」 青森県立郷土館 1988
- 「地藏田B遺跡」 菅原俊行 秋田市教委 1986
- 「是川中居・堀田遺跡発掘調査報告書」 八戸市教委 1981
- 「湯崎遺跡」 滝沢村教委 1986
- 「馬場野Ⅱ遺跡」 〔御岩埋文センター第99集〕 1986
- 「大日向Ⅱ遺跡」 〔御岩埋文センター第100集〕 1986
- 「君成田Ⅳ遺跡」 〔御岩埋文センター第62集〕 1983
- 「上村遺跡」 〔御岩埋文センター第158集〕 1991
- 「瀬野遺跡」 伊東信雄・須藤隆 東北考古学会 1979

上甲子遺跡 灰像分析報告

パリオ・サーヴェイ株式会社上甲子遺跡での燃料材の検討

はじめに

上甲子遺跡では、時代時期が不明である炉が検出され、焼土が認められた。炉などで草本類の燃料材が用いられると、灰中に植物珪酸体が組織片の形で残留していることが多い。(例えば、佐瀬・1982；大越・1985)。また、植物珪酸体は植物、特にイネ科植物の種類(Taxa)ごとに特有な形質を持つことから、燃料材として利用されたイネ科植物が特定できる。

そこで、組織片や植物珪酸体の産状から、イネ科草本類の利用の有無を推定する。

1. 試料

炉跡(RA02.RA06.RA07.RA08)より採取された焼土5点である。

2. 分析方法

湿重約5グラム前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W,250KHz,1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5の順に物理・化学処理を行い、組織片や植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス状に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する組織片や植物珪酸体を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計算する。

3. 結果

各試料で認められた種類と検出個体を表1に示す。組織片は全く認められない。また単体の植物珪酸体も保存状態が悪く、検出個体も少ない。検出される種類は、タケ亜科、ウシクサ族(ススキ属を含む)などである。

4. 考察

各炉跡試料からは組織片が全く認められず、灰などの燃料材の痕跡が残留していることは考えにくい。また、単体で検出された植物珪酸体は、遺跡の周囲に生育できる種類である。東京都多摩ニュータウン遺跡の焼土の調査(佐瀬,1982)や千葉県印旛村平賀遺跡群から検出された炉跡焼土を対象とした調査(大越,1985)では周辺に生育するススキやササ類、あるいは栽培されていたイネなどが利用されていた。この点を考慮すれば、今回認められた種類が燃料材として利用されたことも考えられるが、組織片として認められないために、炉内に植物体として混入したものか、周囲の土壌とともに混入したものかの判別がつかない。また、炉内の焼土が採取されているが、今回の試料は灰が含まれていない場所から採取されたと考えられる。

今後、燃料材に関する調査を行う際には、炉跡内の覆土には燃料材の灰が存在することも考えられるので、焼土ばかりでなく炉の覆土についても試料を採取することが望まれる。

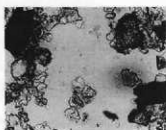
引用文献

近藤三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-64.

大越昌子(1985)プラント・オブール分析。平賀遺跡群発掘調査報告書, p.803-815, 平賀遺跡調査会。

佐瀬 隆(1982)古墳時代住居跡の炉に関する焼土について、一植物起源粒子の植物珪酸体から見て一。東京都埋蔵文化センター調査報告書(第2集), p.303-308, 多摩ニュータウン遺跡調査会

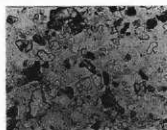
植物注液体分析プレパラートの状況写真



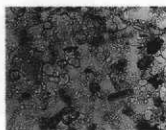
1. 状況写真 (RA06#焼土)



2. 状況写真 (RA07#焼土)



3. 状況写真 (RA08No. 1b#焼土)



4. 状況写真 (RA08No. 2b#焼土)



5. 状況写真 (RA02#焼土)



上甲子遺跡出土火山灰の化学特性

古環境研究所

上甲子遺跡出土火山灰の分析データは表1に示されている。このデータに基づいて作成したRb-Sr分布図とK-Ca分布図を図1と図2に示す。No. 1とNo. 2は出土層位は異なるのであるが、表1を見る限り、全因子で両者は類似している。したがって、少なくとも、両者とも十和田系火山灰であることに相違ないのであるが、十和田系火山灰の中のどれかと断定するにはなお、基礎データは少ない。出土土層から見て、十和田b火山灰の可能性を持つ。

表1

	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	推定結果
No. 1	0.343	1.09	2.12	0.251	1.01	0.776	十和田系火山灰
No. 2	0.208	1.22	2.09	0.119	0.915	0.732	十和田系火山灰

図1 Rb-Sr分布図

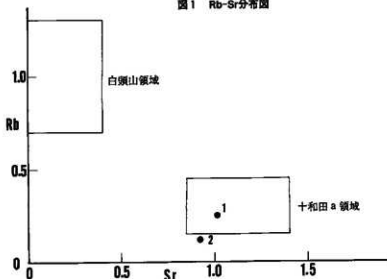
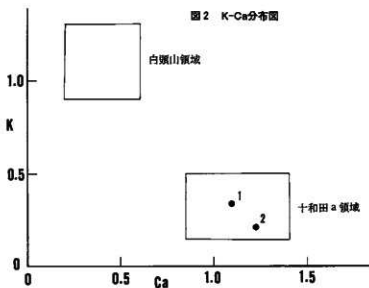


図2 K-Ca分布図



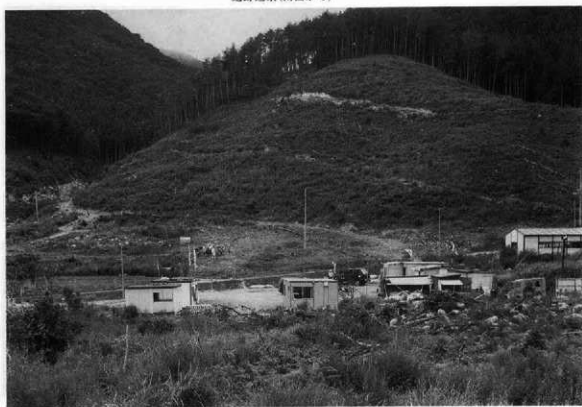
写 真 图 版



写真図版1 遺跡全景



遺跡遠景(南西から)



調査前風景(南西から)

写真図版 2 遺跡遠景・調査前風景



基本層序(第Ⅰ～Ⅲ層)



基本層序(第Ⅴ～Ⅷ層)



作業風景

写真図版 3 基本層序



RA01住居跡平面



RA01南北断面



RA01東西断面

写真図版 4 RA01住居跡



RA01床面出土土器



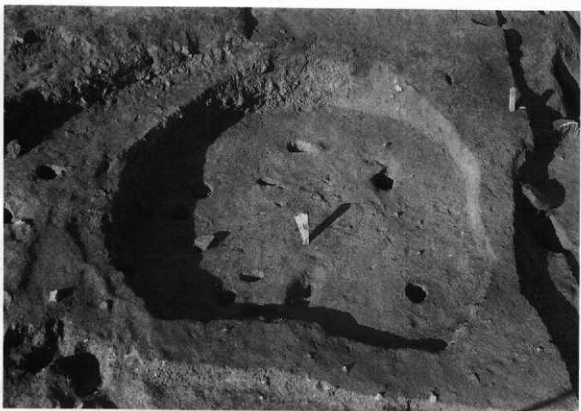
RA01地床部と立石



RA01立石部断面



RA01立石部の地下構造



RA02住居跡平面

写真図版 5 RA01・RA02住居跡



RA02南北断面



RA02東西断面



RA02地床炉と立石(南から)



RA02地床炉と立石(上・西から、下・断面)

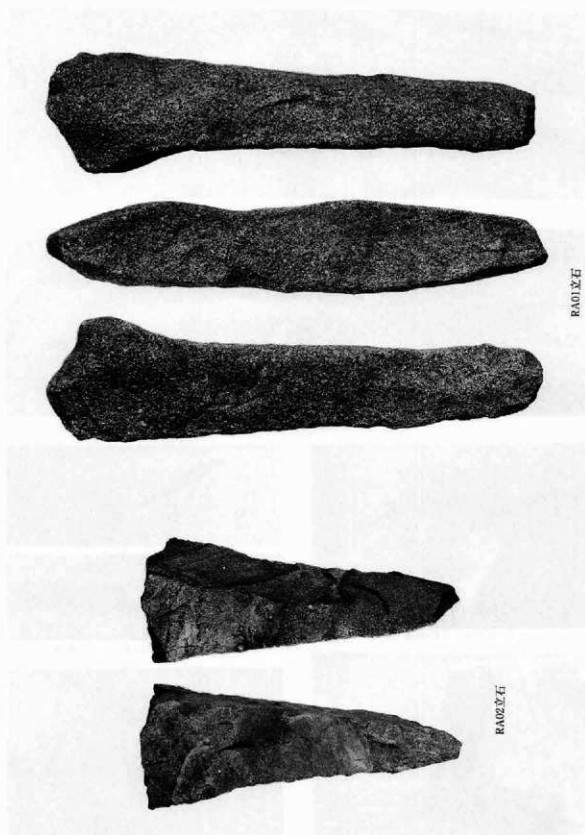


RA02立石部断面

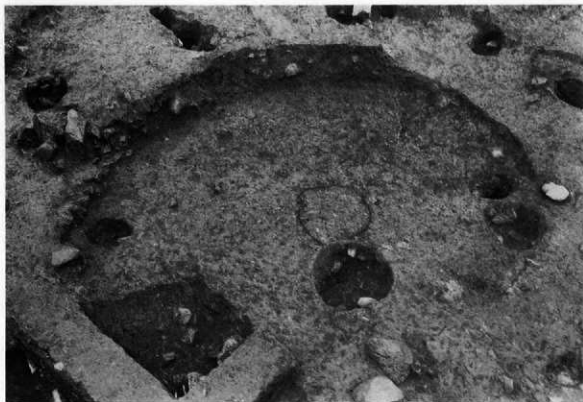


RA02壁際出土土器

写真図版 6 RA02住居跡



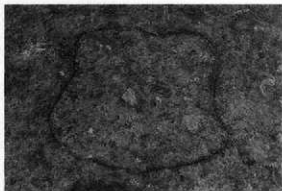
写真図版7 RA01・RA02住居跡立石



RA03住居跡平面



RA03東西断面

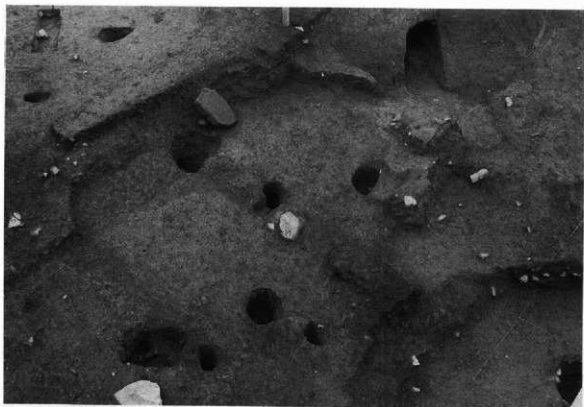


RA03地床伊平面



RA03地床伊断面

写真図版 8 RA03住居跡



RA04住居跡平面



RA04地床炉平面



RA04地床炉断面

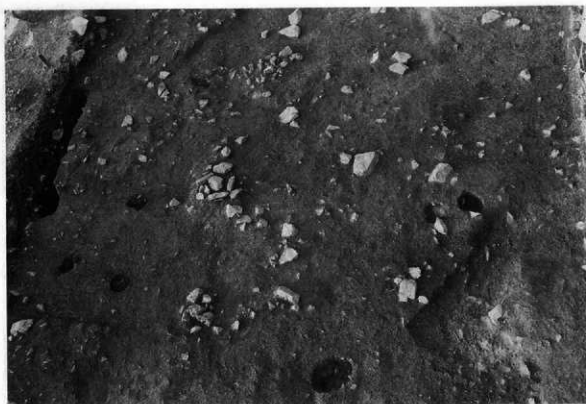


RA05地床炉平面



RA05地床炉断面

写真図版 9 RA04・RA05住居跡



RA06住居跡平面



RA06住居跡平面

写真図版10 RA05・RA06住居跡



RA06南北断面



RA06No. 1石囲炉平面



RA06No. 1石囲炉断面



RA06No. 2石囲炉平面



RA06No. 2石囲炉断面

写真図版11 RA06住居跡



RA07住居跡平面



RA07南北断面



RA07石囲炉平面



RA07石囲炉断面

写真図版12 RA07住居跡



RA08住居跡平面



RA08南北断面



RA08東西断面

写真図版13 RA08住居跡



RA08石圍炉平面(左・No. 1炉、右・No. 2炉)



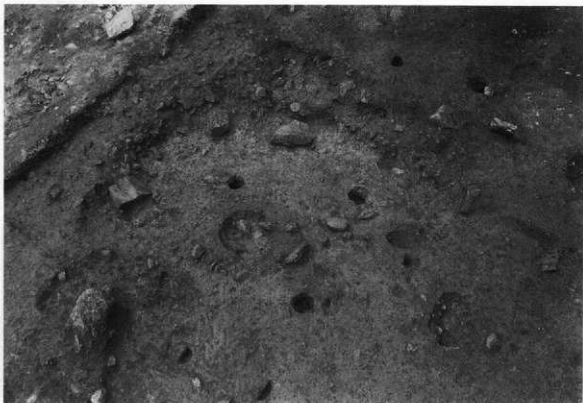
RA08石圍炉断面



RA08No. 1炉断面



RA08No. 2炉断面



RA09住居跡平面

写真図版14 RA08・RA09住居跡



RA09南北断面



RA09東西断面



RA09No. 1炉平面



RA09No. 1炉断面

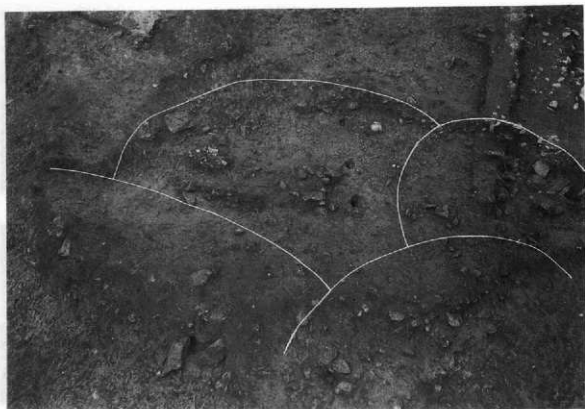


RA09No. 2炉平面



RA09No. 2炉断面

写真図版15 RA09住居跡



RA10住居跡平面



RA10南北断面



RA10東西断面

写真図版16 RA10住居跡



RA10石圓炉平面(左・No.1炉,右・No.2炉)



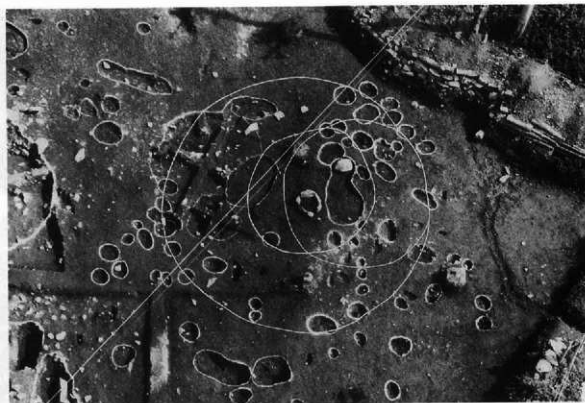
RA10No.1炉石圓炉断面



RA10No.2炉石圓炉断面



RA10床面出土土器



RA11住居跡平面

写真図版17 RA10・RA11住居跡



RA11東西断面



RA11南北断面



RA11石囲炉平面

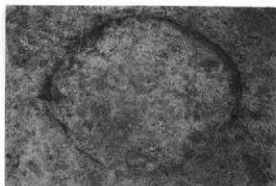


RA11石囲炉断面(焼土面)



RA11石囲炉断面(未焼面)

写真図版18 RA11住居跡



RD01平面



RD02平面



RD01断面



RD02断面



RD03平面



RD04平面



RD03断面



RD04断面

写真図版19 RD01~RD04土坑



RD05平面



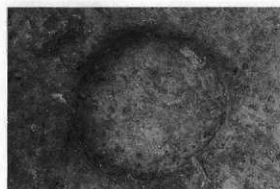
RD06平面



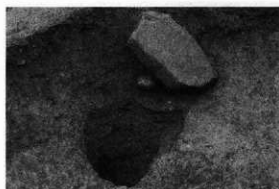
RD05断面



RD06断面



RD07平面



RD08平面



RD07断面



RD08断面

写真図版20 RD05~RD08土坑



RD09(左)・10(右)平面



RD09・10断面



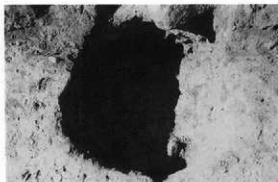
RD09断面



RD10断面



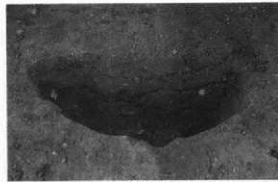
RD11平面



RD12平面



RD11断面



RD12断面

写真図版21 RD09～RD12土坑



RD13平面



RD14平面



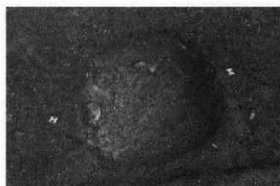
RD13断面



RD14断面



RD15平面



RD16平面



RD15断面



RD16断面

写真図版22 RD13~RD16土坑



RD17・18土坑平面



RD19土坑平面



RD17・18土坑断面



RD19土坑断面



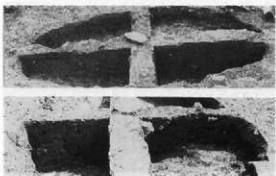
RD20土坑平面



RD21土坑平面



RD20土坑断面



RD21土坑断面(上・北から、下・西から)

写真図版23 RD17~RD21土坑



RD22土坑断面



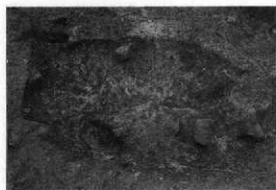
RD24土坑平面



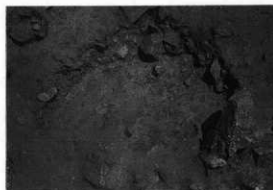
RD23土坑断面



RD24土坑断面



RD25土坑平面



RD26土坑平面



RD25土坑断面

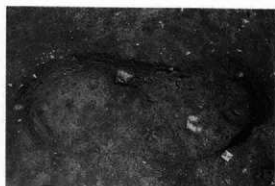


RD26土坑断面

写真図版24 RD22~RD26土坑



RD27土坑平面



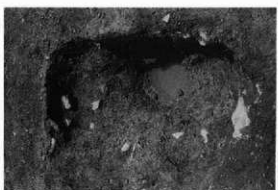
RD28土坑平面



RD27土坑断面



RD28土坑断面



RD29土坑平面



RD30土坑平面



RD29土坑断面



RD30土坑断面

写真図版25 RD27~RD30土坑



RD31土坑平面



RD32土坑平面



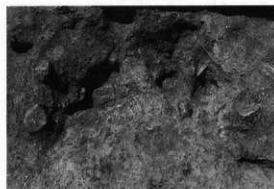
RD31土坑断面



RD32土坑断面



RD33土坑平面



RD34土坑平面



RD33土坑断面



RD34土坑断面

写真图版26 RD31~RD34土坑



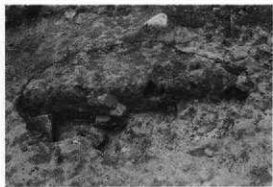
RD35土坑平面



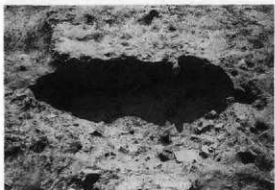
RD36土坑平面



RD35土坑断面



RD36土坑断面



RD37土坑平面



RD38土坑平面



RD37土坑断面(上・西から、下・南から)



RD38土坑断面(上・南から、下・東から)



写真図版27 RD35~RD38土坑



RD39土坑断面



RD40土坑平面



RD41(左)・42(右)土坑平面



RD40土坑断面



RD41土坑断面



RD43土坑平面



RD42土坑断面



RD43土坑断面

写真图版28 RD39~RD43土坑



RE01竖穴状遺構平面



RE01竖穴状遺構南北断面



RE02竖穴状遺構平面

写真図版29 RE01・RE02竖穴状遺構



RE02竪穴状遺構南北断面



RE02竪穴状遺構東西断面



RE03竪穴状遺構南北断面



RE04竪穴状遺構南北断面

写真図版30 RE02～RE04竪穴状遺構



RE05豎穴狀遺構平面



RE05豎穴狀遺構南北斷面



RE05豎穴狀遺構東西斷面

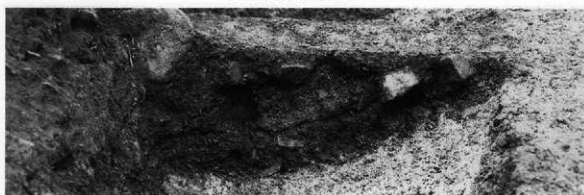
写真圖版31 RE05豎穴狀遺構



RE06豎穴狀遺構平面



RE06豎穴狀遺構東西剖面



RE06豎穴狀遺構南北剖面

写真図版32 RE06豎穴狀遺構



RF01焼土平面



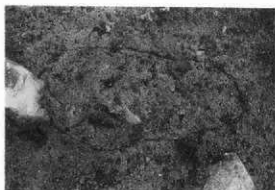
RF02焼土平面



RF01焼土断面



RF02焼土断面



RF03焼土平面



RF04焼土平面



RF03焼土断面



RF04焼土断面

写真図版33 RF01～RF04焼土遺構



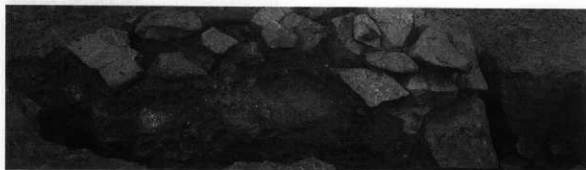
RF05焼土上面



RF05焼土断面



RH01集石平面



RH01集石断面

写真図版34 RF05焼土遺構、RH01集石遺構



RH02配石平面



RH02配石ベルト1断面



RH02配石ベルト2断面



RH03立石と焼土(手前)



RH03立石断面



RH03立石と焼土(右)

写真図版35 RH02、03配石遺構

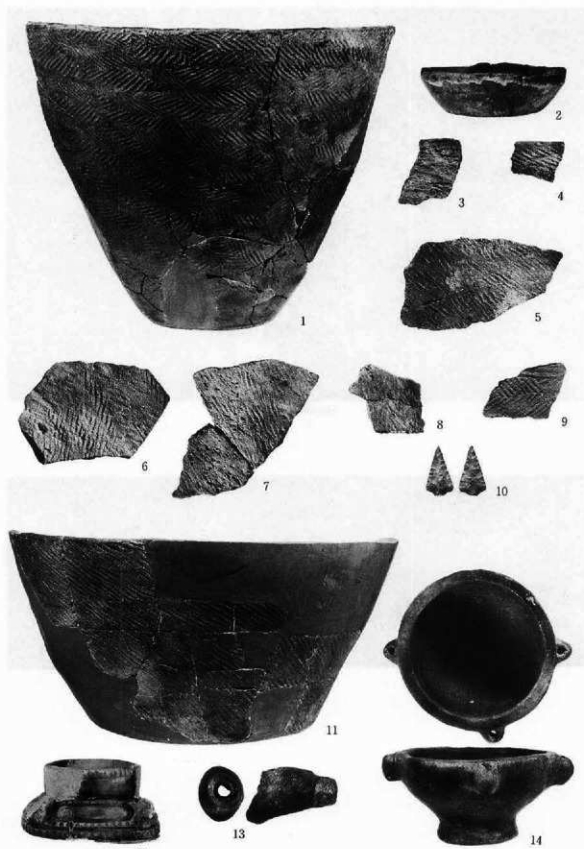


RH04集石平面

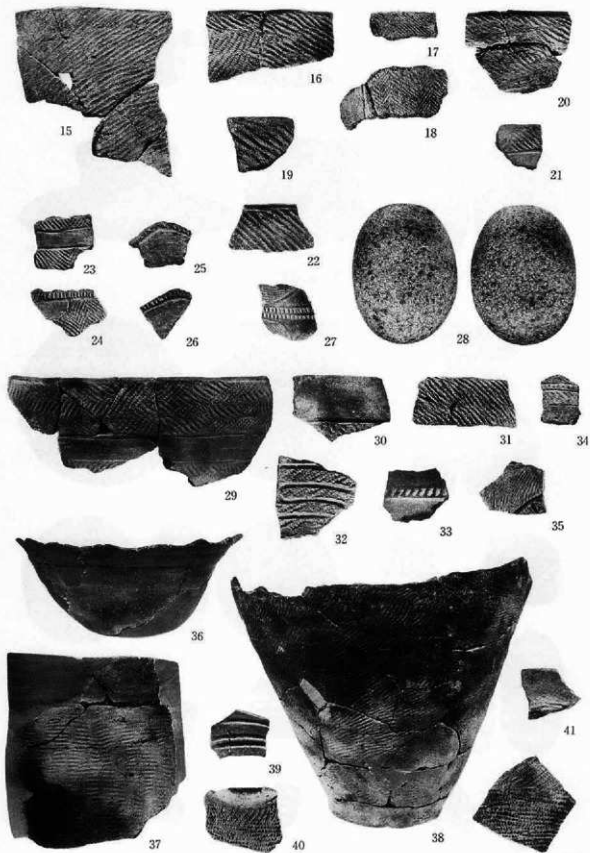


RH04集石断面

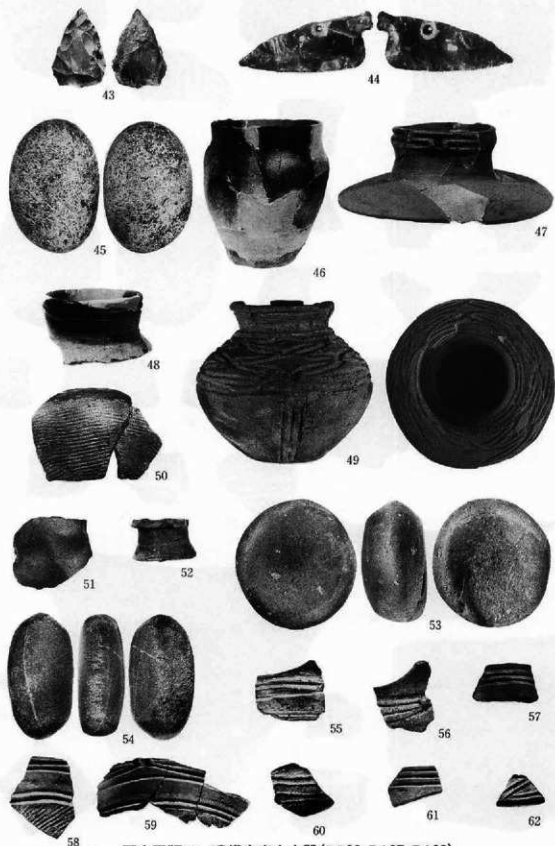
写真図版36 RH04集石遺構



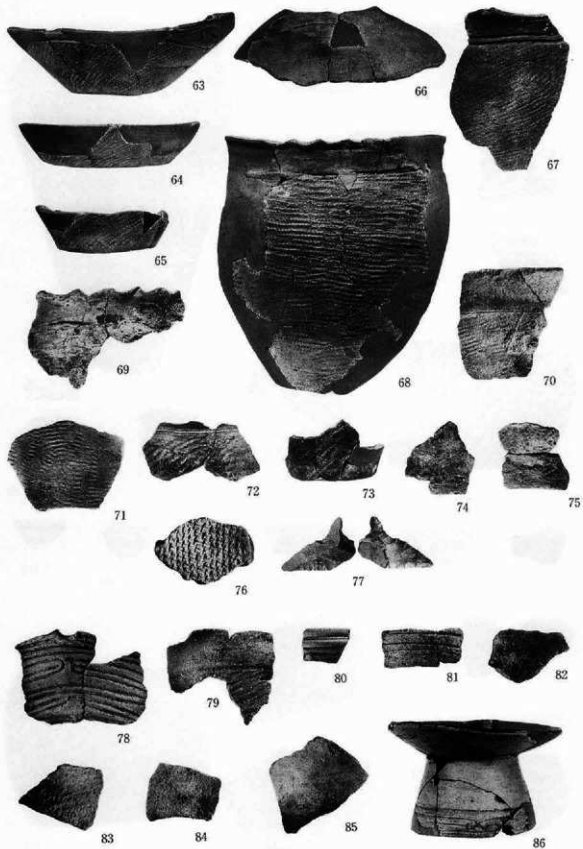
写真図版37 遺構内出土遺物(RA01、RA02)



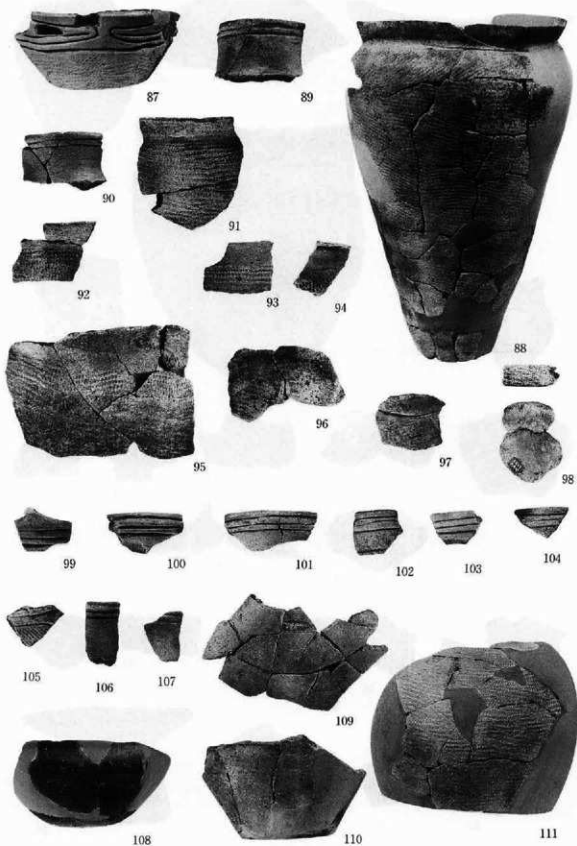
写真図版38 遺構内出土遺物(RA02、RA03、RA04、RA05、RA06) 42



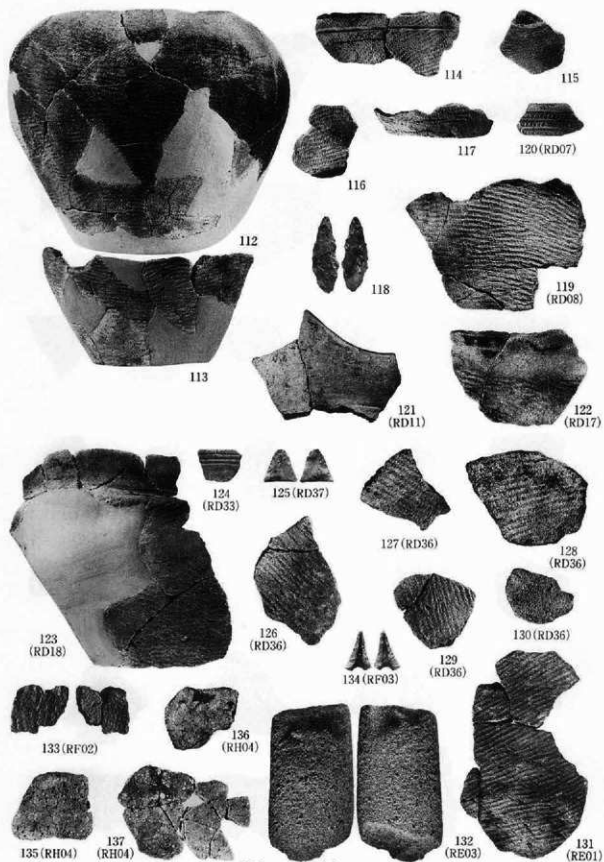
写真図版39 遺構内出土土器(RA06、RA07、RA08)



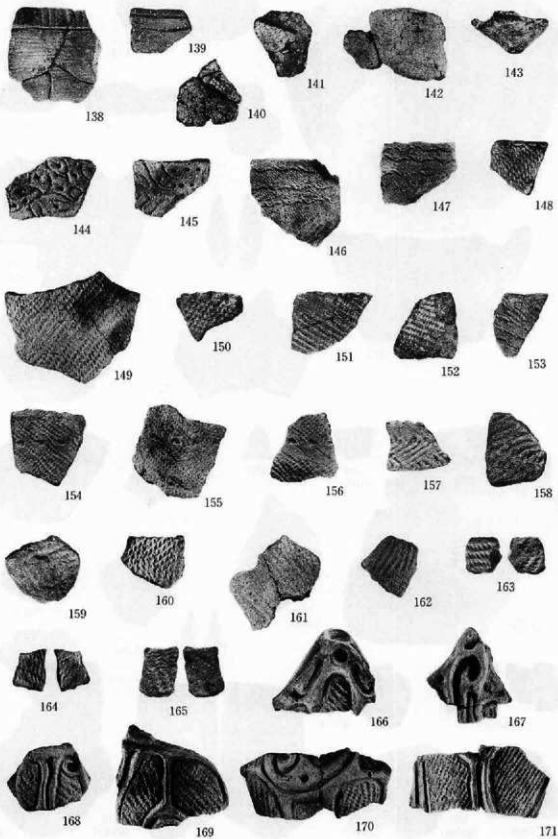
写真図版40 遺構内出土土器 (RA08、RA09、RA10)



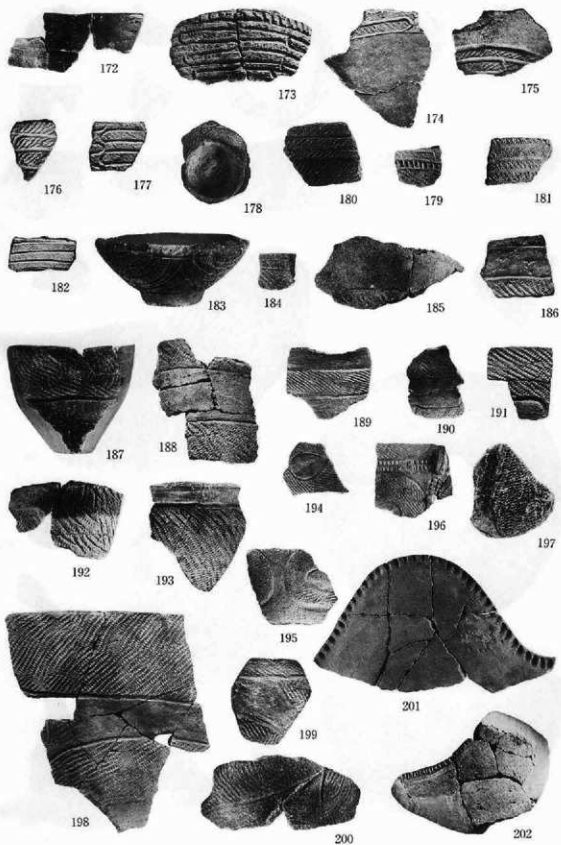
写真図版41 遺構内出土遺物(RA10, RA11)



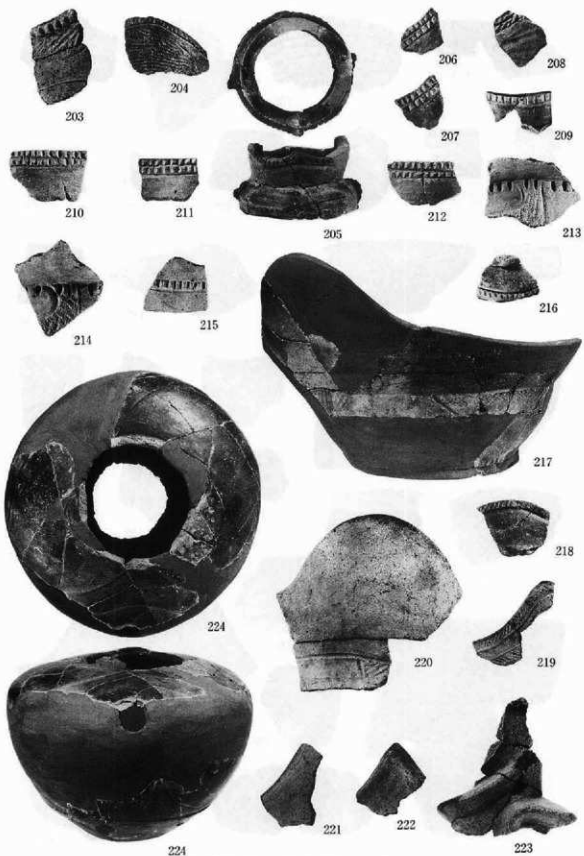
写真図版42 遺構内出土遺物(RA11,その他の遺構)



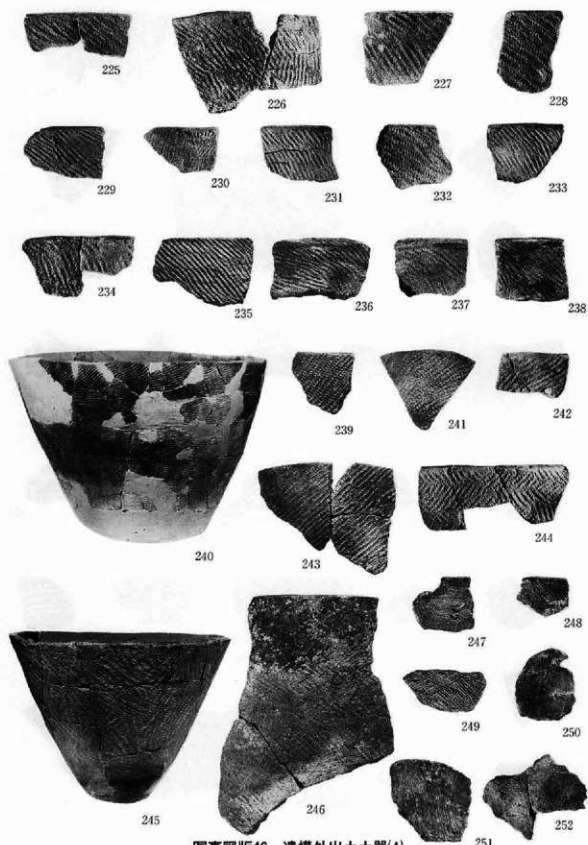
写真図版43 遺構外出土土器(1)



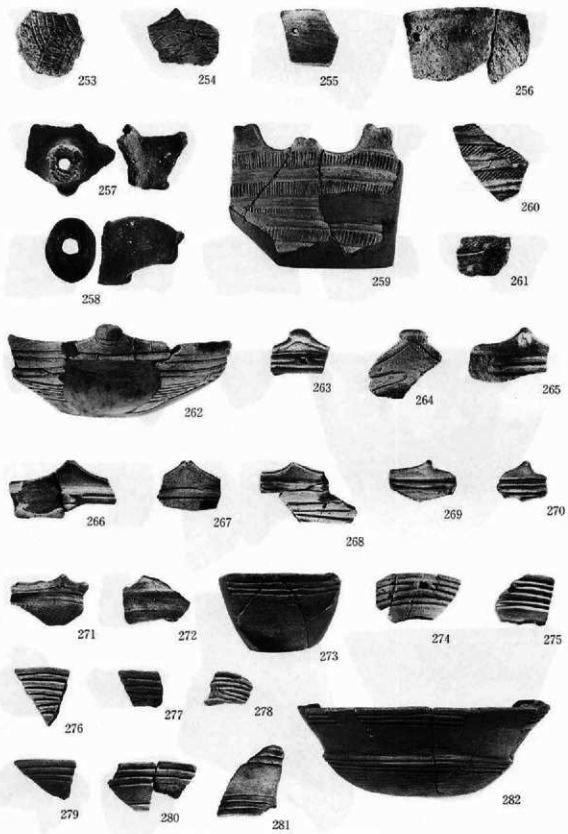
写真図版44 遺構外出土土器(2)



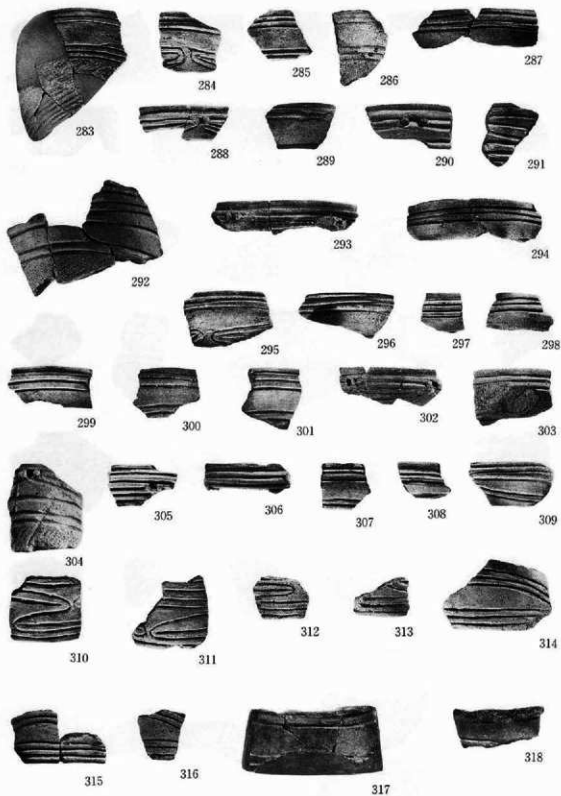
写真図版45 遺構外出土土器(3)



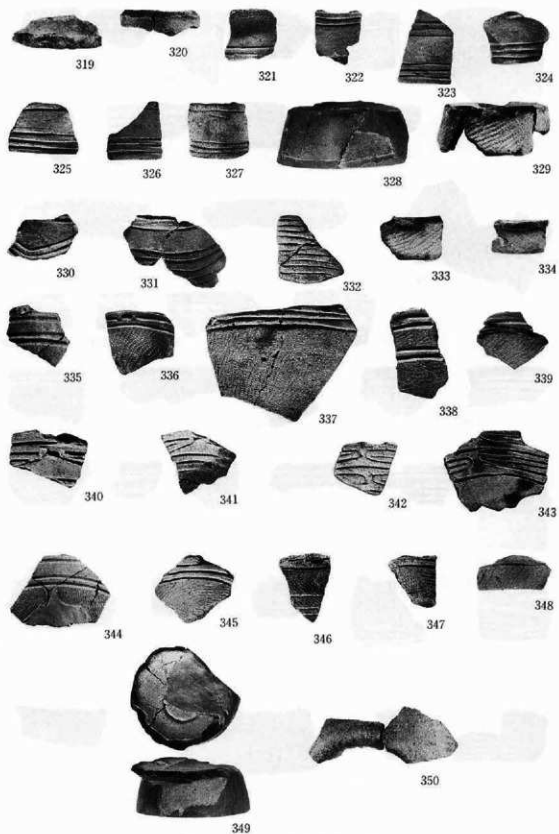
写真図版46 遺構外出土土器(4)



写真図版47 遺構外出土土器(5)



写真図版48 遺構外出土土器(6)



写真図版49 遺構外出土土器(7)



351



352



353



354



355



356



357



358



359



360



361



362



363



364



365



366



367



368



369



370



371



372



373



374



375



376



377

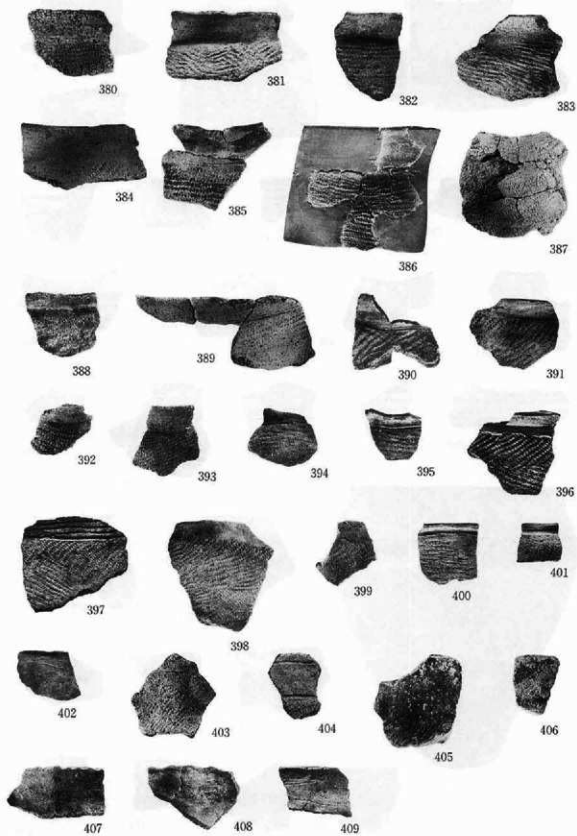


378

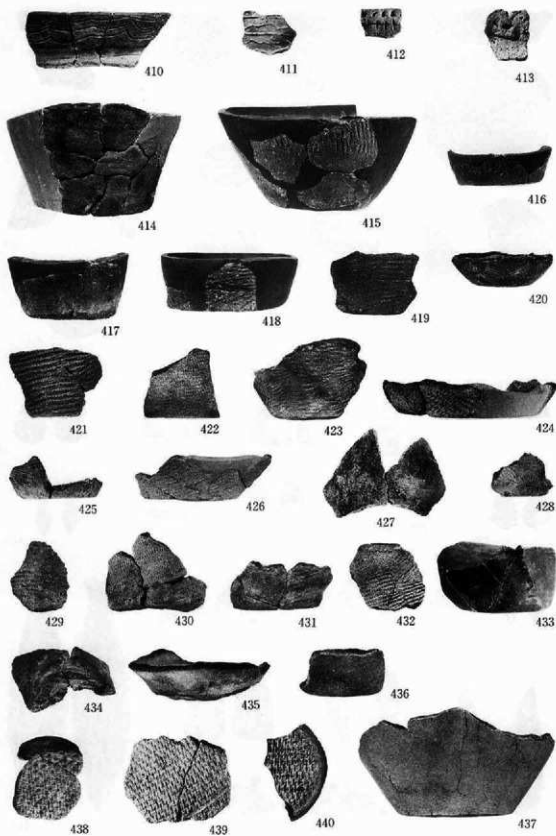


379

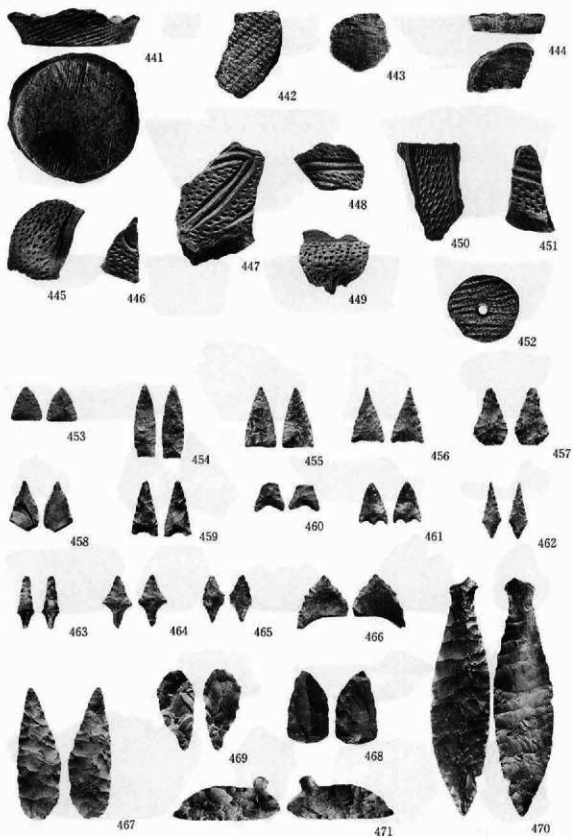
写真図版50 遺構外出土土器(8)



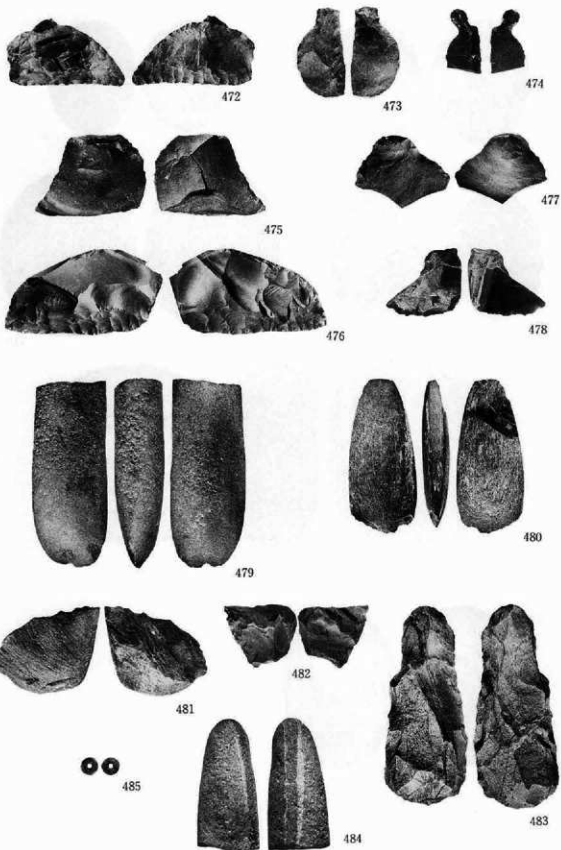
写真図版51 遺構外出土土器(9)



写真図版52 遺構外出土土器(10)



写真図版53 遺構外出土土器(11)・土製品・石器(1)



写真図版54 遺構外出土石器(2)



486



487



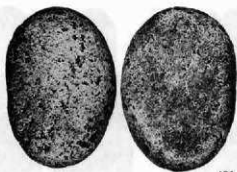
488



489



490



491

写真図版55 遺構外出土石器(3)

報告書抄録

ふりがな	かみかついせきはつちようほうこくしよ						
書名	上甲子遺跡発掘調査報告書						
副書名	蘆生ダム建設関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書						
シリーズ番号	第254集						
編者名	大道篤史・高橋興右衛門						
編集機関	岩手県文化振興事業団歴史文化財センター						
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL.019-638-9001						
発行年月日	西暦1997年 月 日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	°' "	°' "			
上甲子遺跡	岩手県大船渡市日頃甫町字上甲子1-1 ～612か	03203 NF18-0327	39度 5分	141度 43分	19940810 ～ 19941111 19950413 ～ 19950615	3,640㎡	蘆生ダム建設に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上甲子遺跡	集落	縄文時代 (早期後半～ 前期初頭、中 期後半、後期 中葉) 弥生時代初頭 (縄文時代晩 期末も含む)	竪穴住居跡 (縄文時代後期5棟、 弥生時代初頭6棟) 住居状遺構6基 土坑43基 焼土遺構5基 配石・集石遺構4基	縄文土器 (早・前・中・後・ 晩期、土偶) 弥生土器(初頭) 石器・石製品	立石を伴う住居跡2 棟を含む縄文時代後 期中葉の集落跡 弥生時代初頭の集落 跡		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 山 影 源 吉
副 所 長 鷹 羽 康 造

〔管理課〕

管 理 課 長 澤 田 寛
主 事 横 山 文 彦
◇ 千 葉 勝 彦

〔調査課〕

調 査 課 長 小 田 野 哲 憲
課 長 補 佐 高 橋 興 右 衛 門
◇ 工 藤 利 幸
主 任 文 化 財 員 中 川 重 紀
主 任 文 化 財 員 佐々木 清 文
◇ 高 橋 義 介
◇ 酒 井 宗 孝
◇ 菊 池 人 見
文 化 財 員 小 山 内 透
◇ 金 子 佐 知 子
◇ 松 本 建 速
◇ 菊 池 榮 壽
◇ 宮 本 節 子
◇ 下 田 隆 衛
◇ 濱 田 昭 宏
◇ 金 子 昭 彦
◇ 晴 山 雅 光
◇ 木 戸 口 俊 子
◇ 阿 部 勝 則

文 化 財 員	羽 柴 直 人
門 〇	星 雅 之
〇	高 木 見
〇	杉 沢 昭 太 郎
〇	大 道 篤 史
〇	瀨 浩 二 郎
〇	村 上 拓
〇	中 村 直 美
期 限 付 員	川 向 壘 子
〇	佐 藤 良 和
〇	篠 根 敬 志
〇	柴 田 慈 幸
〇	鈴 木 浩 二
〇	鈴 木 聡 央
〇	高 橋 実 弘
〇	平 澤 里 香
〇	山 口 俊 規
〇	山 下 浩 幸

〔資料課〕

資 料 課 長 菊 池 強 一
文 化 財 員 伊 藤 拓

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第254集

上甲子遺跡発掘調査報告書

鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23-27

電話 (019) 625-2323
